

終戦・被爆七十周年記念

戦争・被爆体験手記

〈総集編〉

戦争のない未来へ

〈子どもたちへの伝言〉



発刊にあたって

長崎に原爆が投下され、第二次世界大戦の終戦から七十年を迎えます。日本では、この間、大きな戦争もなく、平和だといえる毎日が続いています。

一方、世界に目を向けると、各地で紛争やテロが絶えることはなく、罪のない小さな子どもたちまでもが犠牲になるような悲劇が繰り返されています。また、地球上には、長崎に落とされた原爆より何倍も威力のある核兵器が、未だ一万六千発以上あるといわれています。

諫早市は、平成十七年九月に、「平和都市諫早宣言」を行い、非核平和都市であることを宣言しました。被爆県長崎の一員として、戦争や核兵器のない平和な世界の実現に向けて取り組むことが、私たちの責務であると考えています。

市内には、戦地へ出兵された方や、長崎で被爆された方、救援列車で運ばれてきた被爆者を救護された方など、多くの体験者がいらっしやいます。しかし、体

験者の高齢化や死去で悲惨な体験が風化していくことが心配されます。

平和な世界の実現のためには、まず、私たち自身が、戦争や核兵器がいかにも恐ろしいものであるかを認識し、戦争や原爆の悲惨な体験を次の世代に継承しなければなりません。

市では、被爆者の講話会などを開催するとともに、市民から体験談を収集し、「戦争のない未来へ」子どもたちへの伝言」と題して、ホームページで公開する取組及び冊子の発行を平成二十二年より始めました。

この冊子は、終戦・被爆七十年記念として、市の取組に賛同していただいた四十名の方の、ホームページで公開している体験談をまとめた総集編です。

今後もこの取組を継続して行い、平和な世界の実現のために、戦争や原爆の悲惨な体験を風化させないよう努めていきます。

最後になりますが、体験談をお寄せいただいた皆さんに、心から感謝いたします。

平和都市諫早宣言 「輝く未来 いのちのために」

わたしの願い

それは家族の幸せ 友の笑顔

みんなと生きる 楽しく生きる

そのために 世界を平和にしよう

争いを 核兵器をなくそう

永遠の平和

それはみんなの願い 地球の願い

輝く未来 つながるいのち

そのために わたしからがんばろう

友とちからを合わせよう

いま このまちからはじめよう

被爆地長崎のかなしみを忘れずに

優しいところ 尊いいのち

ひとが輝く諫早市

わたしたちは 非核と平和の都市を

宣言します

平成十七年九月二十九日 諫早市



平和都市諫早宣言広告塔と石碑（市役所本館前）

【参考】 県内位置図



長崎原爆の物理的被害



長崎大学原爆後障害医療研究施設提供

目次

戦争体験（海外、空襲、兵隊、引揚げ、他）	1
戦火をくぐりぬけて（中島 重雄）	2
シベリア抑留を生きのびて（中村 友三郎）	4
坂本中尉機とボーイング B 29	
―諫早ロータリークラブ卓話（昭和六十年七月二十六日）より（犬尾 博治）	17
私の戦時中の思い出（寺井 和恵）	27
私の戦時の生活と体験（西村 カズ子）	28
私は中学三年生で兵隊になった（中山 英記）	34
旧満州からの引揚げ体験（永島 美恵子）	46
小長井港沖 米軍機 B 29 引き揚げ（森 春義）	48
ビルマでの戦争体験（橋本 三四郎）	57
被爆体験（被爆、救護）	59
終戦前後（山口 悦夫）	60
私の被爆体験（橋本 利一）	68
戦争を知らない君たちへ（竹下 民輔）	72

私の被爆体験（小林 壽美）	78
私の被爆体験（吉野 ツギノ）	82
十五の夏（中道 義若）	85
私の被爆体験（山口 正則）	87
戦争と原爆についての体験（馬場 守久）	89
学徒動員中の被爆体験（江嶋 ミスエ）	93
私の原子爆弾被爆体験記（丸内 進）	99
被爆者救護にあたり（馬場 すづ子）	109
爆心地から二十五歳離れた諫早で目撃した「生き地獄」の忘れえぬ記憶（山口 忠喜）	113
原爆が落ちた日（吉川 湊子）	118
青天の霹靂―諫早史談第四十一号（平成二十一年三月発行）より（古賀 力）	121
早弁で助かった命（田代 一弘）	126
原子野を駆けて六十六年の想い（今白 卓司）	129
閃光を浴びた日（尾崎 正義）	134
諫早市原爆被爆者救護活動の記録より（昭和五十八年三月諫早市発行）	142
原爆の日によせて（野中 チトヨ）	143

布を切って包帯に（林田 アキノ）	145
被爆救護の思い出（原 シメ）	146
夢遊病者のように！（橋本 英子）	147
水は与えられない（川原 由基子）	148
被爆者を肩に支えて（池邊 翠）	151
コトボシを持って（立山 光重）	152
一人の女子青年団の記録（西村 ミツエ）	153
母の代りに救護町へ（真崎 マサエ）	158
精米機が止まって（山本 チミ）	160
町内会の指示に従い（園田 松枝）	161
脳裏に焼きつく三日間（上松 タツエ）	163
火葬（音瀬 信行）	165
五百人位の被爆者を（東川 ミサノ）	166

戦争体験

『戦火をくぐりぬけて』

中島 重雄（西栄田町）

私は、昭和九年にロタ島にて出生し、昭和十六年十二月八日に始まった第二次世界大戦の終戦（昭和二十年）までロタ島で過ごしました。

ロタ島は、当時アメリカの太平洋戦争における軍事拠点となっていたグアム島から約六十キロメートル、サイパン島から約百三十五キロメートルの位置にあり、常に米軍機の往来にさらされているという場所でした。当時、ロタ島は日本の占領下にあり、現地の人々に対して日本語教育がなされるなど、日本人と現地人との親交は非常に深いものでした。

私の父は東長崎の出身で、北海道から樺太に渡り、そこからロタ島へと移り住みました。父は、飲食店、娯楽施設、結婚式場などいろいろな商売を手がけ成功を収めました。

戦争が激化するにつれて、ロタ島にいた日本人は全員日本に帰るよう命令されました。そこで、船に乗るために栈橋まで行ったところ、そのときちょうど母がお産の時期を迎えており、「船の中で出産したら危険だ。」と言われ、船に乗ることができませんでした。しかし、我々が乗ろう

としていたその船は、出航直後に潜水艦による魚雷で沈没し、全員亡くなってしまうました。グアム島から近いため、アメリカの潜水艦に出航するのが見つかり爆撃されたのだと思います。私たち一家は、母が身ごもっていた妹のおかげで命を救われたのです。

爆撃を避けるため、多くの人が町から山の中へ逃げていきませんが、私の家族は母が出産直後だったため、一家族だけ一晩、町に残ることになりました。

兵隊が部屋の周りを布団で包み、銃弾が突き抜けないようにしてくれました。私たちは井戸に隠れるようにしてすごしました。翌日、母は担架で山へ運ばれ、私たちも防空壕へと移動しました。その後、生まれたばかりの妹は、防空壕の前で母に抱かれたまま亡くなっていました。たぶん、栄養失調だったのだろうと思います。

毎日毎日、道ばたにたくさん兵が倒れていました。大怪我をして助かりそうにない兵には、注射を打って安楽死させていました。グアム島からは毎日数え切れないほどの敵機が飛び立ち、日本本土攻撃の前にロタ島に一発ずつ爆弾を落としてから、本土への攻撃に向かいました。常に頭上には爆撃機が飛び交っていました。

小学校四年生だった私は、山の中にいた機関銃部隊から

海岸にいた海軍の大尉のところへ伝令をさせられました。兵隊と同じ役割を担っていたのです。

ロタ島は、年中暖かいところで、野菜や果物など食べ物が豊富にあり、食糧には不自由しませんでした。山の中で果物などを取ったり釜で芋などを炊いたりして食べました。煙が上がると敵に見つかってしまいうので、煙が上がらないように注意しながら調理をしました。

山の上の牧場から負傷した兵隊のところにも牛乳を運ぶ際には、広場のようなところを通らなければなりませんでした。同級生と二人、一升瓶で二本の牛乳を背負って運びました。すぐに敵機に見つかり爆撃を受けました。私は、岩にべったりと張りついて動きませんでした。同級生はずつと逃げ回って、とうとう爆撃を受けて亡くなってしまいました。このようにして毎日毎日、何人もの友達が亡くなっていき、同級生で最後に残ったのは私ただ一人になってしまいました。

平成二年に、妻とともにロタ島を訪れました。山の中を逃げ回った記憶をたどりながら島を探索しました。現地以案内人を頼みましたが、山の中のことは自分の記憶が鮮明に残っていて、案内人も驚いていました。

四百人近く入れる防空壕が今でも残っていて、現在は入口が封鎖されていました。不発弾等も多数残されています。現在、日本で不発弾が見つかったら大騒ぎになります。当時、私たちは手で持って運んでいました。

私たちは戦争により、言葉では言いつくせないような苦労や悲しみを経験しました。未来を担う子どもたちには、戦争の悲惨さ、平和の大切さを忘れないでもらいたいです。戦争は二度とあってはいけません。そのことを将来まで伝えていってもらいたいと思います。

(平成二十一年十二月 聞き取り)

『ズブリア抑留を生きのびて』

中村 友三郎（天神町）

一・私の徴兵検査

昭和十九年三月頃、戦況ますます激しくなつて、私は徴兵検査を受けた。近視のため第一乙種（兵役の区分の一つ）に合格し、兵科は歩兵（戦場を徒歩で移動する兵士）で、関東軍への入隊を申し渡された。満鉄育成学校卒業後、大連駅に勤務していたためなのか、理由は定かでないが入営延期になっていた。いつでも入営できる状態で勤務していたが、入営前に、郷里の島原市有明町の実家に帰省した。町内の方も家族とともに入営を祝ってくれ、「祝入営」の幟を持って氏神社に参拝、武運長久を祈願していただいた。また、子煩悩の母親は、私が軍人としての任務を無事に遂行し元気で帰還できるようにと、私と一緒に南風崎（佐世保）の神社と千々石町の橘神社に参拝してくれた。橘神社の桜はまだ幼木で、一・五メートルぐらいだった。土手には芝生が植えてあったので、そこで手作りの弁当をいただいた。

大連駅に帰り、勤務中の午前十時ごろ、敵機空襲のサイレンが大きく鳴り響いた。外に飛び出し上空を見上げると、

B 29 の爆弾が大豆の野積みの山に命中し大連埠頭方面に黒煙が大きいのぼっていた。一週間くらい燃え続け、急に緊迫感が強くなってきた。

昭和二十年五月、延期になっていた入営の命令が来た。職場での送別会や激励会等を開いていただいた。出発日の大連駅出口の大広場は、入営者を見送る人で大混雑だった。私も盛大な見送りの中で列車に乗りこみ、吉林經由で間島省五家子の歩兵二八〇連隊（満洲第四〇九部隊）に、五月二十二日入隊した。五家子駅まで軍曹殿が出迎えにきておられた。部隊兵舎は、周囲を小高い丘と山に囲まれた盆地内にあり、丘の向こう側はソ連領だった。

二・入隊から国境警備隊での状況

入隊一日間は「お客様扱い」で、食後に恩賜（天皇から賜ったもの）のたばこをいただき、「軍隊とは親切なところだな」と思ったのもつかの間、予想どおり翌日からは内務班でのおそろしく厳しい教育と、野外演習場での猛訓練が連日続いた。育成学校の教練で鍛えられていたので、あまり引けをとらなかつた。私は、幹部候補生を志願した。

六月下旬、私は、標高数百メートルくらいの丘にある国境警備小隊に配属された。国境線には双方鉄条網があり、その間隔は約十メートルで延びていた。時々、自動小銃を

持った長身で青い目のソ連兵士二名が巡回してくるのと対峙する不気味な場面もあった。ソ連の兵舎と兵士の動きは、晴天の日に肉眼でキャッチできる近距離にあり、味方の立哨ボックス（見張り台）の中の壁には、ロシアの陣地らしい場所の略図と要塞らしい場所が簡記されており、それによりロシア側の動静を注視していた。小隊の兵舎は立哨ボックスから五百メートルくらい下にあり、真夜中に「敵襲、敵襲！」と訓練の非常呼集がかかり、消灯下に完全武装しての出動訓練が頻繁におこなわれた。小隊長から呼び出しがあり、幹部候補生志願者について、希望兵科などを質問されたが、幹部候補生志願者全員、結局この件についてはそのままにされていた。

八月五日頃、突然ソ連の飛行機が降服勧告のビラを撒きはじめたので「これは何事か」と思ったが、古年兵が「デマ宣伝で攪乱しているのだろう」というくらいで確実な情報はなく、部隊本部から中隊長が巡視して来て「日本軍は目下ウラジオストック方面に向け進撃中である。いつ出動命令が出るかわからないので出動態勢でいるように」といって士気を鼓舞したが、食事も急に半分になった。

八月十日頃、ロシアの戦車が、土煙を上げて琿春市街こんしゅんの方向に進入して行くのが遠望でき、そこでロシアの参戦を

知った。やがて部隊本部も、戦車の攻撃で負傷者が出て搬送され、地下壕に収容された。高い陣地にいたので幸いにも直接攻撃は免れたが、兵舎の周囲に構築されたトーチカ（鉄筋コンクリート製の防御陣地）に小隊が分散して守備についた。部隊本部から援軍が増員されてきた。敵弾がプスプスと近くに落ちはじめた。脱兎のごとくトーチカに逃げ込み、銃口を敵の方に向ける。この状態が数日続き、古年兵が神妙に「もうこうなったら明日の命はわからない」と言い、「せめてこれでも腹いっぱい飲もう」と、砂糖水を一升瓶に作ってきてくれたので心から感謝して飲んだ。暑い最中でもあり、大変おいしかったことは忘れられない。敵の刺激を避けるためか、積極的な攻撃は取っていないかった。

八月十五日の終戦の詔勅みことのり（天皇の意思表示）もわからず状況不明だったが、十六、十七日頃に、「後方に撤退せよ」との命令が、先に撤退していた部隊本部から無線で入ったとのことだった。しかし、敵はどんどんこちらへ進撃してきて、我々は包囲された状態だったので、ただちに完全武装し、食糧は乾パンなどを雑のうにいっぱい詰めて出動準備をした。分隊長の話では、我々の退却後、敵から兵器を利用されないように主な兵器は井戸の中に投げこんだそう

である。負傷兵を励まし別れを告げ、全員断腸の思いで撤退する。なんと痛ましいことか、出発後しばらくしてドカンドカンと炸裂音が聞えた。負傷兵が自爆したようで、戦争の悲惨さを痛感した。

どの方向に行くのか全く知らされないで、上等兵と一緒に先発斥候(敵の状況や地形などを探ることを命ぜられ、林の中で周囲を注視しつつ全身緊張。途中、日本軍の退却した跡を通って前進した。ここは日本軍の陣地だったらしく、塹壕の中には水筒、飯ごうなどが散乱して、いかに慌てふためいていたかを感じた。ロシアの兵士と二回遭遇したがなんとか通り抜け、豆満江の岸边に夕闇に包まれる頃に到着した。今になって考えると、凶們付近ではなかったかと思う。川を泳いで対岸に渡る計画が小隊長から指示された。どうやら対岸にはロシアの軍隊がすでに進入している想定のもとの行動だった。

暗闇の中を、武装したまま第一分隊が渡りはじめたが、予想以上に深いのと急流のためすぐ引き返したのである。そこで小隊全員が武装をはずして、丸裸で、ふんどし一枚小銃を肩にかけ泳ぐ。それで腕時計、眼鏡、現金、郵便局の貯金通帳など貴重品はすべて背のう(リュックサック)の横に置いたままだった。私は、日の丸の旗と千人針を体

に巻き泳いでいたが、川の中程で銃の負皮で首を圧迫され、耐えきれず苦し紛れに銃を手放した。やっと泳ぎ着き、木の根やかずらに必死でつかまって這いあがり、九死に一生を得た思いだった。小隊長は日本刀を高々とあげ、「小銃を持つてあがった者は手をあげろ」と言ったが、手をあげた者は誰一人おらず、ホツとした。戦が続いていたら大変な処罰を受けたらうとゾツとする。向こう岸に置いたものを、筏を組んで取りに行きたいが、「希望者はいないか」と隊長が言ったが、誰もいなかったようだったのでどうなったか記憶していない。八月でも夜は冷えるので着物をもらいに近くの朝鮮人宅に数人行き、吠(わらむしろを二つ折りにして作った袋)をもらって来たのでその中に入り一夜を明かした。

翌朝、親日派らしい朝鮮人が来て、日本の無条件降伏で終戦となったことを教えてくれた。信じられなかった。勝利を信じて戦ってきたのに神風も吹かなかった。だが事実だった。虚無感と疲労でぐったりとなった。泳ぎきれずに引き返した者はどうなったのかわからない。小隊長は、穴を掘って日本刀を埋めたと聞く。そして「今後諸君は、二、三名で気の合う者同士で組み、京城を目指して歩き米軍に投降せよ」と訓示した。そして各自、護身用に手榴弾一発を受取り、終戦を知らせてくれた朝鮮人が持ってきてくれ

た古着を着て、西へ東へと解散した。もう名前も忘れたが、私は初年兵三名で組み、近くの朝鮮人の民家を訪ねたところ、まず麻の古着の胸に赤い小さな布きれをつけてくれた。「これで道路を歩いていてもロシア兵や金一成の軍隊にあやしまれない」とのことだった。

方角が皆目わからない。まず清津^{せいしん}を目標に、裸足で畑の野道を歩いた。人目を避けながら畑のばれいしよや玉ねぎなどをもらい、生でかじり飢えをしのいだ。八月の末の北鮮の山林はだいぶ冷え込むので、こっそり民家を訪ねると、日本の兵隊と察してか、「どうぞお入りください」と温かいオンドル（床下暖房）の上に寝かせてくれ、翌朝は、温かい黄色の粟ご飯を洗面器のような容器に山盛りし、キムチなどをおかずにごちそうしてくれた。腹いっぱいいただき、ありがたくて涙が出た思いもある。田舎は一応平穏を取り戻ってきて、女の人が大きな水がめや品物を頭に乘せ、柳腰（細くしなやかな腰つき）で歩いている姿もちらほらと見かけた。道に迷い、棒を立て倒れた方角に歩いたり、夜は山中に野宿し、「日本はなぜ負けたのか」と三人手を握り、男泣きに泣いたこともあった。

十日くらい厳しい逃避行を続けたが、「とにかく大通りに出よう」と、何食わぬ顔で朝鮮人の群れと一緒にあって国

道らしき道を南下しているとき、ロシア兵の散兵線（歩兵を散らばらせている隊形）にひっかかり、二人のロシア兵が近寄ってきて、着剣した小銃を目の前に突きつけた。剣先はキラキラと青白く光っていた。ここで万事休す、三人一緒に手をあげた。手榴弾は、日本が負けたと知ってから「自爆しても犬死だ」と、山中で処分していたのでよかった。一瞬殺されるかとドキッとしたが、早速駆足を命じられた。約二十分走った。駅名は忘れたが田舎駅だった。しばらくして、日本人の避難民を満載した無蓋車（^{むがいしゃ}屋根がない貨物車）を七、八両連結した列車が到着した。乗車を命じられたので急ぎ飛び乗った。到着した駅は清津駅だった。下車し、また徒歩の後、着いたところは元清津刑務所で、板張りの六畳ぐらいの部屋に三人一緒に入れられた。ここが恥かしながら捕虜生活（強制抑留）の始まりだった。そして一週間ぐらいて清津の約千人収容の収容所に移動した。清津港で大豆の荷役（荷物の上げ下ろし）作業に従事した。

まだ敗戦の精神的な打撃も消えないころ、大変ショッキンクな事件があった。収容所は、旧軍隊時代の幹部下仕官と通訳による本部があり、ソ連側の指示で動いていた。ラーゲル（収容所）の四隅に高いやぐらがあり、自動小銃を

持ったソ連兵が常に監視していた。だが、逃亡兵が出て二名逮捕されたようで、「全員集合」がかり大広場に整列、直ちに経過の説明があり、その後見せしめのためか、全員の前で処刑された。二人はラーゲル内の土手の上に立たされた。息をこらして見ていると、ソ連側の狙撃兵により射殺せられた。二人が両手を高く上げてバツタリと倒れるのを三百メートルくらいの目前に見て、言葉にいけない思いに打たれた。担架で運ばれて来た二人を軍服の女医が脈をとり、死を確認していた。一瞬ざわめきの声があがったがすぐ止んだ。両手をあげたとき二人は何と叫んだのだろうか。「天皇陛下万歳」だろうか「お父さん」「お母さん」か。あるいは愛する妻子の名前だったろうかと、二人の兵士のことかしばらく話題にのぼっていた。

このラーゲルに収容された時、私の貴重品は皆無だった。豆満江を泳ぎ渡るとき、眼鏡、時計などの貴重品はいつさい岸辺に残したままだった。筆記具も持っていなかった。同僚の中には、まだ隠し持っていた者もいたが、ソ連兵からたばこと交換させられたりしていた。作業はほとんど清津港で大量の荷役作業だった。日本苦力といった格好で、重労働の連続だった。最も辛かったのは、食事が質、量ともに最低だったことだ。朝食は、大豆と高粱コウリヤン混合の粥を飯

ごうの四分の一くらいで、昼食も朝食と同じで量が少し多いくらいだった。夕食は黒パン三百五十グラム一枚に、乾燥野菜のスープが飯ごうの四分の一と砂糖大さじ一杯くらい。一日分のカロリーは約八百カロリーくらいで、人間生きるための必要最低限だったのではないだろうか。おまけに消化不良で大変だった。ラーゲル内で腸チブス患者が発生、数十名の犠牲者が出たと聞いた。

「冬来たりなば春遠からじ」の言葉どおり、厳寒の北鮮にも春が訪れ、昭和二十一年四月だったと思うが突然移動命令が出た。行先不明、それも途中は小休止ぐらいで不眠の強行軍が続く。途中誰かが、「張鼓峰事件チヤウコウコウがあったのはこの付近だった」といった。豆満江の架橋を通過してソ連領に入った。夜になって市街に入ると、ソ連兵が百名ぐらい先頭に立ち行進していた。ソ連の軍歌らしきものを高らかに歌いながら堂々の行進で、こちらは荷物を背負いクタクタになっているのに、ソ連兵は凱旋祝の行進をしているように、捕虜としての屈辱感ががっくりとなり、夕闇の中を歩くのがやっとなかった。そこがどこだったのか記憶にない。翌朝、なだらかな草原に着いた。テントを張り一週間ぐらい野営する。付近には雑草が芽をふいていた。食用になる草をつみとって、生か飯シカ飯ごうで湯がいて食べ、ビタミン

Cの不足を補った。どうやらウラジオオストックの近くだったようだ。やがてウラジオオストックのラーゲルに移動した。

三・ウラジオオストックのラーゲルにて

このラーゲルもテント屋根で、木製の二段ベッド。一棟に四十名収容され、ラーゲルの面積も広く、テントも整然と建てられていた。すでに先着部隊がいた。ウラジオオストック市街の高台地区で、旧軍隊の混成部隊であった。長崎県出身者は自分のほか三名で、言葉のなまりからすると関東、東北方面の人が多かった。幸い入浴散髪の仮設備もあり、日本兵によって行われていた。

作業は、ウラジオ港埠頭の倉庫内で小麦粉缶詰等の荷役作業を行った。夜間作業もあり重労働で腹ぺこになり、小麦粉の袋の破れ目から、ソ連兵や監視人の目を盗んで粉を出し、暗がりの中、水道水でかき混ぜて団子を作り、生で食べて空腹を満たした。大勢の中には要領がよく、とんちがきく人もいるものである。もちろん見張人をつけての実行である。缶詰はどうにもならなかった。

毎日トラックで現場へ往復した。冬になると、港はかなり沖まで凍結してトラックも走行していた。凍結したところに穴を開け、魚を釣っている光景を見た。北満で軍隊生活をした方や経験された方は、極寒の地の状況をご存知の

方もおられると思う。人糞の処理はツルハシやスコップ、モッコ（荷物を運ぶ道具）などがあれば簡単だ。私は二度目の経験を交代で行った。昭和二十二年の一月だった。雪の日だったが、マイナス四十度以下にならないと作業中止にならない。当日雪がちらほら降っていたが作業中止にならなかった。埠頭に着き、しばらくして野外作業をしていると、視界ゼロの状態と豪雪で作業中止。埠頭事務所に分散収容された。常に体や手足を動かし、急にストーブで温めないように大声で注意されたが、数十名が凍傷にかかり大騒動になった。幸い、私は無事だった。

厳寒と重労働と飢えに耐え、先行き不安感でいっぱいの日々が続いたが、やがて春が来た。四月頃からウラジオ市内で赤レンガが作りのビル建築工事に従事した。私は、はじめ一階部分で、回転ミキサで仕上げたモルタルを手押し車（ターチカと呼んでいた）で運搬する作業と、レンガ積みで左官の補助役をした。左官さんは四十代のベテランで、仕事が速かったので驚いた。色々な職業の人がいて、技術者は大変重宝がられた。これをソ連は上手に利用した。だんだん建築の階が高くなるにつれて、今度はターチカによる屋上部での赤レンガの運搬だ。ここではソ連の監督（ナチャニク）が采配をとっており、大変厳しく、怠けるこ

とはできなかつた。夏の炎天下の作業は、本当に大変で汗と涙の苦闘だつた。でも「日本の土を踏むまでは」と頑張つた。

この苦しみのとき、私には突然の朗報があつた。それはハラショーラポータ（よく働く労働者）ということで一週間の特別休暇が与えられたのだ。そのことが全員朝礼のとき紹介された。八畳ぐらいの個室が与えられ、スチール製のベッドに羽毛布団で、食事も米飯の特別食で、驚きと嬉しさが交錯した。おかげさまで久しぶりに十分休養ができた。ラーゲル管理のソ連将校が巡回してきた。「働かざる者は喰うべからず」の格言があるソ連でも、よく働く者は優遇されるらしい。私の特別休暇の件は、ラーゲル内の日本軍本部の推薦だつたと聞いた。

ソ連の労働者にはノルマが定められており、一日あたりの達成枠により給料が支給されていた。詳細は不明だが歩合給と同じのようで、勤労意欲を高めるためかなりの悩みがあつたようだ。ソ連では私有財産も認められていないと聞いた。この頃から、ソ連側は、我々に共産主義の教育を働きかけてきた。捕虜向けの日本語新聞が発行され、掲示板に張り出された。日本捕虜本部の方も、いつのまにか民主的運営組織に移行されて、気がつくとい旧将校の姿もほと

んど見られなくなつていた。この頃、日本の地の終戦時の様子が伝わってきた。「広島と長崎はB29の新型爆弾で全滅した」とかデマも飛びはじめ、大変不安にかられた。

とにかくよく働き、迎合（けいごう他人に調子を合わせる）することが、一日も早く帰国する方法ではないかと思つていた。しかしそうではなかつたのだ。食べ物も相変わらず最悪の状態が続いた。栄養失調で病弱者が続出し、十分に働けない者を先に帰国させた。時々、ソ連軍医による検査があつて病弱者を指定していた。栄養失調になると体に紫色の斑点が出た。体重も減少し「骨皮筋エ門」の言葉が当てはまる人も出始めた。

赤レンガのビルもだいぶ高くなつてくると、作業場も市内各地に分散するようになり、私は木造の家屋を建てる大工班となり大工さんの助手となつた。これもズブの素人だから大変だつた。しかし大工さんは大変温和な人で助かつた。二階で床板一枚の上をあちこち動き回るときは恐ろしくて、ビクビクのへっぴり腰だつた。踏みはずすと一階まで落下して大事故になりかねない。近視で眼鏡を持たなかつたが、よくも無事故で過ごしたものだと思つている。ときどき幹部が回ってきて「人間で大工と泥棒の気がない者はない」と言つてハツパをかけた。私は苦手の仕事だつた。

夜に床についてから同志の会話はもっぱら食べものの話で、「帰国したら、まずは米の飯を腹いっぱい食べてみたい」「おかずはたくあん漬けと梅干で十分だ」と、これが人間最低の生活をしたものしか味わえない心からの叫びだった。そしてお国自慢の名物料理の話に花を咲かせた。

ストレス解消のためには、塩が人間にとっていかに貴重な存在であるかをこれほど強く感じたことはなく、夏は格別だった。要領のよい者はどこで入手したのか、食事のとき取り出してお粥の上にばらばらとふりかけて食べていた。スプーン一杯のお粥と一グラムの塩に皆の目が集中する。飽食と美食の現代人にとっては到底想像しがたく、また実行もできないと思う。また愛煙家にとって煙草の一本も支給されないのは耐えられないストレスだったようで、檜の木の葉を乾燥させて新聞紙で巻きシガレットを作り吸っている者が多かった。私は、入隊前から煙草は吸っていないかった。入隊して初年兵のときは、食後の恩賜の煙草を一本ずついただいたが、とてもとても吸えなかった。一番早く食缶をつかみ取るのだけをただ考えていたので、火をつけるのが精一杯だった。

内務班での動作が昇進に影響するため、みんなが必死だった。昭和二十一年十二月から二十二年二月頃の冬期にか

けて、ソ連側は、共産主義思想の教育宣伝をさらに積極的に進めてきた。ウラジオストク港内に停泊している輸送船を利用して、人員と期間を定め教育しているとの情報がチラホラ入ってきた。はからずも、私は一カ月か二カ月ぐらいだったと思うが勉強させられた。二十名ぐらいの人員で教師は旧軍隊の下士官クラスのように、ソ連側の教育を受けているのではないかと思った。場所はウラジオストク市内で木造の学校のようなだった。重労働から開放され食事も普通食で、九時から十七時までだった。B5版の千ペーヅぐらいの教科書をその期間渡された。内容は唯物論にはじまり、マルクス主義にレーニン、スターリンのこと、ソビエト連邦共和国成立までの経緯、国内事情、コルホーズ（集団農場）のことなど多岐にわたっていた。今はもうほとんど忘れてしまった。帰国の命令が出るまで、何でも命令に服従する以外に方法はなかった。今考えると、社会学の勉強ができたのではないかと思っている。

昭和二十三年三月頃、急に移動命令が出た。ウラジオストクから有蓋車（屋根つきの貨物車）に乗せられた。行先不明で、窓が閉めてあるので、どこへ向かって走っているのか全然わからず、「帰国ではないか」とのデマも飛んでいた。トイレ以外は停車なしで二十時間ぐらい走って、列車

は農村地帯で小さな駅に停車、皆で下車すると、分散して
コルホーズ内のラーゲルに収容された。私たちは百名ぐら
いで古い欧風の建物で農作業に従事した。もちろんソ連兵
の監視はあり、山もなく広大な平野は満洲大陸の平野を思
い出した。農地は一単位が五町歩（面積の単位。一町歩＝
約一ヘクタール）くらいと聞いた。最初は、ばれいしよ畑
の草を長柄の鋤で刈取って行ったが、一往復でもう日が暮
れてしまった。耕耘は国営のトラクターステーションから、
大型トラクターが来て耕していた。夜間になっても轟音で
作業していたが、明け方になると、五町歩ぐらい完了して
いるのには驚いた。耕耘した畑には、ばれいしよの種まき
をおこなった。機械で畝うねを立てたあとに、私たちは種を入
れたかごを首にかけ、ぼとりぼとりと落としこみ、土を足で
かけた。掘り取り作業も機械で行っていた。驚いたのは小
麦の刈り取りだった。大型スレッシヤーで穂を刈り取り、
脱穀して残った茎は火を着けて焼き払うのだ。当時として
はかなり進んだ大型機械化農業だった。すばらしさを見せ
つけられた感じがした。これも各種条件がそろっていない
とだめである。

当時、コルホーズでの農民は、一般労働者と違って労働
時間の制約がなく、そのため給料が一定せず、作物収穫の

成果による出来高払い制度のようで、我々もいくらか悠長
な雰囲気であったが、かえって長時間働くこともあった。
食事はあいかわらず少なかった。キャベツも相当栽培され
ていたが、どこへ出荷されるのか、我々はまったく食べた
ことがなかった。真っ赤な太陽が地平線の彼方に沈むころ
も、小麦の茎はまだ燃えさかり、この光景に見とれ、望郷
の思いにかられているとソ連兵の歩哨ほしやう（監視役）が集合を
命じ、宿舎へ帰るといふような毎日が続いたのです。

四・山奥のラーゲル（地名不明）にて

このコルホーズから同年七月頃にまた移動命令が出た。
今度はトラックで約三時間走ったら、ラーゲルがあった。
先着組がかなりいて、ウラジオストックのラーゲルで一緒
だった人と逢い、健在を喜びあった。主に山林を伐採して
道路を造る作業をしていた。我々はバラックの造りで仮住
まいだったが、しばらくして宿舎の増築が行われた。周囲
は広大で、赤松の大木が林立していた。松の木を切り倒し
丸太を柱や壁材にし、壁の中にはオガクズを三十センチメ
ートル幅ぐらいに詰めこんだ。シベリアでは一般の木造住
宅でも厳冬の保温の知恵としてこの工法が取られていた。

総員八百名ぐらになつたが、ラーゲルの四隅のやぐら
の上からは、あいかわらずソ連兵の厳しい監視が続いてい

た。本部は民主的な運営が行われるようになり、委員長の下に広報宣伝、青年部長の幹部が数名と通訳や軍医もおられた。

私はあるとき、左足の甲に「できもの」ができて腫れあがったが、麻酔なしで切開手術を受けたことがあった。委員長は東北出身で、復員後はシベリア抑留者のためにいろいろ活躍されていたようだったが、お名前は忘れて思い出せない。旧日本軍人で編成された慰問団がラーゲルを訪れ、仮設の部隊でギターやバイオリンで演奏して歌手が歌った。五年ぶりに生演奏を聞き、感動し溢れる涙が止らなかつた。この一座の中に三波春夫さんがいたのではないかと思われるが、定かではない。捕虜のすさんだ心をなごませるため、労働意欲を高めるためのソ連側の一手段だったようだった。入浴はドラム缶だった。ある日トラックに分乗して数時間走り、大浴場に着くと、サウナで入浴している間に衣類は全部高温殺菌されていた。シャツを着ようと手にとつて見るとびっくり仰天、シラミの死骸が列を作ってくつついていた。あちこちで驚きの声が上がっていた。

そこはどこだったか記憶していないが、おそらくハバロフスク付近ではないかと思う。ここでの重労働は、先着部隊が山林を伐採して幅員約十五メートルの道路を数キロ建

設していた。我々は、この道路の側溝作りを並行しておこなった。道路はラーゲルの門前から建設されていたので作業場は近かった。側溝は幅六十センチメートル、深さ一メートルぐらいをツルハシとスコップで一日数メートル掘るようにとノルマが与えられ、炎天下、苦闘の連続で手はマメとタコで固くなり、全身日焼けで赤銅色、目玉だけが誰でもギョロギョロと輝いていた。腕の外皮は何回もはげた。シベリアでの土工の経験で、ツルハシとスコップの使い方は及ばずながら当時から二、三年間は一人前の力があつた。流れる汗が乾いて、体から塩汗がざらざらと吹き出る感じが続いた。痩せ細った体でよくも耐えられたものだ。監視兵がときどき巡回してきて、片言の日本語で、どこで覚えてきたのか「待てば帰るの日和あり」と我々に話しかけてユーモアを振りまく場面もあり、みんなで大笑いしたこともあつた。

シベリアでは、夏から秋が駆け足で通り過ぎる。しかし十一月までは道路作業の連続だった。十二月頃から伐採作業に従事した。ラーゲルの周囲は見事な赤松の森林が果てしなく広がっていた。前にも述べたが、日本兵も測量技師が活躍し、伐採では老練な木こりさんが采配をふるった。大木を下から眺めたりして、倒れそうな方向を見定めて、

帯のこぎりで切れ目を入れるので緊張の一瞬。大木は、バリバリと大音響とともに風を切って倒れ、その方向はほとんど違いがなかった。帯のこぎりで二人交互に引き切った。現代のようなチェーンソーはなかった。五人一組で倒木の枝を払い、一定の場所に集めて十トントラックに積みこむ。積みこみは片側に丸太をかけ、反対側からロープを使い巻き上げた。生まれてはじめて経験する山男の重労働だった。「この木材を日本で和風建築に使用したら上等の家が建つだろう」と誰かが話した。

やがて越年、昭和二十四年を迎え厳冬が来た。シベリアに来て初めて経験するような豪雪が数回あった。ラーゲルも松林も銀世界で、七メートルの積雪もあり、ラーゲル内の除雪作業に苦勞した。マイナス四十度以下にならないと、作業中止ならず、防寒服に身を包み作業した。まず、倒す予定の大木から四方に逃げ道を作り、大木は積雪を負っているので倒れるときの光景はすさまじかった。ラーゲル内の生活は変わりなく、夜は電灯がないのでカンテラ（携帯用の灯油ランプ）を灯していた。暖房はドラム缶で作ったストーブを利用した。山から取ってきた材木が燃料で、ある程度室温が上ると消灯就寝だった。昭和二十年は北鮮で越冬、二十一〜二十三年の冬はシベリアで越冬したが、

体は細り、栄養失調の兆候がだいぶ出た。

この山奥のラーゲルで昭和二十四年の春が訪れ、山には樹木や雑草が芽を吹きはじめたので、作業休憩時に新芽をよく食べた。初夏から道路作業が開始されたが、いろいろとデマが飛びはじめたので、日本へ帰れるのかと不安だったが、必ず帰ると強い信念でがんばった。しかし夏になるとツルハシが一段と重く感じ、体力の極端な減退を感じたが氣力と若さでなんとか切り抜けた。道路もだいぶ延びて懸命に道路作業をおこなっていた。

五・日本への帰還

昭和二十四年十月二十日頃、ソ連兵が突然「ヤポンスキーダモイ（日本兵帰る）！」と大声で集合を命じたので、然としていると、本部の幹部が「帰還命令が出たので」とそこそこに片付けを急いでラーゲルに帰るよう指示した。はじめ半信半疑だったが皆の中から「ウワー」と歓声があがった。山林の紅葉が晩秋の夕日にはえて、我々の帰還を祝しているかのように思えた。突然のことで胸がときめいていた。今でもはつきりと記憶に残っている。

ラーゲル内を整理してナホトカに向かって出発した。ナホトカまでは貨物列車で数日かかり、大きなラーゲルに収容された。ここは日本兵の帰還のための一時集結基地であ

り、我々も一週間滞在して日本からの輸送船を待っていた。軍服や下着、その他きれいな物がすべて支給された。シベリアの奥地から続々と集結してくるので、大変慌しい雰囲気の中、昭和二十四年十月二十一日、約四年二カ月の間、一日たりとも忘れることのできなかつた「祖国日本」への帰還の日が訪れた。

ナホトカの埠頭岩壁には、日の丸の国旗が掲げられた一万トン級の輸送船遠洲丸が接岸していた。一步一步タラップを踏みしめながら乗船した。夕方、舞鶴港に向かって出港した。船内には甲板上に日赤の看護婦さんが手をまねいていて笑顔で迎えていただいたことが大変嬉しかった。日本海は大揺れに揺れた。船内は大部屋でつかまるものもなく、船酔いもあつて体を支えるのがやつとだった。船中一泊、翌朝まだ薄暗いなかに甲板上に出ている者が「見えたぞ」と大声で叫んだので駆けあがって見ると、緑色の本土が朝霧にかすんでいるのが確認できた。もう大丈夫だと心はずんだ。舞鶴港沖に船は碇泊した。接岸できないので伝馬船（小型の船）数隻にて何回も分乗して、あの「岩壁の母」で有名な木製の栈橋を渡り、昭和二十四年十月二十二日、母国日本への第一歩を踏みしめた。「祖国の土を踏みまでは絶対に死ねぬ」と頑張った甲斐があつた。上陸して

みると岩壁には「我が夫は、妻は、子供はいないか」と思いは同じ、真剣な眼差しで見つめる出迎えの人々の列が、約一キロメートルも続いていったようだった。生きて帰れた喜びに目頭がジーンと熱くなり、嬉し涙がぼろぼろと頬を伝って流れた。直ちに舞鶴復員（兵役を解かれて帰省すること）局の仮収容所に入り検疫、その他を係員が調査した。ここでの聞き取り調査は、すべて県援護課に保存され軍人恩給（年金の一種）の資料になっていたようだった。約一週間滞在した。終戦から復員までの兵隊（シベリアを含む未給分）の給料を当時の金で二千数百円を支給された。旧軍隊の衣服も新品を着用し、懐かしい故郷へ向かつて舞鶴駅から出発した。

車中「どちらからの復員ですか」と問いかける人もいたが、ふと見ると義足をつけた傷痕軍人が戦闘帽しょうぼうをかぶり、ギターを弾きながら、寄付を求めている姿を見て、大変痛ましく、同情させられると同時に、自分は五体満足元気で帰還できた喜びの感情がこみあげてきたが、何ともいえぬ複雑な思いだった。

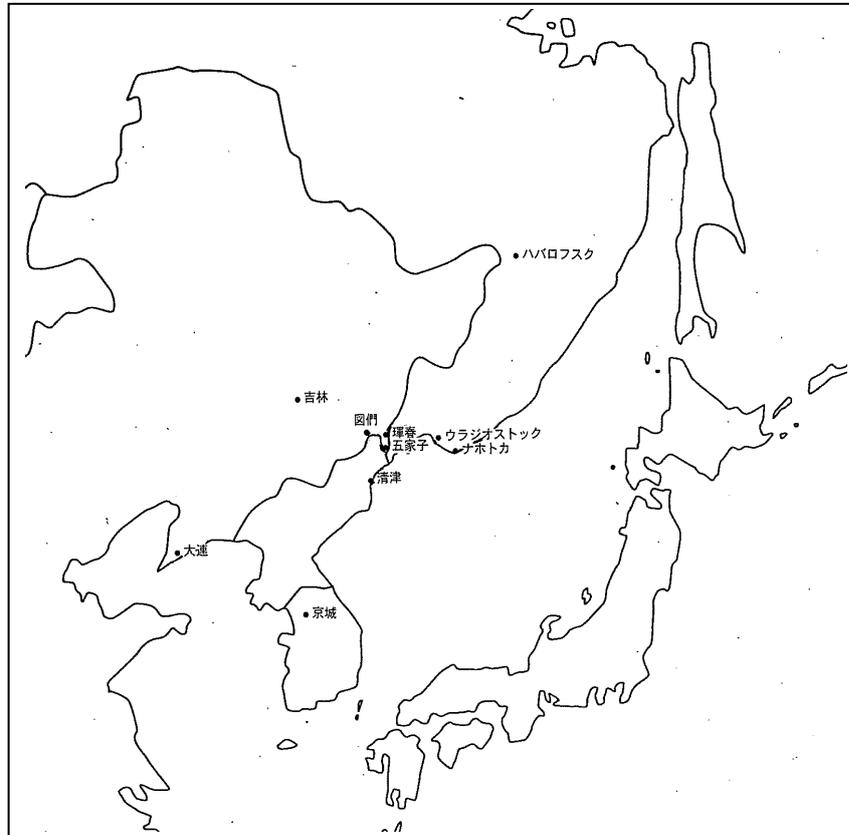
復員局から出身地の役場に連絡があつたのか、翌日の午後、諫早駅に着くと長兄が出迎えにきていて、七年ぶりの再会だった。長兄は、沖縄本島より離れた小島で終戦とな

り、終戦から一カ月ぐらい後に復員したのだった。郷里の湯江駅に着くと驚いた。終戦後もう四年以上過ぎているのに、町内の婦人会の方ほか百有余人ぐらい出迎えにきておられた。戦争に負けての復員だったが、感謝感激で涙があふれた。皆様へ感謝と、お礼の言葉を述べ実家へと急ぐ。実家には、父母、兄弟、妹が集まっていて、嬉し涙の再会だった。元気で復員を喜び、心から祝って祝宴を開いていただいた。役場から確たる情報もなく、四年間待ちわびていたようで、特に子煩悩だった母親の喜びはひとしおだった。

結びにあたり

冬来れば思い出すなり シベリアの
酷寒に耐え 生きのびしこと

(平成二十二年八月寄稿)



文中に出てくる地名の位置 (国境は現在のもの)

『坂本中尉機とボーイングB 29』

— 諫早ロータリークラブ卓話

(昭和六十年七月二十六日) より—

犬尾 博治 (泉町)

一 新聞記事より

来月で終戦四十年 (昭和六十年当時) になり、戦争もすでに歴史となった。今回は戦時中、諫早上空での戦闘で亡くなった坂本中尉という方と、相手のB 29墜落についてお話ししたい。なお、これについては、まだまとまった記録はなく、資料も充分ではない。もし誤りがあったり、ご存知のことがあれば教えていただきたい。

ここに昭和十九年十一月二十二日の新聞の写しがある。

大本営 (戦時に設置された、天皇に直属する最高の統帥機関) 発表 (昭和十九年十一月二十一日午後五時)

一・本日十一月二十一日十時頃、支那 (中国) 方面よりB 29が七十〜八十機九州西部へ来襲、雲上より闇雲に攻撃した後、遁走 (逃れ走る) した。現在までに判明している戦果は次のとおりである。墜落確認がされたものは十四機 (うち一機は体当たりによる)、不確実十一機、計二十五機、外に黒煙が上っているもの七機で

ある。日本軍は、自爆未帰還四機が出たものの、地上における損害は軽微である。

二・この戦闘において体当たりを行った方は、海軍中尉の坂本幹彦である。これは、昭和五十三年十月に発行された旧大村海軍工廠 (軍に直属し、兵器、弾薬を製造する工場) 職員の第二十一海軍航空廠回想集の中に記されている。この回想集の中で、中村栄一氏ほか三人の方が、体当たりした坂本中尉の機種は雷電であったこと、坂本中尉は佐賀県相知町出身であったこと、B 29の遺体は八名であったこと、中尉の遺体は、一カ月以上たつて高来町深海の山中で発見されたこと等が記載されている。

二 戦闘

《B 29 墜落の様子》

B 29の墜落の様子は、多くの目撃者の話を総合すると次のようであった。

B 29の編隊 (飛行機が組んだ隊形) が大村の方から東に向かい、諫早市街の北方にある多良山麓上空を飛行してきた。これに、日本の戦闘機が向かっていった。何機もの戦闘機が向かっていく様子は、キラキラと輝いて見えた。するとB 29の編隊の最後尾機が次第に遅れだし、高度も低下

してきた。B 29 は、フラフラとゆっくりとした木の葉返し
の状態、小長井町井崎沖約五百メートルの海上に墜落し
た。空中で破壊されないまま、火を吐くこともなく、また
パラシュートによる脱出者もいなかったようだ。

当時、私は小学五年生だった。現場の小長井まで行き、
B 29 特有の形をした垂直尾翼が海面に飛び出ているのを
見たこと、そして、今もある農協の倉庫の横に、赤い肌の
色をした四人の裸の遺体が並べてあったことを覚えている。
落下地点は干潟の浅い海岸で、機首をやや陸方向に向け、
海中に斜めにつっこむ形であった。

かけつけた大村空廠・高岩和雄元技術大尉が、機体周囲
に浮遊していた物を拾い上げている。家族とガールフレン
ドらしい人の写真、ゲートパス、財布、それに内容から見
るとラブレターと思われる手紙、また、極めて精密な大村
の航空写真などがあつたらしい。郷土芸能、浮立踊りの鬼
面作りの達人である小長井町井崎部落の井手下七郎翁は、
そのとき拾ったB 29 のガンソリタンクの内張りだったら
しい合成樹脂製のシートを、今も鬼面を作る仕事用の下敷
きに使っておられる。

機内から引き上げられた八体の遺体は、浄真寺で読経の
上、小川原浦部落の墓地に仮埋葬された。これらは終戦後、

米軍によって発掘再収容され、お骨はアメリカ本国に帰る
ことができている。

十日くらいして機体は分解され、運搬船で海路運ばれ、
大村空廠の修理工場横の、当時のダイヤモンド倉庫（現在、
海上自衛隊格納庫）で再び組立てられ、その後展示された。

《坂本機》

一方、坂本中尉機は、諫早市長田町白木峰キャンプ場を
中心に飛散自爆した。遺体はすぐには発見されなかった。
しかし、奇しくも四十九日の忌日に当たる昭和二十年一月
八日、海岸より七キロメートル登った現在の高来町深海の
榎堂の東北割石の山中で、当時十五歳の少女、山崎マサノ
さん他二名が薪取りに来ていた際に、遺体を発見した。そ
の遺体は警防団員によって深海蓮行寺に運ばれた。

山崎さんは、奇妙なものがある、自分は狸にだまされて
いるのではないか、と思ったが、遺体が人間と分かったと
たん一目散に山を下り、何も覚えていないという。遺体を
運んだ深川左京さんは、遺体の髪が長いことから、寺に着
くまで米兵か女性ではないかと思っていたとのことである。

三 戦闘に至るまで

日本本土が初めて空襲を受けたのは、昭和十七年四月十
八日。空母ホーネットより発進した十六機の陸軍軽爆撃機

「ノースアメリカン B 25」が、京浜、名古屋、神戸へ来襲してきた。それ以後二年あまり、本土空襲は無かった。しかし、昭和十九年六月十五日、超空の要塞ボーイング B 29 重爆撃材が、中国本土から北九州市八幡製鉄所をねらった夜間爆撃を行っている。この日が、米軍のサイパン島上陸開始の当日であるのは偶然ではない。七月には、サイパンの玉砕によって東條内閣は総辞職している。(東條英機内閣一九四一年十月十八日～一九四四年七月二十一日)。

長崎県への空襲は、昭和十九年七月七日の夜、長崎佐世保へ十五機来襲したのが初めである。続いて八月十日深夜、十三機が長崎、北九州へ来襲した。この時諫早では、栄田町に多数の焼夷弾による盲爆があったが、死者は無かった。

しかし、栄田町の安祥寺が全焼している。十月二十五日昼間、七十八機が大村第二十一海軍工廠を初めて爆撃し、学徒挺身隊(任務を遂行するために身を投げうって物事をすすめる学生、生徒の組織)多数を含む二百八十人余りが犠牲となった。これ以後、十一月十一日、十一月二十一日、十二月十九日、二十年一月六日に大村空襲があった。中国からの来襲はこれで終わり、以後二十年三月から B 29 はマリアナ(北西太平洋、ミクロネシア北部に位置)より飛来し、艦載機も来襲することになる。

十一月十九日頃までに、支那(中国)派遣軍より、インド、カルカッタ方面から中国成都(四川省の省都)に B 29 約百機が集結したとの情報もたらされた。十七日には B 29 単機での大村偵察があったため日本側は警戒していた。十一月二十一日未明、アメリカの第二十爆撃兵团(司令官ルメイ少将)の B 29、百九機が成都を離陸して大村に向かった。日本の支那(中国)派遣軍より B 29 の通過報告があり、来襲確実とみて、佐世保鎮守府(※)の下にあった大村の三五二海軍航空隊は、午前八時二十分から大村西方百九十キロに月光八機を哨戒(敵の襲撃に備え、見張りをして警戒すること)させ、西部軍管区は、八時五十分に警戒警報発令、九時十五分に空襲警報を発令した。

※各海軍区の警備、防衛、所管の出征準備に関することを司る、所属部隊を指揮監督した海軍の機関

九時五分より零戦(ぜろせん)零式艦上戦闘機(れいしき)の通称)四十三機(うち十機は大村航空隊練習隊)、雷電十六機が発進した。午前九時三十五分、哨戒中の月光が B 29 編隊を発見。この日、雲量(雲が空を覆う割合。全く雲のない状態を目測観測でゼロ、全空を覆ったのを十とする)六〇九、雲は千メートル前後と五千メートル前後の二層にあった。地上で北西の風、風速十六メートル以上。九州西方の天候不良のため、

実際に大村上空に來襲したB 29は六十一機、七、十五機の梯団（部隊）六波で、午前九時四十五分から西彼杵半島上空より侵入した。

B 29としては比較的低空の五千五百メートルないし七千五百メートルの高度で來襲した。これに対し、上空で待機していた零戦、雷電は三号爆弾（空対空爆弾）で攻撃して編隊を乱れさせた後、約一時間にわたって攻撃を加えた。坂本中尉の二階級特進を申請した当時の戦闘日誌によれば、「三五二空坂本中尉は第二小隊長として零戦九機を率い、八千五百メートルで迎撃哨戒中、午前十時十五分、B 29、十五機編隊に対し三号爆弾攻撃。引き続き、直上攻撃を繰り返し相当の損害を与えた（火、または、黒煙を吐いたのは四機）。小隊長は列機と分離し、十時三十分頃、上方より編隊外端機に壮烈な体当たりを敢行した。この敵機は錐もみ状態（らせん状に旋回しながら急降下）となり、島原北方海面に墜落。小隊長機は体当たりと同時に約四千メートル圏内に飛散した。この行為は、まさに軍人の鑑であり、二階級進級するのに当然の者と認め、ここに完全に記しておく。」とある。

日本側の被害は、未帰還零戦二機。体当たり自爆零戦一機。自爆雷電一機。不時着大破の零戦七機、月光一機、被

弾（弾丸にあたること）十六機。米軍側の資料によるとB 29の被害は、墜落したもの六機、ほかに一機はソ連領に不時着。日本領土内での墜落機は一機、その他はすべて中国、または、その近くまで来て墜落、または事故による喪失。地上の被害は、民家二カ所数軒の火災と、山中への投弾三カ所で、軽微であった。

従来、坂本機は局地戦闘機雷電とされてきた。しかし、当日いっしょに出撃された植松真衛元海軍大尉（東京在住、海兵七十一期）及び武藤芳次上飛曹（大村在住、丙飛七期）は、坂本機が零戦であったと述べられた。また、前出の三五二空の戦闘日誌にも「坂本中尉は、第二小隊長として零戦九機を率い、体当たり自爆零戦一機」と記載があることなどから、坂本中尉の搭乗機は零戦であったと思われる。

なお、植松氏は翌二十年四月七日、戦艦大和が男女群島の南約二百キロメートル地点で米機によって沈没させられた折、その直前まで零戦編隊の隊長を勤められている。武藤氏は、十月二十五日の大村初空襲の戦闘で五島久賀島に不時着して重傷を負っていたので、十一月二十一日の出撃時はまだ顔面が腫れていたとのことだった。同日の戦闘で、南高吾妻の干拓地に日本機が不時着している。搭乗員は無事で、この方は当時十九歳で賀茂保夫という人だった、と

駆け寄って目撃した岩永金吉氏が述べておられるが、戦闘日誌によると、この賀茂氏も坂本中尉機体当たりの目撃者の一人として記されている。

四 B 29 搭乗員

一方、B 29 の搭乗員はどうなったか。名前は判らないのか。定員は十一名。機長兼操縦士、副操縦士、飛行技術士各一人、航測兼爆撃士二名、以上五名が将校、整備兼銃手が四名、無線手、レーダー係各一人の六名が下士官兵という編成であった。前出の中村栄一氏等の回想記では遺体八名が収容されたとある。米側の資料では、定員以下の人数で運行することもあるとされているので、この機は八名で運行されていたのではないだろうか。

三十三回忌にあたる昭和五十二年十一月二十七日、高来町の元陸軍大尉、荒川斗苗氏のご尽力で、日米合同慰霊祭が同町の天初院で行われた。中尉のご遺族にあたる、相知町町長や、米軍佐世保基地司令官らが出席されている。この時点で、米軍搭乗者名が判っていたのではないかと調べたが、そうではなかった。

それまでも荒川氏は、米軍司令官や福岡の米領事館に足をはこび、大分県耶馬溪（大分県北西部、三國川上流、中流沿岸約五十キロメートルの景勝地）に墜落したB 29 の搭

乗者名が、外国人神父の努力で判明したことを知って、みさかえの園の神父さんを訪ね、援助を求められたこともある。しかし、手がかりは得られなかった。

ところが、このB 29 が引き揚げられ大村の格納庫で展示されたとき、当時航空廠兵器部の設計におられた、佐世保市皆瀬町の井上九州男氏が撮影された機体の写真があった。この写真には、垂直尾翼に「機体番号二六二七八」がはっきりと撮影されていた。

これに基づいて、米軍佐世保基地司令官を通じて荒川氏が調査を依頼され、三年後の昭和五十五年八月、リンジー司令官より、機長ジョセフキルブルー大尉以下全搭乗員十一名の姓名が伝えられた。ジョセフ・キルブルー大尉、ポール・ミークス中尉、エムズリー・エガース中尉、アール・ハインズ中尉、スピリット・オビアール少尉、ジョン・ノーマン・ジュニア二等軍曹、エドワード・モンロー二等軍曹、ヴィンセント・シエリダン二等軍曹、ルーサー・ヤング二等軍曹、ゲイル・コーネリアス三等軍曹、ゴールドン・チャード三等軍曹である。

やはり小長井のB 29 にも定員通り十一名が乗務していた。すると遺体八体の他に三名の行方が明らかでない。当時は戦時下で、墜落時に生存していた搭乗員がいて、これ

を殺害したという噂もあり、米軍は終戦後もこの点を含めて調査した気配がある。実際、北九州を爆撃後、パラシュートで降下した乗組員が追い詰められて自殺したり、猟銃で殺害された事実がある。小長井ではそのようなことはなかったと思われる。ただ、パラシュートで落下した者がいたとか、大牟田に遺体があがった、高来町湯江にも流れついた、などという話もあった。今のところ信頼度の高い行方は以下のとおりのようだ。

当時、小長井町山崎医院院長さんが、遺体の検死をされている。この時、同行されたご子息の現山崎医院院長の山崎善久氏は、遺体は九体であったことは確かだと話された。また、当時の郷土防衛隊長、井手基氏も、当日から翌日にかけて九体が引き揚げられたと述べている。さらに、当時の大村空廠運輸部、故中村正美氏（当時三十七歳）は、大村歩兵第四十六連隊の憲兵の命令により二十二日、「アンダーシャツとメリヤスシャツ」を着た米兵死体一体をトラックで、小長井から大村憲兵隊（現・子ども遊園地）まで運んだ、と記している。また、墜落から二、三日して一遺体が小長井、長里の田代海岸に流れ着き、警防団によって火葬され、翌日十時に憲兵に引き渡した。その際、火葬のため遺体を海岸から尾上部落の墓地まで運ぶ途中で、遺体の

頭皮が剥げたのを覚えているという複数の話がある。

それらを合わせると、井崎海岸に上がったのは八体ではなく九体、別に大村へ運搬された一体、長里部落に流れ着いた一体、合計十一体とすると、数は合致する。

ところで、この他に隣の佐賀県太良町油津に米兵の漂着遺体の碑がある。「昭和四十四年鹿島ロータリークラブ建立、ノールマン・イー・ステフラー之碑、昭和十九年十一月二十一日戦死」と記されている。認識票を付けたまま漂着したのでその名が判り、階級は軍曹で、戦後この遺体も米兵によって再発掘されている。遺族が米国から見えたことがあるという。この遺体は小長井墜落のB29の一員とされているが、前述の、昭和五十五年米司令官より荒川氏へ伝えられた二六二七八号機の搭乗員名簿の中に彼の名は見当たらない。また、墜落現場から南に流れた長里海岸の一体が確かだとすれば、もう一体がそれと反対側の北方に位置する太良海岸に漂着するのはやや不自然でもある。この遺体の由来については今後なお慎重な調べが必要であろう。

五 坂本中尉

坂本中尉は、大正十一年十一月二十三日秋分の日生まれ。佐賀県東松浦郡相知町出身。父君は、同町熊野神社宮司、巖男氏。出生時、神社は祖父の真澄氏の代で、父君巖男氏

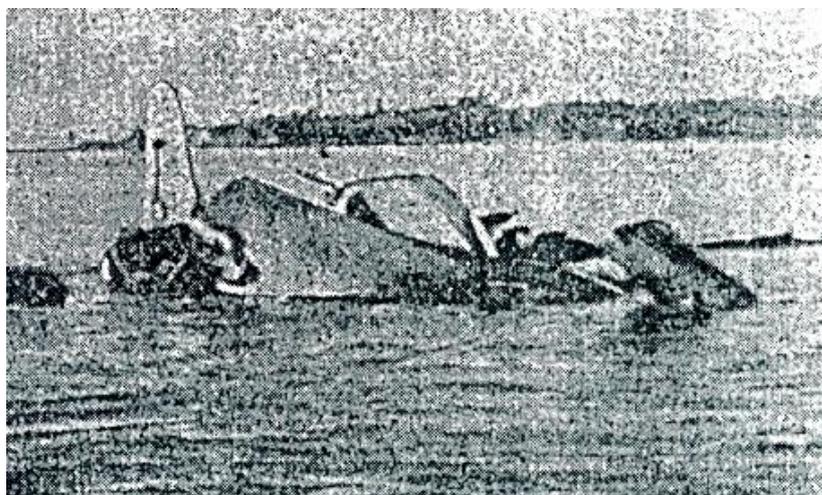
は当時、朝鮮（現在の韓国）の慶尚北道興海小学校の教師であり、幹彦氏はそこで生まれた。母親はミユキさん。大正十五年、幹彦氏三歳の時、父、巖男氏が相知に戻り、宮司を引き継ぐ。幹彦氏は少年時代から海軍に憧れていたが、体格が少し小さかった。小学時代から剣道が得意で、中学では理科、英語に秀で、級長をしていたという。

現在の唐津東高校、当時の唐津中学に入って、五年生から海兵に入学した。海兵七十一期生として昭和十七年十一月に卒業し、艦隊勤務につく。軽巡「川内」に乗り込み、昭和十八年二月一日より始まった、ガダルカナル島撤収の支援部隊としてニューアイルランド島カビエンに出撃。昭和十八年、飛行学生となり、八月に少尉に任官して大村航空隊付となる。十九年三月中尉。同年九月に一度だけ休暇で帰省したのが最後となった。戦死時、満二十二歳。勲功は二階級特進して少佐に昇進。従六位勲六等功四級旭日中綬章を受ける。

幹彦氏は、出身地の相知町や元の本籍地唐津にも戦死者として合祀されていないことがわかっている。皮肉にも相知町の戦没者碑は熊野神社境内にある。多数の戦没者名がこの碑の裏側に刻まれているが、坂本幹彦の名は見当たらない。佐賀県の厚生部援護課の兵籍には記されているが、

その他には顕彰されたものは、何ひとつ残されていないという。坂本家の先代は、唐津市鏡の出身であり（熊野神社は鏡神社と親類の神社）、当時は鏡に田畑も所有されていたが、神職としては相知熊野神社に転出されて久しく、いわば不在地主という立場にあった。昭和二十一年の冬、農地改革の波が押し寄せて、不在地主は不利となり、一家は鏡に移住された。しかしここでも不在地主として扱われ、しかも昭和二十二年十一月十一日、父巖男は病死され、再び一家は相知に転出されている。このような移住の合間に戦没者としての名の記載が欠けたままになったものと言われている（佐賀県先覚者顕彰会常務理事、井手保氏による）。そのようなわけで、出身地や戦死現場のいずれにも慰霊碑はるか、一片の表示板もなく、その名は残っていない。同様に、故国より遠く離れた極東の地で散っていったB29の搭乗員の名を残す標柱も、今のところ建てられていない（現在はいずれも慰霊碑が建立されている）。

（平成二十三年七月寄稿）



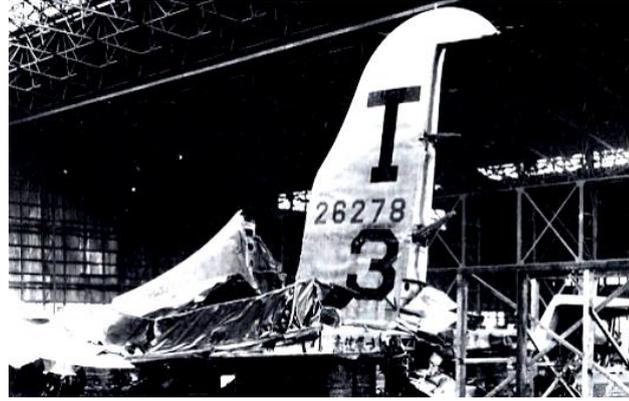
小長井町井崎沖の B29（当時の写真より）



昭和19年8月10日 栄田町に B29 から落とされた焼夷弾。この38発が一発の爆弾として落とされ、落下中に飛散して点火された。※火薬・信管は抜かれているもの。



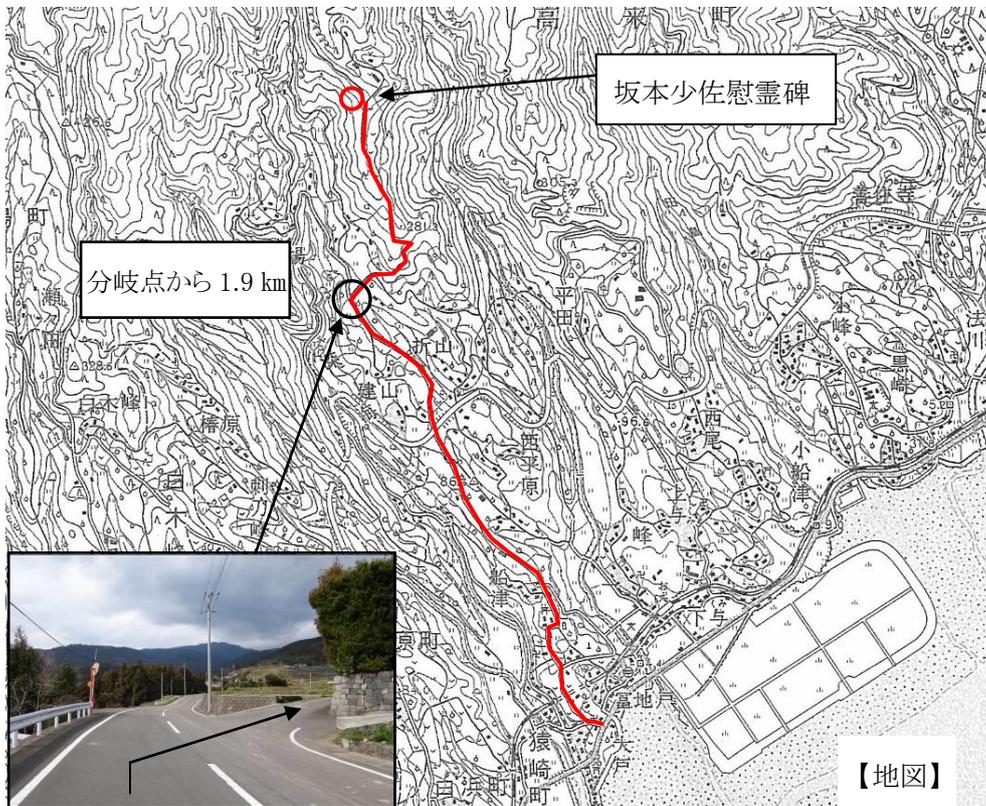
坂本幹彦中尉（中村栄一氏提供）



大村に運ばれたB 2 9の垂直尾翼の機体番号
(井上九州男氏提供)



【坂本少佐慰霊碑：高来町榎堂割石 荒木 斗苗氏等により建立】





【B29 搭乗員慰霊碑】（詳細地図は下記参照）

【地図】



『私の戦時中の思い出』

寺井 和恵（原口町）

私は昭和十九年の三月に旧制女学校を卒業しました。出身は東彼杵です。女学校へは汽車通学でしたが、昔は厳しかったので、男子学生は前方車両、女学生は後方車両と決まっております、一緒には乗車出来ませんでした。

十九年の三月に女学校を卒業予定でしたが、卒業がはつきりしないうちに学徒動員で通信隊長として佐世保の通信係に任命されました。しかし、私は年老いた母を一人で東彼杵の家に置いては行けないので、「魚雷を作っている隣町の川棚へ配属していただきたい」と学校の方に何度かお願いしました。けれども、一旦任命されたら個人の事情は聞いていただけず、許可が出ることは無く、仕方なくポストバックに衣類などを用意して、佐世保の通信係に行く準備をしていました。ところが、担任の先生が多方面に熱心に要望してくださったおかげで、結局私は佐世保に行かなくてもよくなりました。

その後、川棚で魚雷を作っていたのですが、工作研究係として配属され、魚雷の設計に携わりました。

そこで一番印象に残っているのが、設計係の場所に行く

までに平屋の家があるのですが、そこには門番がいて厳しくチェックされ、やっと自分の部署に行くことができたことです。

なぜ強く印象に残っているかというと、門番がいる平屋の前で手足を石に繋がれ、動くことができず、さらされている人を見たからです。その人は、徴用に出されて逃亡しようとした方でした。首から罪状を書かれた札を下げている。「妻恋しさに逃亡した」との旨が書かれていました。当時、一番重い罪でした。このさらけ出された方の酷い姿を見て「可哀相に」と強く思ったことは、今も忘れられません。

そのころは皆、あちこちから徴用といって軍から赤札がきて召集されていました。私も徴用されて来られた上司である大学生、専門学校の生徒さんと一緒に設計の仕事をしていました。その後、だんだん戦争がひどくなり、川棚川の鉄橋に沢山の焼夷弾が落とされました。その近くに馬小屋があったのですが、そこで馬がみんな死んでおり、私達は翌日、馬肉を食べさせられました。食べ物が無いからです。川棚は焼夷弾が落とされ、危なくなりましたので、川棚から波佐見の途中にある石木に移り防空壕を作り、そこでまた魚雷の設計をすることとなりました。

当時、技術将校という方がいましたが、大学や専門学校の工学部を出られた方で係の監督をしておられました。

終戦後、あちこちからみんな集まり、昔話をしました折に、技術将校の方が厳しく監視していたことに対し「すまなかった」と頭を下げて謝られました。決してその方々を人を傷つけた訳ではありませんが、申し訳なかったという思いがおありのようでした。

また、東彼杵にも原爆で亡くなられた方の死体が運ばれてきたのですが、私は母と一緒に死体を見に行き、あまりに変わり果てた人の姿に深い悲しみを感じました。

自分の息子にもこれらの話はしていませんが、これを機に戦争を知らない大勢の方に私の戦争体験を分かっていただけばと思っております。

(平成二十三年九月聞き取り)

『私の戦時の生活と体験』

西村 カズ子 (立石町)

昭和七年四月、私は諫早尋常小学校に入学しました。服装は洋服、和服と半々でした。男子と女子は別々のクラスで二組ずつありました。今の諫早市庁舎別館のところに、二階建ての木造校舎があり三年生までそこに通いました。

昭和八年十二月二十三日、今の天皇陛下がご誕生になりました。上に内親王様が四人もおられたので、その慶ことほびは殊ほかの外で、国を挙げて祝いました。学校では私たちは旗行列、夜は大人たちの提灯行列で賑わいました。「皇太子様お生まれなった」という歌もできてみんなで歌いました。

昭和十二年七月七日、日中戦争が始まりました。私が小学六年生の時です。戦況がラジオで放送されていました。生活は今まで通りで何も変化がなく、戦争という実感もありませんでした。隣のおじさんが家のラジオを聞きに来られていたのを思い出すくらいです。

十二月十三日、南京占領との報に町を挙げてお祝いしました。夜には大人たちが祝賀の提灯行列を行い、とても賑

わいました。

昭和十三年四月、諫早高等女学校に入学。入学式は満開の桜の中を、あこがれのセーラー服に布製のランドセルを背負って登校しました。現市庁舎の場所が校庭で、図書館の所に校舎と寄宿舎、同窓会館もありました。その頃中国への召集令状がぼつぼつと来て出征されたので、旗を持って駅まで見送りに行きました。また、時々神社参拝に行き「武運長久ぶうんちようきゆう」を祈りました。

昭和十四年、街角には「満蒙開拓義勇軍募集」や「大陸の花嫁」等のポスターが貼られていました。隣組の回覧板が始まり、「産めよ殖やせよ。国のため」の言葉が流行しました。

昭和十五年一月一日、皇紀二千六百年の記念すべき年を迎えました。遙か長い歳月を続けて生かされてきた日本を、誇りに感じました。

九月一日、諫早町は周囲六村と合併して諫早市が誕生しました。

その頃、中国からの遺骨を駅に迎えに行きました。市葬

には学校からも参列し、公園頂上の忠霊碑前で執り行われました。また、出征兵士の家にな数人一組になって勤労奉仕に行きました。土師野尾に行った時に雨が降り出し、家の人に蓑笠をつけていただき、初めて田植えを経験しました。生活必需品は全て統制され、配給制度になりました。金などの貴金属は強制買い上げになり、絹製品はナイロン製に替わりました。男子は丸刈りに、女性はパーマ禁止、もんぺ姿になりました。

昭和十六年四月一日、小学校は国民学校と改称されました。

四月十三日、日ソ中立条約調印。

※終戦時、ソ連はこの条約を一週間前に破棄して満洲に攻め込み、日本兵を六十万近くシベリアに抑留して酷使し、一割くらいの人はとうとう帰って来ませんでした。また、北方四島も戦後不法占拠し、未だに返還しません。

六月、四年生皆で千人針や慰問袋を作って戦地に送りました。

九月、諫早高等女学校が宇都町の新校舎に移転しました。

十月、楽しみにしていた修学旅行（東京方面）も、軍部からの「まかりならぬ」とのお達しにより中止になりました。

た。

十月八日、東條英機内閣成立。

十二月八日、早朝、ラジオのニュースで「大本営陸海軍部発表。本日帝国陸海軍は米英軍と戦争状態に入れり。」と開戦の知らせを聞き、身が引き締まる思いがしました。こうして真珠湾攻撃が成功して大東亜戦争が始まりました。時局はひっ迫し、国策に沿って軍国主義は更に叩き込まれ、「欲しがりません。勝つまでは。」と勝利を信じて我慢しました。しかし、こちらの地域ではまだ空襲もなかったので、学校の授業は普通に行っていました。

昭和十七年二月十五日、シンガポール陥落で、英軍十万人が降服したとの嬉しい報道がありました。

三月、女学校卒業百五十三人。その中の数人は都会に進学しましたが、私は親もとを離れる勇気がなく、母校の研究科へ進みました。どこかに籍を置いておかないと挺身隊に呼び出されるので、みんな恐れていました。

十一月、稲刈りが済んだ広い諫早平野で、大村連隊の大演習がありました。街中の各家庭に三々五々と合宿。市民も活気づいて心から応援しました。その頃父は一人で裏の畑に防空壕を掘りました。

昭和十八年三月、研究科を卒業し、すぐ県の出先機関の東彼北高地方事務所に勤めることが出来てホッとしました。職員は五十人くらいでした。三月二十四日初出勤。仕事は兵事厚生課でした。月額二十七円の辞令をいただき、毎日のようにガリ版で原紙を切りました。初任給をもらった時は感激でした。

四月十八日、山本五十六司令長官ソロモン上空にて戦死。

五月、この頃になると、アツツ島玉砕：等、それとなく耳に入り、敗戦が色濃くなりました。でも日本は決して負けないと信じていました。

五月十二日、突然、警戒警報発令。初めてのことで驚きましたが、何事ありませんでした。

九月一日、十八時三十分、佐鎮さちん（佐世保鎮守府の通称）管区及び、西部全地区に警戒警報が発令されましたが何もありませんでした。

九月三十日、次兄が久留米部隊に入隊することになり、家族写真を撮りました。

十月二十一日、東京神宮外苑競技場での、学徒出陣壮行会の模様をラジオで聞き、翌朝の新聞を見て、その雄姿に感無量でした。

昭和十九年四月十三日、この年から徴兵検査の対象が十九歳からとなったため、十九歳と二十歳の方が同時に集まり、私が所属する兵事課はこの上なく忙しくなりました。会場は小学校の講堂です。大村から検査官の兵隊さんが数人見えられました。私たちは連絡のため書類を持って事務所から会場まで行ったり来たりしました。講堂には「女人禁制」の張り紙が貼られ、外には二年分の壮丁（軍役・労役にあたる成年の男子。徴兵検査を受ける義務のある男子）の方たちが硬い表情であふれていました。

五月、通常、軍から直接町村役場にいく召集令状が、私たちの職場に突然届き驚きました。残業してその召集令状を各町村に発送しました。

六月、度々の警戒警報、空襲警報で落着かなくなりました。

七月十四日、甲種飛行隊員の検査が終了し、ホッとしました。職員の方々も次々召集され、私たちの主任さんも召集されました。自宅に帰ると長兄も召集されており更に驚きました。その後、兄の妻（義姉）と子ども二人と同居することになりました。

八月十日、夜十一時二十分、西部全地区警戒警報。十一時四十五分、空襲警報が発令される。翌八月十一日午前一

時頃敵機二〜三機が来襲し、諫早上空にて照明弾を落下させました。真昼のように明るくなり、とても驚き、急いで防空壕にかけ込みました。爆弾がどこかに二〜三個落ちたような地響きがして、生きた心地がしませんでした。三時十分、ようやく空襲警報が解除になり、ホッとしました。栄田のお寺や民家が数軒燃えたようでした。

※この敵機は中国から来襲したと言われ、その後も何度か来ましたが、諫早市内を攻撃したのはこれきりで、大村ばかり爆撃されました。

十月一日、配給がありました。米、麦、粉、うどんなど一人二合五勺程度でした。翌十月二日、仏印（フランス領インドシナ。現在のベトナム、ラオス、カンボジアを合わせた領域）に赴任している次兄から軍事郵便（はがき）が届きました。「ここは住み易くてバナナ、パイナップルで満腹だ」とあり、うらやましく思いました。母は毎日のように小野飛行場に奉仕作業へと出かけて行きました。

十一月一日、隣保班に魚の配給があり、それぞれ人数にわけました。大きいのは半分にしました。風の便りでサイパン、硫黄島などが玉砕したと聞きました。

十一月二十一日、午前八時五十分。空襲警報が発令され、B 29 大編隊が来襲。あちこちから高射砲の音が響き渡る。

カンカンと警察の鐘が鳴り、数人で重要書類を持って防空壕に飛び込みました。十機ほど上空を通過した後、勇氣ある先輩たちが防空壕から出て「アッ」と悲鳴を上げたので、驚いて恐る恐る出てみると、多良山系の上空でB 29に日本の小さな戦闘機が体当たりして、火を噴きながら落ちて行くところでした。ぼう然と見て、こぶしを握り締めながら涙が流れました（※後で聞くと、この時B 29に体当たりした飛行機は、大村から飛び立った坂本中尉機（佐賀の人）で、長田の瀬々田辺りに落ちたという。B 29は小長井の海岸に墜落したそうです）。家の周りの板塀は、空襲の時に燃えやすいからと全て取り壊されました。レイテ沖海戦に初めて神風特攻隊が出撃したそうです。当時、軍人以外でも働ける者は全て、軍事施設や軍需工場で働いていました。母も家の近くにある畑を一人で耕していました。食糧難でとても苦しかったです。

十二月三十一日、ビルマから次兄の航空便が届き、二度送金したのでお年玉にしてくれとありました。思いがけない事で、両親も私も喜びましたが、軍医はそんなに余裕があったのでしょうか。金額は覚えていません。

昭和二十年一月一日、庁舎で新年の式があり、神社に参

拝して必勝を祈願しました。家ではみんなで次兄への寄せ書きをして、ビルマに送りました。長兄は京大まで出たのに二等兵で、指宿辺りで毎日アメリカ兵に爆弾を持って突っ込む練習をしていたといいます。

二月十日、以前から風邪気味でしたが、とうとう三十八度の熱が出て仕事を休みました。徴兵検査に行けず、課の方達に申し訳ない思いでいっぱいでした。

三月十日、東京大空襲で東京は全滅したと聞きました。

三月十九日、空襲警報発令。隣のおじさんが私を背負って防空壕に入れてくださいました。申し訳なくもありがたかったです。

四月二日、熱が三十九・二度からなかなか下がらず、お医者様がレントゲン検査をしましょうとおっしゃるので、病院に行く事にしました。当時タクシーはなかったので、父母が人力車を探して来て乗せて連れて行ってくれました。結果は肺浸潤でした。

四月二十六日、とうとう退職届を出して、本格的に療養生活が始まりました。この頃沖繩に米軍が上陸したという知らせが届き、本土決戦はいつかと緊張しました。

五月十五日、ようやく平熱に下がりました。

七月十日、毎日空襲、空襲で昼も夜も寝られません。荷

物を防空壕に入れたり出したりしました。療養生活どころではありません。苦しい日々でした。義姉と二人の子供は小川町の頑丈な防空壕に毎日出かけるので、弁当を届けに行っていました。

八月六日、広島に原爆投下。翌朝の新聞一面の左側の片隅に「新型爆弾投下さる」と小さく出ていたのを今でも思い出します。

八月九日、快晴。十一時頃爆音がしたので、具合が悪くて寝ていたけれど、起き上がり外をちらっと見てみました。見えたのが一機だったので、偵察機かなと思う間もなく、「ピカー！」と閃光が走り、「ドカーン」と大きな音がしました。その後風が、西から家の中にサーツと吹き込んで、鴨居にかけていた父のカンカン帽がひらりと飛びました。

西の縁側で遊んでいた姪（三歳）が驚いて駆け込んできたので、すぐ抱いて防空壕に入りました。その後は何も起きないので、昼食をとっていると、外が騒々しいので見ると、西の空から真っ黒い雲がだんだんと広がって来て、夜のとばりが降りたようになりました。太陽は光を失い真っ赤なほおずきの玉のようになっていました。皆、いったい何が起きたのかと不安でした。その雲も三時頃にはだんだんと流れていき、人々も平静を取り戻しほっとしました。

近くの農学校（現在の県立諫早農業高校）に駐在していた十人ほどの兵隊さん達がせわしく走り回っておられました。が、何も分かりませんでした。夕方、陽が落ちる頃、皆さんの灰がちらちらと降って来ました。その夜、母たちは婦人会から召集があり、炊き出しと看護を、小学校と中学校の講堂で懸命にしましたといえます。

学校には長崎からたくさんの傷ついた人々が運び込まれて来て、どうしたことかと唖然としたそうです。見るに耐えない人々の姿に、はてさて長崎で何が起こったのだろうと不安で落着かなかったといいました。広島と同じ新型爆弾が落とされたとは、誰も知る由もありませんでした。

八月十五日、ラジオが朝から正午に天皇陛下の重大発表があるとのことで、緊張して聞きました。陛下の玉音は無条件降伏。その瞬間、悲しいというより、もう空襲はないのだという思いが強く、ホッとしました。毎日、病身を押しつけて防空壕に入ったり出たりするのが辛かったです。

夕方、小さな飛行機が飛んできて「戦争は続けるのだ」というビラが撒かれました。思えば本土は焦土と化し、大東亜侵略の野望は消え、戦争はようやく終わりました。二十歳でした。

子どもの頃から何も分からず、徹底的に軍国主義を叩き

込まれて、絶対勝てると思っていた自分の愚かさをこの時
ようやく知りました。教育は、人々の「人となり（天性）」
も変えるのだと分かり、指針を誤らないようにしなければ
と反省しました。とにかく戦後数年は食糧難と病気に苦し
みました。

それから約六十年、平和な日々を米寿まで生かされてき
た幸せに感謝しています。

最後は美しい夕映えであってほしいと願います。

（平成二十四年七月寄稿）

『私は中学三年生で兵隊になった』

中山 英記（仲沖町）

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、敗戦により中学
三年生の私は、死ぬための猛訓練から解放された。

しかし、その後も敗戦という誰も経験したことのない恐
怖感、虚脱感、先の見えない不安感、食糧をはじめ極端な
物資不足、そして病気を患うこととなり、とんでもない中
学三年生の一年を体験した。

今年も広島・長崎の原爆忌が過ぎて、間もなく終戦記念
日がやって来る。平和になって六十八年、日本も世界も異
次元の変化をとげた。激動の時代の中学三年生を思い出し
ている。私にも中学三年生の孫がいるが、その子らが私の
年になった頃、日本は、世界はどう変わっているだろうか。

今まで両親は勿論、子どもや孫達にもあまり話さなかつ
た、もだえ苦しんだ中学時代があった。民主主義や基本的
人権はなかった。いや、その言葉さえ知らなかった。現在
の感覚では、想像することさえ難しいかもしれない。戦争
を知っている人達は高齢になり亡くなっている。六十八年
前、何があったか思いつくままに書いてみた。

私は、昭和五年（一九三〇年）に生まれ、中学三年生まで軍港があった佐世保で育った。生まれた翌年は満州事変、小学校一年生のとき日中戦争、五年生のとき太平洋戦争が始まり、中学三年生の夏に無条件降伏して戦争が終わった。子ども時代は戦争ばかりで「軍国日本・米英の東亜（東アジア）侵略を打ち砕く平和のための戦争」と教育され「東洋平和のためならば何で命が惜しかろう」と唱わされた。それでも小学校時代までは楽しかった。

私が中学に入る昭和十八年には負け戦が続き、佐世保港には軍艦がいなくなった。

軍艦や飛行機を造る軍需工場は、若い工員さん達が兵隊さんに取られ、その代わりに年配の農家や商店の人が徴用工員として、未婚の女性が女子挺身隊、さらに学徒動員とあって、中学校や女学校の生徒まで軍需工場で働かされた。このため食糧は足りない。中学校へ入っても制服や運動服はない、靴もないので裸足で通学していた。

中学校の先生も召集（兵隊にとられること）されたため、年配の葉屋さんが数学、詩人の人形屋さんが国語の先生になった。

学徒動員の前に少しでも授業を進めたいと、二年生の夏休みはなし。日曜日も登校し、数学や物理・化学は三年生

の分まで無茶苦茶な詰め込み教育を受けた。敵性語（敵国の言葉）といわれた英語も、週に三〜四時間ほどあった。

陸軍の将校が先生の「教練」という科目があり、一年生は整列や行進など銃を扱わない訓練、二年生から小銃の打ち方や、剣を付けて敵を刺し殺す銃剣術の訓練などがあつた。武道は、剣道か柔道が必修科目だった。

校長先生からは「修身」の授業で戦陣訓「生きて虜囚の辱めを受けず」（捕虜になつてはいけない）や葉隠れ「武士道と云うは死ぬことと見つけたり」と今では考えられない教育を受けた。

家では、灯火管制（明りを外に漏らさないよう、筒状の黒い布で電灯を覆った）や停電で、勉強はほとんど出来なかった。

授業を取り止めて、作業に駆り出されることも多かった。空襲による火災の延焼を喰い止めるため、建物疎開といって商店街の建物の取り壊しや、山の上に高射砲台を造るためのセメントや砂の運搬、炭鉱の坑木運びなど、危険で過酷な作業に従事させられた。

二年生の三学期から、佐世保海軍工廠（軍需品の製造工場）・造機部機械工場に動員された。私達は幸いに一カ月間、九州大学工学部の学生から機構学や工作機械について、大

分師範の学生から工場に必要な数学などの講義を受けた後、現場に配属された。特攻兵器の部品などを造らせられたが、旧式の機械と慣れない仕事でオシヤカ（検査不合格）を作って叱られていた。他校の生徒は地下工場（トンネル）をつくる土木作業など、もっと苦しい作業をさせられている人達も多かった。

四月に工場に爆弾が落ちた。級友等が怪我し、鹿児島二中の生徒が死亡した。その時、ばらばらになった肉片を見て、初めて爆弾の怖さを知った。防空壕に逃げるときは、腰が抜けたように走れなかった。その後、工場は鹿子前（現在のパールシーリゾート）の地下工場へ移転したが、狭くて湿気が多く生産能力はガタ落ちした。

六月二十九日には佐世保空襲で焼け出された。日本海軍もなめられたもので、工場の帰りに友人が、「二十七く二十九日のいずれかに空襲するとの宣伝ビラがまかれた。」と小声で話した。ちょうど梅雨時だった。家に帰ると、防空壕に入れていた衣類や私の教科書・参考書なども部屋一杯に広げて干されていた。母に「今日は空襲があるそうだ。」と話したところ「そんなデマを。」と笑い、干した衣類の下で寝た。

「英記、起きろ！」父のどなり声に飛び起きた。縁側の窓

が真っ赤で、物凄い爆音と火災の音が聞こえた。焼けているのは商店街の様だ。両親、小学校一年生の妹、それに二歳の弟と慌てて家の前の横穴式防空壕に避難した（あと二人小学六年生・三年生の弟がいるが、その二人は諫早の叔父の家に学童疎開していた）。防空壕は、隣の有村さんという方との共用で使い、八人が暗い壕に入った。間もなく、年配の班長の本庄さんが「空襲、空襲！」とメガホンで叫びながら私の家に来た。近くで焼夷弾の閃光と共に爆発音も聞こえ、班長さんも防空壕に入った。私の隣で震えているのが分かった。急に、物凄い閃光で防空壕の中まで明るくなり「英記、出ろ！」との父の声で飛び出した。小型のエレクトロン焼夷弾が、家の前で火を吐いている。訓練の様に濡れむしろを掛け、砂袋を投げて、バケツで水を掛けたが消えず、父が大きな水甕みずかめを抱えて投げつけた。消えた！火事場の馬鹿力か。私は怖いとは思う暇がなかった。下隣りの松元のおばさんが「英ちゃん、家にも落ちた！」と呼びに来た。これも松元のおじさんと何とか消し止めた。

佐世保に投下した焼夷弾は、現在「クラスター爆弾」と呼ばれている。投下された容器から、空中で多数の焼夷弾に分かれ、火を吐きながら大雨の様に降ってきた。焼夷弾と一緒に、人間殺傷用の小型爆弾やガソリンも撒いた。ア

メリカは人道主義というが、原子爆弾だけでなく、多くの市民を焼き殺した。この空襲で千二百人以上が亡くなり、三月十日の東京空襲では、十万人以上の市民を焼き殺している。我が家の付近は周辺部で、爆弾の投下は少なかったが、中心部では一軒の家に二十発以上も落ちて、到底消せる状態ではなかった。

母は弟を背負い、妹の手を引いて、山手へ避難した。私は、父と二人で家の前の空き地から、大火災を眺めていた。万松楼という大きな料亭に火が付いたときは、綺麗と思うくらい茫然としていた。延焼して火が近づいてきたので、餅かきりの丹前に水をかけて頭からかぶり、火の粉を浴びながら避難した。途中、小さな爆弾が何度も炸裂した。山手の高台には、多くの人たちが逃げてきていた。

夜が明けて我が家に戻った。まだ火が燻くすぶっていて、家には近づけなかった。家は借家だったが家具、寝具、衣類、教科書や参考書まで焼きつくされ、着のみ着のまま、丸裸になった。昼過ぎから、目がだんだん見えなくなってきた。夕方、職場から帰って来た父も見えづらいつつ言う。焼夷弾の強い光で痛められたと思った。二人とも足に火傷があったが、治療できなかった。

翌日、おにぎりの配給を班長さんの命令で、母校の小学

校に受け取りに行った。一瞬目を覆おほった。裁縫室に黒焦げの死体や、呻うめいている怪我人が、部屋中に寝かされていた。裁縫室（畳の部屋）の隣に湯沸かし室があり、板張りの上におにぎりが入った箱が並べてあった。持ち帰って班長さんから一個ずつ貰った。今だったら、黒こげの死体などを見たら、一週間くらいは喉に通らないだろうが、旨かった。

友人たちが気がかりで、焼け跡を五百メートルくらい歩いて驚いた。海軍橋（佐世保橋）のそばの郵便局やお寺（教法寺）も焼かれているが、道向こうの下士官兵集会所（佐世保総合病院）や凱旋記念館（市民文化ホール）は焼けていない。さらに、それに続く海兵団も無傷だった。（戦後これら軍の施設は接收され、現在も一部米軍基地として使用されている。また、市街地の焼け跡は、兵舎や小型機の飛行場、さらに野球場まで造られた。）

二日後の夕方、諫早にある母の実家に、難民の姿でたどり着いた。食事を済ませ、風呂に入って、ぐっすり眠った。しかし、父は一晚、私は二晩位だったろうか、動員中のため佐世保に帰り工場に通った。

あれだけの空襲を受けたにもかかわらず、海軍の施設や工場、倉庫などは全て無傷だった。港には軍艦の姿はなく、

工事を中止した空母が岸壁に繋がれ、真珠湾を攻撃した特殊潜航艇の改良型や、④艇（震洋）と呼ばれるベニヤ板造りの水上特攻艇や魚雷艇がいて、飛行服に菊水のマークを付けた予科練出身の少年兵が乗り組んでいた。唯一、頼もしいと思ったのは、潜水空母と呼ばれていた大型潜水艦が艦装中^{ぎそうちゆう}で、水上機を数機積んで、敵の後方基地を攻撃すると聞いていた（この艦は戦後米国に持ち帰り、原子力潜水艦のモデルになったと聞いた。また水陸両用の戦車も見たが、実戦に使われることはなかったようだ。）

沖縄は玉砕し、全国の都市は焼失した。兵器や食糧も無く、戦争が続行できないのは、少年の私にも分かった。米軍機が軍の施設を焼かない理由も、占領後に使用するつもりだと想像がついた。敗戦は近い。しかし、負けたらどうなるのか、占領されたらどうなるのか、全く分からなかった。アメリカなどの欧米人は見たこともなく、鬼畜米英と教えられていた。神国日本と言うものの、神社やお寺も焼かれていた。

本題に入る。兵隊さんが足りないのです、中学生を戦争にかり出すため、志願兵の採用年齢を下げた。海軍の飛行兵は予科練出身者が多く、中学校から受験する甲種飛行予科練習生（甲飛）、小学校高等科が乙飛、さらに丙飛もあった。

甲飛は、本来中学四年生（十六歳）から受験資格があり、当初は二百名程度（乙飛も同数）の採用で、海軍兵学校に次いで難関だった。太平洋戦争に入り採用者数が激増し、最後は受験資格が十四歳にまで引き下げられた。

学校に“決戦の大空へ”とのキャッチフレーズをうたった「甲種飛行予科練習生募集」のポスターが掲示板に貼られ、担任の先生から説明もあったが、戦争に勝っていないこと、飛行兵とは名ばかりで、乗る飛行機もガソリンもないことは知っていた。

友達数人と、海軍兵学校（海兵）や陸軍士官学校（陸士）受験の練習に、受けてみようかと話し、試験当日に寒稽古（寒い期間にする稽古）がある事や、学校が二日間休める、合格しても志願だから断ればよからうと思ひ、親にも相談せず、勝手に印鑑を押して担任の先生に提出した。「受けてくれるか。」先生の言葉はそれだけで、「親に相談したか。」などは尋ねられなかった。試験は、一日目が体力テストと身体検査、二日目が学科試験で国語・数学・物理・化学などがあった。

間もなく、家に合格通知が来た。母が先に見て驚き、泣いていた。友達と市役所の兵事課へ恐る恐る取り消しのお願に行った。「この非常事態を何と心得ているか！」と目

から火が出るように叱られた。数日後、警察官が身元調査に来た。事の重大さ、軽率な行動をしたとしみじみ感じ、母に詫びた。命に係わる重要なことを、担任の先生も市役所の課長さんも薦めるほかはない。親はどうすることも出来ない。高校や大学の進学に、先生・親・本人の三者面談が何度もある現在では、到底考えられないことだった。

合格者の中で、早いものは四月に入隊した。その後も五月から七月にかけて、十次にわたって入隊した。これは、収容する兵舎がないためであった。私は当初、十月に防府海軍通信学校（山口県）に入隊することになっていたが、予定が早まり、七月二十日に奈良海軍航空隊に入隊することになった。本土決戦のため、戦車へ体当たりする兵隊が必要になったのだろう。

七月十五日頃、工場の上司に挨拶し、学校に退学の手続きを済ませ、新しい故郷諫早に帰った。諫早に帰って、これが最後と思い、弟達と泳ぎに行った。息が苦しくて泳げない。過労と食糧不足のため、既に肺を犯されていたのだろう。出発の前日は氏神様（八坂神社）と長田の楠神社で、武運長久（出兵した兵の無事）の祈願をして頂いた。夕食は、特別配給の米のご飯を腹一杯食べた。酒は、親戚の大人たちが飲んだが、会話は少なかった。叔母は「英ちゃん、

なんでこんなに早く兵隊に行かんばとね。」と泣いてくれた。沖繩陥落の次は、本土決戦が想定され、上陸予定地は、鹿児島県の吹上浜や志布志湾と聞かされていた。最近、諫早の有喜も予定地になっていて、陸軍の畑俊六元帥はたしゅんろくげんすいが視察に見えたと聞いた（障子紙に書かれ、額装されている元帥の書を見せてもらった）。

アメリカは、空爆と艦砲射撃で、徹底的に壊滅させてから上陸する。既に、日本の多くの都市が空襲に遭い、住民は難民と化していた。予科練に行こうが、家にいようが、死ぬ時は死ぬ。どうせ死ぬなら戦車に体当たりをしてでも、父母や弟妹達が生き延びてくれたらと思うようになっていた。

久し振りのご飯にお腹が驚いたのか、出発の日には下痢をして困った。諫早市民になったばかりなのに、町内や親戚の人が大勢で駅まで見送って下さった。途中、諫早橋を渡りながら、川の流れや多良岳・雲仙岳を眺めた時、思わず「故郷を離れる歌」が頭に浮かんだ。「今日は汝を眺むる終なれわりの日なり 思えば涙頬を濡らす さらば故郷・・故郷さらば」口には出せないで、心の中で歌った。再び生きて故郷に帰ることはないと思った。町内会長さんの音頭で万歳はしたが、軍歌は歌わなかったようだ。

博多までは普通列車、そこで九州各地の入隊者が特別列車に乗り換えた。姫路駅で長時間停車した。のちに、大阪が空襲中で、私達の制服も焼けたことを知った。

二日ばかりで奈良県丹波市町（現天理市）に着き、昼敷の兵舎（接收した天理教の宿泊所）に入った。巻き脚絆（ゲートル）の中を、足元から何かゴソゴソ上がってくる。ノミだった。私は十六分隊で長崎・福岡県、十七分隊が佐賀・鹿児島県の出身で、ほとんどが中学三年生の十四歳だった。

私服から中古の軍服に着替えさせられた。予科練の制服「七ツボタン」が大阪の空襲で焼けたので、代わりに軍服が来るまで入隊式は延期されたが、厳しい訓練は翌日から始まった。二三日後、代用の三種軍装（一般兵の夏冬兼用服・略装）が配布され、七月二十五日午前中、炎天下の練兵場（現天理大グラウンド）で入隊式が行われた。

入隊式は一時間位だった。軍人勅諭（天皇が軍人に発した言葉）や司令（一番偉い人）の訓示があり、ほとんど直立不動（気を付け）の姿勢で、軍服の背中まで汗ビッシヨリだった。しかし、今の様に熱中症で倒れる者はいなかった。

入隊式が済んで、その午後から教班長などの態度がガラリと一変した。優しいお兄さんと思っていたのが、鬼に変

った。隣の分隊と騎馬戦があり、私の分隊が勝ったが、気合が入ってない、娑婆（一般社会の事を海軍ではこう呼んだ）の根性が抜けていないと、罰直（集団規律を高めるための罰）の洗札を受けた。水を入れた食缶と、こん棒を見た時、思わず振るえ上がった。櫂の棒を削って「海軍精神注入棒」や「特攻精神注入棒」と書かれたこん棒で、思い切り尻を三発打たれた。これが入隊祝いのセレモニーだった。早く入った同期の友人たちは、七ツボタンの写真をもっているが、私達は、集合写真の撮影さえなかった。

海軍ではバット（こん棒）で殴ることを「バッター」、拳で顔面を殴るのを「アゴ（顎）」と言う。いつも口の中が切れて味噌汁が飲めないうえ、尻が痛くてトイレも苦痛だった。

「バッター」や「アゴ」は手が痛くなるので、腕立て伏せをさせて、疲れたところで腕を半ば曲げ、片足を上げる「急降下」という姿勢や、手旗練習では頭上に人の字を描いて、足を半ば曲げさせる体罰を受けた。人格などは全て否定され、言われるまま牛馬のように、何も考えず命令に従うよう叩きこまれる。間近に迫った本土決戦に備えた、即成兵隊の訓練法だったのでだろう。

海軍は、トイレを厠、シャツを襦袢、風呂はバス、布巾は

テーブルマツチ、バケツはオスタップと日本語と英語がチャンポンで、同期生同志は貴様・俺と呼ばされた。間違えれば「アゴ」の制裁を受ける。さらに、中学校の教練は陸軍式で習ったが、用語や小銃の部品の名称などが少し違う。中学校で習ったように言うと「陸助（リクスケ）」とは違うぞ」とこれも「アゴ」、陸軍と海軍の仲が悪くて戦争に勝てるはずがない。

晴れた日は、陸戦（教練）海軍体操・手旗信号・銃剣術・騎馬戦・棒倒し、くたくたになるまで鍛えられた。さらに、夕食後は軍歌演習。現在は、積極的に水を飲ませるが、どんなに汗をかいても飲ませない。手や顔も洗えず、風呂（バス）は週二回くらい、ご飯はアルミ碗わんに八分程度で、おかずは、毎日一食は肉か魚がついたが、何時も腹ペコで、小便の色まで変わり血尿も出た。

雨の日は、座学と称する精神講義を受けた。最初の座学で、数学の試験があり三角関数が主だった。学校で習っていない人もいた。「飛行兵が、三角を出来ないとは何事か。なめるな」と出来た人も出来ない人も「アゴ」を三発くらった。目から火が出るのを漫画で見っていたが、本当に火が出たと感じたのは初めてだった。

朝の総員起こしから、夜の巡検・消灯まで緊張の連続。

巡検は、就寝の状態で人数等の確認をするが、ラッパの音が淋しいので、泣き声が聞こえる時もあった。陸軍の消灯ラッパは「新兵さん辛いよねー、また寝て泣くのだろー」と悲しく聞こえると聞いていが、それ以上だった。

眠る時は、ノミやシラミに関係なく寝付くが、時々、空襲警報や、嫌がらせの総員起こしで熟睡中に起こされる。「練習生は考えるな。命令どおり動け。」と食事・水・清潔・休息・睡眠すべてを奪われた牛や馬以下の扱い。そのような状況の中、空襲警報で防空壕に避難するのが、唯一の休憩だった。

アメリカ軍の本土上陸が、目の間に迫っていた。「たこつぼ」と称する穴を掘り、そこに爆弾を抱えて潜み、敵の戦車に体当たりする。これが、中学三年生を大量に集めた理由だった。特攻隊のように、形式的にでも希望者を募ることとはない。この年代は、体がまだ小さく、身軽で敏捷びんしょう。大学や専門学校せんがくの学生のように理屈は言わない。お国のためだと言われれば、素直にその気になる。そのうち、毎日毎夜のシゴキで「早く死んだ方がましだ」と思うようになった。

私たちの指導者は、教班長と呼ばれる下士官のほか、飛行機に乗れなかった甲飛の先輩が多くいた。彼らは、私達

を引き連れて、戦車に体当たりすることが分かっていた。遣るかたない憤懣を、私達にぶつけて来る。憤懣の餌食にされた私達こそ哀れだった。「早く戦地に行きたい」と言う者が多くなった。

広島に新型爆弾が落とされたのは直ぐに知らされ、空襲で避難するときは、白い毛布を持ち出し、防空壕ではそれを被るように指導された。一般市民には教えなくても、私達は大事な「人間爆弾」だからだろう。八月九日、ソ連が参戦したことは聞いたが、長崎に新型爆弾が落とされことについては、出身者が多いためか知らされなかった。

八月十五日正午に、陛下の放送があるとのことで、三種軍装を着て、航空隊全員が練兵場に集められた。カンカン照りの暑い日だった。直立不動（気を付け）の姿勢でラジオを聴いた。雑音ばかりで、内容は全く分からなかった。「ソ連が参戦し、本土決戦が始まる。」と思った者が多かったが、負けたと思った者は誰もいなかった。

夕方になって、少しざわついた雰囲気になった。分隊長の話を聞くため集合した。日本が降伏すると聞き、悔しかった。皆、手放しで泣いた。今後、私達はどうなるのか、何も分からない。北九州の勇ましい男が、切腹すると言いだした。手榴弾で自決しようと言う者もいたが、私は怖く

て御免だと思った。

翌日、近くの大和航空隊の戦闘機が、徹底抗戦のビラをまいた。分隊長が「生きて虜囚の辱めを受けず。貴様達は軍人である。本日から挺身（捨て身）切り込みの訓練をする。小銃に着剣して、手榴弾の一発は敵に投げ込み、後の一発で自害せよ」と言った。小銃は教練（練習用）銃で弾は撃てない。玉砕戦術の匍匐前進と、突撃の猛訓練が二三日間続いた。訓練の前、両親宛に遺書を書かされた。「死にたくない」とは書けない。「もう一度だけお会いしたい」せめてもの抵抗と思った。乙飛の分隊で逃亡者が出て「敵前逃亡だから銃殺」と聞かされた。この時ほど、中学生と軍人の違いを実感したことはなかった。その後、逃亡兵はどうなったか知らない。

八月十八日頃、訓練は中止になり、武装解除のため小銃や帯剣（腰に下げる剣）・機関銃・擲弾筒（小型爆弾などを発射するためのもの）などを手入れし、ノートや教科書などを焼却した。午後五時、最後の軍艦旗降納があった。京都大学出身の予備学生が「何時の日か、もう一度ここに集まってアメリカをやっつけよう」と激を飛ばし、「同期の桜」を歌った。皆泣きながら歌い、負けて悔しいと本気で思った。

日暮れに、兵器を練兵場に運んだ。帰りに、農業用ため池に電灯の明かりが映っていた。その時、平和が来たとき実感した。兵舎に帰ると電灯の覆いがとられていて、夕食に大きなボタ餅がでた。今でも、人生最高のご馳走だと思っている。その日は、上官に殴られた恨みや戦争に負けた悔しさ、死なずに済んだこと、電灯が明るくなったこと、アメリカ兵や中国兵にどんな扱いを受けるのか等、色々な思いが錯綜した。その後、上官が殴らなくなった。兵舎で飼っていた豚を処分し、肉料理やゼンザイなどのご馳走が出て、ご飯の量も増えた。

八月二十日頃、「貴様達は故郷へ返す。」と言って帰宅の準備が始まった。当時、復員と言う言葉はなく、私達は中学生だから返され、上官たちは、アメリカ兵が来るまで残されて捕虜になると思っていた。

帰りには、軍服（三種軍装）・軍靴・毛布・下着類、さらに飯盒や水筒などを衣囊（リュック）からはみ出すほど貰った。戦災で、何も着るものがなかったので、高校を卒業するまで軍服で済ました。

帰る日の前夜、長崎市に帰る者が集められた。しばらくして、みんな目を腫らして帰ってきた。「長崎に新型爆弾が落ち、家族は皆亡くなっているだろう。七十年は草木も生

えない状況だ。どこか、他に帰るところを変更するように」と言われたとのことだった。しかし、「親や兄弟の骨を拾わなければならぬ」とみんな長崎に帰ることになった。

朝食後、大きなオニギリと、ゼリーの入った乾パンや缶詰を貰って駅に向かった。みんなが、汽車が発車したら殴られた教班長に投げつけようと、小石を拾ってポケットに入れた。生憎、貨物車だったため、ドアが閉められ、恨みを果たすことは出来なかった。

大阪駅に着いたが、見渡す限り焼け跡である。私たちは、中学生の兵隊だけ返されると聞いていたがウソだった。各地から帰る陸軍も海軍も、若者も老兵も、ぎゅうぎゅう詰めの客車に乗り換えた。何時に発車するか分からない。喉が渴いても、水汲みに行けない状態だった。

そんな中、汚れた子ども達が大勢来た。「水を汲んで来てやる」と言う。みんな水筒や飯盒を出して頼み、オニギリや乾パンを分け与えた。しかし、発車のベルが鳴っても、子ども達は戻って来ず「やられた」と思った。

この戦災孤児達も、今は高齢者になっている。戦後の混乱期をどの様に過ごしたろうか。高度経済成長を支えたことだろう。平穏な年金生活者でいてほしいと思っている。

神戸や姫路など、都市はみんな丸焼けで、姫路城だけが

ドーンと立っていた。広島に着いたのは夜明け頃だった。見渡す限り焼け野原で、まだ火が燻くすぶっている感じさえした。鉄道の復旧が完全でないためか、何時間も停車し、放射能をだいぶ吸っただろう。

広島を除いて、どの駅のホームも、レールや鉄橋などは破壊されていなかった（これを書きながら「アメリカは、戦後の占領政策まで考えて空襲したのだろう」と思った。鉄道などが破壊されていれば、後の朝鮮戦争や占領政策に影響したと思う。勿論、戦後の復興にも助かった）。

やっと、門司港に着いた！九州に戻った！ここまで来れば歩いて帰れる。

停車駅ごとに兵隊達は降りて行ったが、一般人も乗り込んで超満員だった。予科練仲間とは、別れの挨拶も出来なかった。諫駅で何人も降りたが、奈良海軍航空隊の仲間は二人。ここで初めて、お互いの住所をメモした。島原商業のMさんだった。この人だけは、その後にも何度も会ったが、ほかの戦友の消息は名簿等もなく、全く分からない。

ようやく、地獄の予科練から生涯の故郷、諫早に帰った。諫早は、一カ月前と変わっていなかった。母は涙を流して喜び、私は死んだように眠った。翌朝、熱っぽいので体温を測ったら微熱があり、二三日後には、林医院（現在 諫

早郵便局）に入院した。病名は湿性肋膜炎。薬も注射も殆どほとんなく、ブドウ糖の注射を受けた。父や弟達が掘ってきてくれる彼岸花の球根をすり潰して、足の裏に貼る湿布が最高の治療だった。

九月二日、十五歳の誕生日を迎えた。この日、東京湾の戦艦ミズリーの甲板上で、降伏調印式が行われ、日本は敗戦国となった。

九月中旬頃、アメリカの占領軍が病院前の国道を通過して、小野の航空隊跡に駐屯した。トラックやジープ、水陸両用車に乗った兵隊、多くは自動小銃を肩にかけ、チューインガムを噛みながら、隊列もバラバラに歩いて行く。「この野郎」と思い、興奮して体温が三十八度を超えた。しかしその後、アメリカの占領軍がブルトナーやパワーシヨベルで、病院前の穴ボコの道を修理しているのを見た時、戦争に勝つ訳はないと改めて納得した。

食事は、弟達が毎食運んでくれた。今考えると、家族の食べ物を随分独り占めにしたように思っている。牛乳は、通常手に入らない貴重なものだったが、農学校の牛乳を親戚のお世話で毎日一合、さらに、弟が飼っている鶏の卵も頂戴した。病院には、ラジオや新聞もなく、初めは退屈したが、叔父が本好きで、日本文学全集を全巻揃えて持って

いたため、病院に数冊ずつ持ってきてもらった。さらに発禁の書「蟹工船」までも毎日読みながら病院生活を送ったが、病気の回復が早く、二カ月あまりで退院した。

最近、共済年金の訂正で、厚生労働省から履歴書の写しを貰った。

『昭和二十年七月二十五日 奈良海軍航空隊二入隊（海軍二等飛行兵） 同日 甲種飛行予科練習生ヲ命ス 昭和二十年九月一日 現役満期（海軍上等飛行兵）』

私が兵隊であった、唯一の証拠である。就職する時、「軍国少年や予科練崩れと思われるから、履歴書に兵歴は書くな」と学校で指導された。

当時、日本で、いや世界中で最も若い正規兵だったし、最速の進級だと思う。昭和二十五年頃、警察予備隊が発足する時、警察から「下士官で採用するから、応募しないか」と勧められたが、もうコリゴリと思いつ断った。

甲種飛行予科練習生の採用は、昭和十六年までは、毎年二百人程度だったのが、十七年は千人以上、十八年度に（十三期）二万八千人、十九年度（十四期）が四万一千人、十五期が三万七千人、昭和二十年度（十六期）が四月から敗

戦当日の八月十五日まで、十次に亘って二万五千人が、奈良や高野山の宗教施設、宝塚の音楽学校など、各地の急造した航空隊に入隊させられた。諫早の小野島にも、予科練を卒業した飛行練習生が「赤とんぼ」の愛称で呼ばれる複葉ふくよう練習機に乗っていた。

予科練習生とは、本来は教育を受ける生徒であるが、練習用の飛行機もない、ガソリンもない中で、二十年六月に飛行兵としての教育は中止され、整備兵という名の陸戦隊に変更された。しかし、そのことは最近まで知らなかった。特に、敗戦直前に入隊した私達は、本土決戦に備えた急造の兵隊で、教育とは程遠いものだった。

今では、極めて短期間に良い経験をしたと思える時もあるが、戦争は絶対にしてはならない。

現代は、何を言っても、何を聞いても怒られたり、警察に捕まることはありません。みなさんも平和について友達や家族と話し合ってください。

（平成二十五年八月寄稿）

『旧満州からの引揚げ体験』

永島 美恵子（白岩町）

旧満州（中国東北部）ハイラル市で迎えた昭和二十年八月八日は、私達家族六人が揃った最後の日になった。運命の日の前夜、私は、のん気に姉と映画を見に行った。家には来客があり、家族の笑い声が響いていた。

翌八月九日の早朝、爆弾の音で目覚めた。ソ連軍が侵攻して来たのだ。家の中は、割れたガラスが散乱していて恐怖に震えた。家から十数メートル先の市立病院に投下されたのだ。「ただちにこの街から逃れよ」と市公署（市役所的なもの）から指令が下された。

観象台（气象台）に勤める父は、数人の所員と共に職場に残り、所員の家族と私達母娘十数人で街を出た。父は、長崎測候所（後の長崎海洋气象台）に勤めていたが、昭和七年の満州建国により、昭和九年大志を抱いて満州へ渡ったと聞いている。

別れ際に父が言った「どんな場に遭遇しても、日本人として恥ずかしくない行動をとるように、命を大切に。」の言葉が胸に残っている。その場が父との永遠の別れとなった。

後日聞いた話によると、職場に残った父一行は、通信網

が切断されたため、関東軍からの指令により、興安嶺（中国東北部）に連絡に向かい、その後には消息不明となったとのこと。敵の銃弾に倒れたか、疲労困ぱいで力尽きたか知る者はいない。

私たちは家を出て、炎天下を歩きに歩いて、やっとたどり着いたハイラル駅は、火の海だった。

関東軍の官舎はもぬけのからで、前日に情報を得て、一般市民を置き去りにして撤退していた。

夕暮、行き先も分からぬまま無蓋車（積荷を運ぶ貨車）に乗せられた。途中、ソ連機の襲来に遭遇し、貨車の下に隠れたり恐ろしい体験をした。やっとたどり着いたチチハルで終戦を迎えた。母三十七才、姉十六才、私十才、妹八才、一番下の妹は八カ月だった。それからは、私達母娘の「生きる闘い」が始まった。

母は、中国人の子供の乳母や掃除婦をし、姉はウエイトレス等々をした。私は、煙草工場へ働きに出たが、ここでは作業中に煙草の粉が口に入るので、二日で辞めた。次に始めた仕事は、見世物小屋や食堂があり大勢の人が集まる巨大公園での「煙草売り」。客が私の前に来ると、他の売り子たちがわっと集まって来て、小さい私はいつもはじき出されていた。一日中立っていても、売れるのは一個か二個

だった。

次に始めたのは「西瓜すいかのハエ追い」。炎天下、台の上に切つて並べられた西瓜にたかるハエを、羽のうちわで追い払う作業だが、時には居眠りをして、ハエの襲撃を受け、赤い西瓜の面が真っ黒になっていることもあった。夕方、ソ連紙幣の日給十円を握りしめて、家路についた。そのような日々を過ごしていた。

太平洋戦争終結後、昭和二十一年五月から、順次、日本への引揚げが開始された。八月下旬に私たちは、日本へ帰るためチチハルを出発し、一カ月近くかかって引揚げ船が出港するコロ島に到着した。攝津丸せつまるに乗船後、船酔い等に苦しみながら九月末に佐世保の浦頭港（現在のハウステンボス付近）に着いた。

上陸時、検疫所にてシラミなどの防疫対策としてDDT（消毒薬）の粉末をあびせられ、体中真っ白になった。その後、南風崎はえのさき駅から汽車に乗り、諫早を経てやっと父の故郷である深江に帰り着いた。当時十才の私には、大変な体験をした一年だった。

佐世保市針尾の浦頭公園に「引揚げ記念館」があるが、館内には当時の貴重な品々が展示され、引揚証明書や上陸

時の検便で使用したガラスの棒、飯盒・衣類・引揚船の写真等がある。皆さんも、展示品を通して、当時の様子を知り、戦争の恐ろしさを少しでも感じて欲しいと思う。

（平成二十五年十月投稿）

『小長井港沖 米軍機B29引き揚げ』

平成四年二月（生涯学習資料）平成二十一年四月再編

森 春 義（小長井町）

あの辛かった、あの悲惨な、さきの大戦の思い出や、傷跡も戦後四十八年の歳月が風雪とともにうすれ、忘れられてしまいそうな平和で幸せな日々を、私達は過ごしております。

昭和十九年十一月二十一日、中国大陸より来襲した米軍機ボーイングB29が、大村の海軍航空隊より迎撃のため発進した戦闘機ゼロ戦に、多良岳上空の空中戦で撃墜されました。戦時中とはいえ、のどかな小長井上空をかすめながら波静かな小長井港沖の海中に墜落し、機体に損傷が少なく、ほとんど完全な状態で着水沈没していたので、これを引き揚げる事になり、当時、私達がこの引き上げ作業に係し、強烈な衝撃をうけ感動しながら作業をしました。

あのような、大きな出来事も歳月と共に人々の記憶も薄れかけていると思い、後世の人達にも、小長井町の歴史のひとつまとして語り伝え、私達も当時を思い起こし戦争の悲惨さ、平和の尊さを思い直してみるために、この問題を取りあげ、お話をしてみたいと思います。

大村第二十一海軍航空廠

私は、昭和十八年四月五日、大村第二十一海軍航空廠機材部（その後補給部となる）に仲間五十五名と十四歳の時に入廠し、半年間、心身ともに過酷な軍事訓練と飛行機全般についての特訓を受けました。昭和十八年十一月、陸上機と水上機の組立整備工場にそれぞれ配属され、私は陸上機の松添班で作業をし、九七式艦上攻撃機、零式戦闘機や雷電、紫電など小型機の整備作業などで経験を積みました。翌年の昭和十九年、輸送機班に配属され、双発のエンジンを搭載した大型機（一式陸上攻撃機、九六式陸上攻撃機、それに戦前海軍が購入していた米国製のダグラス輸送機の三機）の整備を班長以下六名で担当しておりました。

当時大村には、東洋一と言われた私達の第二十一海軍航空廠、これに隣接して大村海軍航空隊、近くに陸軍の大村第四十六連隊と多くの軍事施設があったため、毎日のように一回から二回の空襲警報がかかり、中国大陸からの米軍機ボーイングB29による攻撃を受けていました。

第一回目の大村大空襲

昭和十九年十月二十五日、大村での第一回目の大空襲があり、最新鋭機の流星B7と言う複座機（八百キログラムの爆弾または魚雷一個を胴体の弾倉内に搭載し、急降下爆撃、

雷撃ともに可能)を作る工場を急襲され、三百余名もの死者を出しました。この工場は壊滅状態となり、その後、この流星B7はやっと一機だけが完成したが、多くの海軍高級将校をはじめ私達が注目している中、十分の性能と妙技を披露しながらの試験飛行中、急降下し高度不足のため機体の引き起こしが出来ず、真つ逆様に墜落した。大きな衝撃音と共に機体は爆発炎上し、私達の目の前で流星B7の機体とともに炎上焼死する二名(名テストパイロットの清水少尉、他一名のパイロット)を、どうする事も出来ず一塊の機体中にくすぶる遺体に手を合わせ涙したものです。

小長井に墜落したB29の引き揚げ

一・B29墜落

昭和十九年十一月二十一日午前十時頃、この日も空襲警報が発令され、近くの防空壕に避難し空襲警報の解除を待つて所定の部署につき、輸送機の整備をしていました。午後三時頃、戦闘機班の先輩がきて「森、小長井に米軍のB29が落ちたらしい」と言うので半信半疑で家に帰り、(当時朝は五時、帰りは九時すぎの列車で通勤)母が「きゆうは小長井に、十一時頃アメリカン、ふとうか飛行機のおっちゃけて、そりや、ううごつじやった、ここんにきん、うえんば、ふとうかとんゆらーゆらーしながら、おじって、いっ

たときやあえすかったー(今日は小長井に、十一時頃アメリカの大きな飛行機が落ちて、それは大事だった。この辺りの上を大きなのが揺ら揺らしながら落ちて行った時は怖かった。)」と話した時に事実を知り、その晩はなかなか寝つくことが出来ませんでした。

二・B29墜落現場へ

翌日は、通勤列車の中や職場でもその話ばかりでした。その日の午後、戦闘機班にいた小長井町牧の原田茂喜、小川原浦の田川幸郎、井崎の山開秋義君達は、墜落したB29の引き上げ作業のため小長井の墜落現場に行った事を聞き、私も上司に小長井のB29引き上げ作業に参加させてくれるように申し出たところ、今日はだめだから明日から参加させるとの命令がありました。

十一月二十三日、その当時まだ、非常にめずらしいクレイン付きのトラックにゴム製のボートやその他、多くの引き揚げ用の資材を積み込んで小長井へ向けて十時頃出発しました。二時間ぐらいトラックの荷物の上で揺られ、やつと昼頃、現在の小長井町役場付近まで来てみると、海岸より五百メートルぐらいの沖合に、B29の大きな垂直尾翼だけが見えました。その、とてつもない大きな垂直尾翼に驚きながら農協の農業倉庫前に到着してみると、船津地区は

道路も空き地も人の波で、現在の役場付近から井崎の野中製材所の線路の上まで黒山のような見物人でした。憎い米英鬼畜の飛行機やアメリカ兵をひと目見ようと、東は鹿島、西は諫早あたりから連日の人ばかりでした。

その日、私は到着後すぐに海岸近くの小屋のそばで待機を命じられました。しばらくして五、六人の警防団員（現在消防団）が波打ちぎわより、B 29の搭乗員の遺体を運んで来るのが見え、それと同時に憲兵二人と海軍将校五人（二人は軍医）それに眼鏡をかけた若いひ弱な陸軍二等兵一人も一緒に来ました。私が小屋の陰に粗むしろを三枚広げると、その上に警防団の人が遺体を寝せました。私は、あれほど米英鬼畜と憎んでいましたが、初めて見るアメリカ兵の遺体に、なぜか憎しみを感じなかったのが不思議でした。

三. B 29 搭乗員の検死

私の目の前で、軍医による検死が始まりました。遺体の足には、チョコレート色をした編上げの立派な長靴を履いており、それを脱がせるのを見て驚いたのは、編上げ長靴の中に、また、チョコレート色の短靴を履いていたのです。服装の上は、皮ジャンパーの下にスマートな軍服、カッターシャツにネクタイを締め、その下には純毛のシャツと綿の肌着をつけておりました。服装の下は、軍服のズボ

ンにズボン下をつけ、靴下は二枚（純毛の浅黄色）もはき、贅沢な出で立ちでした。

軍医が検死をしていく中で、わが陸軍も使っていた真鍮製の認識票が見つかり、その場には不似合いの陸軍二等兵の出番が来たのです。それは認識票に英語で刻銘こくめいされた、氏名、階級、所属部隊等の解説をするためでした。この時、なぜ大学出身のひ弱な陸軍二等兵が必要であったのかと、私の頭の隅に残っていた大きな疑問が解けたのです。

遺体が上がったのはその日に二人、翌日は四人、その次の日が二人だったと思います。私がある場で見た立会い検死をされた搭乗員は、その飛行機が隊長機であったのか、白髪まじりの四十歳ぐらいで階級は大尉、また最年少は十九歳だったと記憶しています。いずれも頭や腕、左右の大腿部を骨折負傷しており、中には即死したのではないかと思われる搭乗員もいました。

検死が終わると、警防団員がその遺体を受け取り、小川原浦の墓地で火葬して白木の箱に分骨し、一時農業倉庫に保管していましたが、後で大村の憲兵隊へ持って行ったようでした。（また小川原浦の墓地に仮埋葬されていた残りの遺骨は、戦後、米軍が受け取りに来て丁重な埋葬に感謝をして本国に持ち帰ったと聞いています。）

四・B 29 引き揚げ現場

小長井に到着して四日目、遺体もあまり上がらないだろうと言う事で、私もゴムボートで沖の引き揚げ現場に行つて見ると、海上には今まで見たこともない大きな海上クレイン船（二百トンぐらい）と、まわりには軍の命令で徴発された太良町竹崎からの潜り船が十艘ぐらい、それに小さな漁船（運搬用）や石積み船（運搬用）が入り混じっておりました。私は、引き揚げ作業中の潜り船一隻に、生まれて初めて乗り込んでみました。中には潜水夫が一人、ポンプを突く人が二人、舵取りが一人いました。手が足りないので私に「この棕櫚繩しゅろなわを握れ。海底で作業している潜水夫が合図したら、棕櫚繩しゅろなわをたぐり引き揚げろ」と言われました。それから、機関砲の弾や飛行機のいろいろな部品等を引き揚げる中で、海底の潜水夫からの引き揚げの合図があったので、棕櫚繩しゅろなわを手繰りあげました。もうよかろうと海面に眼をうつすと、水面に右手首が見えた後、目の前に米軍の首から上が現れ驚きました。その後、遺体引き揚げの取り扱いを警防団の人たちに頼みながら、私はよくよく死人に縁があるものだと思つたものです。

また、この遺体が上がる少し前に、近くの潜り船の上が急に騒がしくなりました。空気ポンプを急いで突出し、潜

水具の頭部を外すのもどかしい様子で、潜水夫が慌てて船に上がってきました。潜水夫が騒いでいるのを見ると、顔は蒼白な様子で海底を指差して「土左衛門、土左衛門」と言っておりました。海底の遺体につまずいて転び、驚いて引き揚げてもらったようでした。せっかく探し当てた遺体だからもう一度潜って引き揚げる様にと仲間の人たちが説得しても、死人がよほど怖かったのか、その潜り船は作業を放棄してその日は帰ってしまいました。（墜落した当日に米兵を一人収容し、私が関わった遺体が九人、後日、近くの長里海岸に漂着した一人の遺体もあり、B 29 の搭乗員は十一人だったことが判明。）

その翌日も沖合に出て引き揚げ作業をする中で、海底に落ちている二百五十キログラムの爆弾を引き揚げる事になりました。潜水夫がワイヤーを掛けた爆弾をクレーン船で吊り上げ、誰の石積み船だったか顔も名前も思い出しませんが、私とその石積み船の船底で引き揚げられた爆弾のワイヤーを解き、爆弾が船内で移動しないように固定し、四個目をクレーン船が四、五メートルの高さに吊り上げたと思つた時、爆弾に掛けていたワイヤーが、ずるっ、ずるっ

と解け始めました。これを見ていたまわりの潜り船は、エンジン音をいっばいあげてクモの子を散らす様に逃げ出

しました。

爆弾回収の潜り船（クレーン船と私が乗っていた石積み船）は動く事が出来ず、落ちかかった爆弾が大きな水しぶきを上げ、海底に落ちてしまうまでの数秒間の恐怖は、今も忘れる事が出来ません。搭載していた八個の爆弾は、すべてその日に海底より私が乗っていた石積み船に回収しました。満潮時に現場から船津の港に入り、船津橋のそばに、大村から乗ってきたクレーン車をすえつけ、井崎側の線路下の空き地に揚げましたが、私は爆弾に対する知識はまったくなく、その取り扱いには身体がすぐむ思いました。その作業が済むまでは、生きた心地がしませんでした。

B 29のプロペラ、エンジン、機体の大きさにも驚きましたが、あの中国大陸の二千キロメートル奥地、成都より飛んで来た飛行機のエンジンには一滴の油漏れもなく、それを見た私は、敵国アメリカのすばらしい技術に驚き、これから先のアメリカとの戦いに大きな不安を感じたものです。海底に落下飛散した、飛行機の部品とともにゴムボート、救命胴衣、野営用のテント、釣り竿、食品（パン、サンドイッチ、米の飯、チーズ、バター、肉、魚、コーヒー、紅茶）たばこ、チューインガム、せつけん等、遭難しても救助されるまでは十分生活が出来るように缶詰め、バック詰

めのものがたくさん引き揚げられ、当時の私達の生活との大きな隔たりを感じ、いつも空腹をこらえていた私達は、缶詰・バック詰の食料品を見て垂涎したものです。

他に機関砲の弾などもたくさん揚がり、その中には電波探知機、無線機、爆弾投下計算機、護身用の拳銃、時計、写真機、地図、医薬品、多数の書籍などの多くの搭載品がありました。また、搭乗員が身につけていた細く白い腹巻には、アメリカの紙幣、硬貨類もたくさん入ったままで、珍しいものがたくさん揚がりましたが、憲兵の目が厳しく何一つ手にする事は出来ませんでした。

五・B 29の輸送

B 29は、主翼が四三・一メートル、機体が三十・二メートルもあり、大きな海上クレーンで吊り上げて胴体をガスで三個に切断しました。車輪は、着陸態勢で出していたのでこれも左右ともガスで切断し、いずれも陸送するつもりでした。はじめは、主翼の下に空のドラム缶を何十個も敷き込んで浮上させ、井崎郵便局裏の海岸まで運びましたが、四十メートル以上もある長大な物体を乗せる車両がなく、道路もせまく陸送は出来ないということで、また沖合いに戻して海上クレーンで吊り上げ、ダンベール船に積み込みこれを引き船で運ぶことになりました。

しかし、初冬の北風が立ちはじめ、荒れがちの天草灘、野母崎、五島灘、西海橋下の狭く「流れの速い瀬戸を運ぶことは私には出来ません」と、泣かんばかりに人の良さそうな船頭が哀願しておりましたが、当時の軍の命令にはそむかず、無事に大村まですべてを運搬しておりました。その後、航空廠補給部水上機班の二式大艇、零式艦上観測機等を格納していた格納庫に復元した状態に並べ、専門的な調査の後しばらく展示しておりました。

B 29を運搬する際の十一月二十二日から三十日まで、大人数の私達を泊めていただき、食事や風呂のお世話などをしていただきました森蒲銚店（小長井トラック）の方、炊き出しをしていただいた当時の国防婦人会の方々に心からお礼を申し上げます。

B 29 撃墜と坂本中尉

大村航空隊から迎撃のために飛び立った坂本中尉（佐賀県相知出身）操縦の零戦が、多良岳上空の空中戦において、このB 29に体当たりをして撃墜したのでした。坂本中尉が操縦していた機体は、諫早市長田町から高来町の山中に飛散し、中尉の遺体は高来町深海榎堂えのまきどうの東北、割石地区の山中に落下しました。戦死されていた遺体は、昭和二十一年一月八日深海地区に住んでおられた山崎マサノ（当時十五歳）

さん他二名が、薪取りに行つた際、山中で発見し警防団が、この遺体を収容して深海の蓮行寺で通夜が行われたそうです。

くしくも、坂本家では戦死の公報を受け四十九日の法要をされている遺族のもとに、遺体発見の連絡がなされたと聞いています。

体当たりにより壮烈な戦死、散華をされ、二階級特進で少佐になられた坂本少佐と、遠い敵地小長井港沖の海中で戦死された米軍十一名の英霊を慰めるために、昭和五十二年十一月二十七日十三時より高来町深海の禅寺天初院にて、坂本少佐の遺族、米軍佐世保基地司令官などの出席のもと、日米合同慰霊祭が行われましたので、私も拝列させてもらいました。

さきの大戦でも、身近でこのような惨事は国内ではあまり例をみないのではないかと思います。あの大戦昭和の時代も、平和な平成の時代となり、平和、軍縮、国際化、国際交流の時代を迎えています。

小長井町にある景勝地さざんか会館の一角に、海底で亡くなられた遠い異国の搭乗員の慰霊碑が建立出来れば、殉国された英霊も安らかに眠ることが出来、小長井町も新たな国際交流、国際親善の輪が出来て、戦争の愚かさや平和

の尊さを後世に語りかけてくれるのではないかと思えます。四十七年前、空腹をかかえ初冬の冷たい雨に濡れながら、まだあどけない友と、お国の為にと、あの痛ましい惨事を処理した一端を記し、多良岳山中と小長井港沖の海底で、殉国散華をされた英霊のご冥福をお祈りし、永遠の平和を願いつつ私の話を終わります。

《追記》

B 29 引き揚げ作業後

一・霞ヶ浦へ派遣後の体験

小長井港沖に落ちた米軍機 B 29 の引き揚げ作業が終わり、昭和十九年十二月十日頃から昭和二十年三月中旬まで、茨城県の霞ヶ浦第一海軍航空廠に零式戦闘機の整備作業応援のため派遣となりました。この冬は一晩で膝上まで雪が積もり（土地の古老達の話では八十年ぶりの大雪）毎日、筑波おろしの吹き荒れ、霞ヶ浦飛行場で空腹に耐えながら頑張りました。東京大空襲の昭和二十年三月十日、この日も二時間残業をし、仲間と帰りの途中、南西方向の夜空が真っ赤に焼けているのを見ながら、東京の大空襲被災ではないかと判断をし、次の晩、次の晩もその情景を見ながら寄宿舍に帰りました。

三月十六日常盤本線荒川沖駅から帰途の列車に乗り込み、

途中の佐貫駅付近から雪化粧をした綺麗な富士山を観て、日暮里駅の近くまで来て見ると、東京の市街地は見わたす限り焼け野原となり、町工場の焼け跡に機械らしい残骸があちこちに残っているのが見られるだけでした。東京駅で、東海道本線の列車に乗り継ぎ、立錐の余地もない状態で、熱海駅付近からやっと座席に座ることが出来ました。

早朝には大阪駅に到着する予定でしたが、京都・大阪間の茨木駅で長い間列車が止められ、八時過ぎにやっと大阪駅に到着しました。しかし、大阪から乗り換える列車の運行は、当分見込みがない事がかなりの時間がたって判明しました。何か他に方法はないかとあちこちに聞き合わせ、やっと阪神電車が運行してことがわかりました。何処まで行けるのか分からぬまま、大阪駅の地下から阪神電車に飛び乗り、やっと西宮駅に到着しましたが、これから先は何も運行している乗り物はないとの事で仕方なく歩き始め、やっとその状況が判明しました。

神戸市内が米軍の大空襲を受け、西宮駅付近も大きな被害があり、まだあちこちに発生している火災も消火出来ず、亡くなった人達は道脇に放置され、遺体を何体か見ながら通らなければなりませんでした。

道路が通れない箇所では、竹の梯子で国鉄の高架に登り、

歩けないところは梯子で道路におりて進みました。何回かこのようなことを繰り返しながら、約三十キロメートルを暗くなるまで歩き須磨駅に着いたときには海岸の松の枝越しに、綺麗な大きな月が出ていたのを鮮明に覚えています。須磨駅でやっと電車に乗り込み、明石駅から蒸気列車に乗り換え帰路につくことが出来ました。

昭和二十年三月十九日、大村第二十一海軍航空廠補給部組立整備陸上機班に復帰し、二カ月後に再度、二十日ぐらいの予定で鹿児島県の鹿屋へ派遣されました。

鹿屋では、競馬場の中で九三式中型練習機の機体を組立後、エンジンを搭載し、機体とエンジンの調整、整備をし航空隊に引き渡す作業をしました。一日何回も米軍艦載機の空襲があり、身近に機銃掃射を受けながらの作業で、しかも梅雨の時期になり、なかなか思うようには作業が進まず二十日の予定が二カ月に延び、昭和二十年七月十七日ようやく我が家に帰る事が出来ました。

職場に復帰してみると、旧制諫早中学校の生徒が学徒動員として配属されており、私の班に隣家の牧本英治君が配属されていたのに驚きました。

二. 昭和二十年八月九日

忘れる事の出来ない昭和二十年八月九日。大村航空廠で

最新鋭戦闘機の紫電改一号機が完成し、私の班はその受け入れ検査のため飛行機部に出向き、紫電改の雄姿と初めて接しました。私は、エンジン周りの点検をしており、エンジンの真下で締め付けナットに安全線をかける作業中に、突然、電気のスパークを束にした様な閃光が目に入り、はっとした瞬間、大きな爆音ともすごい爆風により土煙に包まれ、思わず目と耳を指で押さえ機体の真下に腹ばいになりました。

しばらくして、学徒動員の生徒達が騒ぎ始めたので、外に出てみると西南の上空には、中が真っ赤になった、きこか、かぼちやの形をした大きな黒い雲が湧いているのを見て、何が起きたのか想像もつかず、仕事も手につかない状態になりました。また、南東方向（矢上か茂木あたり）の上空には、大きな長方形の物体を吊り下げた落下傘が二個並んで、ゆっくりと降りているのを見ました。これは、長崎の空爆状況を撮影する米軍の機材ではなかったらうかと思えます。

後日、この黒い雲が「原子爆弾」であると判明しました。

この日の帰りに竹松駅から乗り込んだ列車は、遅れながら諫早駅までやっと着いたものの、長崎本線を通る列車の見通しは立たず、通勤仲間と諫早の町中を東諫早駅まで歩き

ました。駅ホームで夜十一時頃まで待つても列車が来る気配もないので、また肥前長田駅までてくてくと歩きました。歩き疲れここでも列車の来る見通しもたないのので、肥前長田駅の待合室で仮眠して、翌朝四時頃からまた歩き出し、やっと八時頃、小長井の我が家に帰ることが出来ました。

《大村第二十一海軍航空廠の概要》

昭和十六年十月一日、第二十一海軍航空廠は現在の大村市古賀島町などの一帯に開廠。当初は、約六十四万五千平方メートルの敷地に六十二棟の工場を建設。昭和十九年度から学徒勤労動員令により、各地から多くの旧制中学、女学生が動員されました。我が職場には佐賀県鹿島女学校の生徒が女子挺身隊として配属され、昭和二十年度からは諫早中学校生徒が学徒動員として配属されました。

最終的には総敷地面積約三千四百万平方メートル従業員数五万人で、零式艦上観測機、流星B7爆撃機を生産しておりましたが、昭和十九年十月二十五日米軍のB29爆撃機により空襲を受け、工場（流星B7工場を中心に）の大半が焼失し、約三百人以上が死傷しました。

この、空襲で大半の工場施設が壊滅状態となり、大村、諫早の僻地に工場を分散して生産をはじめました。昭和二十年八月九日、毎日のような米軍機空襲の中、最新鋭戦闘

機紫電改の一号機が完成し、受け入れ検査の最中、ものすごい閃光と爆音爆風を受け、呆然、放心状態の中に大きな原子雲を発見しました。

大村第二十一海軍航空廠の工場は、昭和十九年の空爆で大村、諫早周辺地域に疎開し再開したものの、昭和二十年八月十五日、昭和天皇の玉音放送により終戦となりました。実働三年十カ月で終戦、昭和二十年十一月、正式に廃廠となりました。

（平成二十六年四月寄稿）

『ビルマでの戦争体験』

橋本 三四郎(高来町)

【この体験談は、平成二十七年一月に高来町在住の橋本三四郎さんからお話を伺った内容を掲載しております。】

昭和十七年十二月、十九歳のとき兵隊検査で徴用(戦時などに国家が国民を強制的に動員し一定の仕事につかせること)され、第十八師団(菊兵团)歩兵第五十五連隊第二中隊として大村市に配属された。それから三カ月後の昭和十八年三月、二十歳の時、戦闘地であるビルマ(現ミャンマー)に送られた。

まず、日本から船で三カ月をかけてシンガポールに向かい、列車でタイのバンコクを経由し、その後歩いて戦地であるビルマのフーコンに向かった。途中五人の仲間が虎に襲われ亡くなった。私達は、虎に襲われないために火を灯したりしながら、何とか目的地まで辿り着いた。

フーコンに着くと、戦闘は激しさを増しており、すぐに前線へ送られた。私は、背中と腰に各々三十箱の銃弾を負い、戦いの現場に向かった。

部隊の先頭にいた私は、機関銃を振りかざし、五メートルもの至近距離で敵(中国兵)とにらみ合いとなり激しい

銃撃戦となった。その瞬間、背後に「コトーン」という衝撃を感じた。同時に私の左腕が垂れ落ちた。敵の弾が右肩の付け根から入り、左脇の下を貫通していたのだ。歩くことができなくなり、そのまま仲間につきずられ谷底に運ばれた。

その後、象に乗せられ野戦病院に連れて行かれた。弾を受けた時は感じなかったが、暫くしてから激しい痛みに襲われた。

病院とは名ばかりでベットなどは無く、土の上に寝かされた。治療と言ってもたまにガーゼの付け替えがある程度であった。キリキリと痛む傷口からは、ウジ虫が湧き、ガーゼを何枚も差し込まなければならなかった。その時の後遺症なのか、日本に帰還してからも傷口から白い異物が湧き出て、強い異臭を放ち続けた。野戦病院で三カ月ほど療養し、再び戦地に送られた。

次に送られた戦場は、飛行場があるビルマのメイクテラ(現メイッテイラ)だった。戦闘に向かったものの、依然左腕は垂れ下がったままであった。

英国軍が迫撃砲を打ってきたため、自分たちは塹壕(ざんごう)銃撃から身を守るために使う溝)から顔を出し、敵の攻撃に備えた。しかし、胸や尻に弾を浴びてしまった。胸の弾は

自力で取り出したが、現在も尻の弾は体内に残ったままである。弾が唇を貫通した時もあったが、歯で止まったため、引き抜いて敵に向かって投げたなどした。

終戦の日をメイクテラで迎えたが、その日に亡くなった戦友もいた。その後、何百人もの仲間とともに捕虜となり、鉄橋を修復する作業をさせられた。その時は、食事として米とベーコンの缶詰が配給された。

いよいよ帰還することとなり、ラングーン（現ヤンゴン）から船に乗って広島県の宇品に着いた。ビルマに向かった当時、同じ部隊にいた三百人もの仲間が、日本へ帰り着いた頃には五人になっていた。しかも、その部隊にいた五人の湯江出身者のうち、生き残ったのは自分一人だけであった。

その後、広島から汽車に乗って、やっと湯江駅に着いた。駅から歩いて家に向かう途中、三歳年下の妹が迎えに来てくれともうれしかった。出征前にすでに母親は亡くなっていたが、父親は健在であった。しかし、私には三人の兄がいたが、海軍の長男、陸軍の二男、海軍の三男は、いずれも戦争で亡くなった。その後、自分は結婚し、子、孫に恵まれ、今年九十三歳を迎える。

（平成二十七年二月掲載）

被爆体験

『終戦前後』

山口 悦夫（長崎市）

昭和二十年八月九日長崎に原子爆弾が落下し、一瞬のうちに亡くなられた方、その後原爆病院外その他で次々に亡くなられた方達に対し、被爆生存者の一人として、心からご冥福をお祈りします。

当時私は、九州配電（現在の九州電力）の諫早営業所に勤務していた。その年の八月一日、長崎の浦上地区に空軍の爆撃があり、配電線等も被害を受けた。その復旧工事依頼があり、私は諫早班長を命ぜられ、作業員六名を編成した。

翌二日から一週間の予定で、毎日諫早―長崎間を通勤し、寸断された各家庭への引込線の改修工事に従事した。茂里町にあった三菱製鋼所付近は、高圧線の被害が最もひどく、主力班はこの復旧工事に集中されていた。（この方達の大半が後日の原爆でなくなられた。）私たちの班は、幸い七日に工事を完了した。私は、八日に諫早で整理精算をし、翌九日に工事完了報告のため長崎に行くことにした。

八月九日、私は八時頃、諫早発の汽車に乗り長崎に向かった。発せられていた空襲警報も途中で解除になり、警戒

警報に切替えられた。浦上駅で下車し、借りていた工具を返すため、稻佐橋のそばにあった長崎火力発電所（数時間後全壊）に立寄り、十時頃、五島町にあった九電事務所に着き、精算報告を済ませたのが十一時だった。帰途につくため、会社の玄関から電車通りに出た瞬間だった。

まず「ピカッ」と目が眩むような光線が走り、盛夏の太陽が照りつける長崎の街に、写真の「マグネシウム」のものとすごい量を一面に焚いたように、黄色の煙がもくもくと巻き起こる中につつまれ、一寸先も見えなかった。とっさに大型焼夷弾が落ちたのかと思った。

待避しようと思つて走ろうとした瞬間、今度は「ドーン」と爆風に飛ばされた。それからどの位の時間か失神していたようだ。突然、家の梁のようなものが足に落ちてきて目が覚めた。目が覚めた途端、まるで硫酸でもかけられたように「頭、顔、腕」にもすごい熱さを感じた。タオルを取り出し、熱さを払おうと身体をさすった。しかし、熱さは増すばかりであった。頭は髪の毛が「ジリジリ」と焼けるように熱い。かぶっていた戦闘帽は近くに落ちていた。半分は黄黒く焼けこげていた。空襲警報が解除されている時だったので、せっかくの防空頭巾が、首に巻いたまま背中にあるのが残念だった。とにかく会社に行くとうと決心し、

戦闘帽をかぶり直し、痛い足を引きずりながら立ち上った。

会社に着くと、鉄窓玄関の「シャッター」などは飴でも曲げたようになっていたが、建物自体は大丈夫のようだった。社内にあった防空壕の中から傷ついた女子社員たちが這い出していた。普段気強いH嬢が髪をふり乱し顔面は血だらけになりながら「私はやられました」というような言葉をくり返し泣き叫んでいる姿。窓ガラスが吹き飛ばされ、その破片で傷付いた女子社員が血だらけの髪をふり乱してあちこちで泣き叫んでいて、ものすごく、また憐れな姿であった。社内は、右往左往する人の群れで一杯だ。混乱の中に連絡があり、無傷の者は社内にて待機して指示を待ち、負傷者は市内の病院等で適宜治療をうけることになった。

私には、今から治療できる病院を探し火傷の手当を受けて、今日は長崎で適当に休養し、明日は任務があるので朝から会社に出勤するよう命じられた。両親が心配していることと思うが、連絡のすべもない。治療には女子社員が一人付添ってくれることになり、近くの井手外科に行ったが、爆風で薬品など散乱し治療不能であった。人に聞き、新興善小学校の緊急治療所に行ったが、負傷した軍人がいっぱい受付けてくれなかった。傷は痛むが仕方ない。道路には、負傷して動けず「熱い熱い」「水をくれ」と言いながら

道端に座り込んでしまう人や付添われて治療所を探す人でいっぱいだ。勝山小学校の治療所にたどりつき、軍人優先で待たされたあげく、やっと火傷薬をもらった。付き添いの女子社員から、薬を頭、顔、腕に塗ってもらい、包帯がないのでタオルとハンカチでくくってもらった。

女子社員と別れ、愛宕町に叔母がいるので泊めてもらうべく訪ねたが、家具類が倒れて散乱しており片付け中で、休むことも出来ない状態だった。仕方ないので、あてもなく会社に泊めてもらおうと歩くうち、小島町で女子社員の方と逢い「ここで休んでいきなさい」と勧められ、屋外で家族の方達と一緒に休むことにした。

薄暗くなった高台を望むと、県庁や女子商業校舎等が炎々と燃え上っていた。茂木方面から、けたたましいサイレンを鳴らしながら消防車が数台火災現場へ向った。ようやく夜が訪れようとしていたが、炎はますます拡がり、長崎の街は火の海と化しているようだ。やがて、力尽きたようなサイレンを鳴らしながら先程の消防車が戻って来た。聞けば県庁から浦上方面にかけて火の海で、延焼防止どころではなく、ただ焼けるに任せるほかはないとのことだった。

こうして私は、茂木街道の防空壕側で皆と一緒に一睡も

しないまま、不安と心配のうちに魔の一夜を明かした。朝、会社はどうなっているか心配しながら出勤した。幸い会社は建物が強く、火災からも免れていた。隣にあった缶詰倉庫は焼失して焼跡はまだくすぶっており、残った缶詰が「パンパン」と無気味な音を立てながら破裂していた。小遣室（用務員室）では女子社員が集まり、「おにぎりになくあん」の炊き出しが始まっていた。

炊き出しの朝食を食べていると、支店長室へ来るよう呼ばれた。途中、中二階の宿直室を見て驚いた。何と言えればいいのだろうか。人間がまるで木炭のように真っ黒に焦げ上がり、かすかにうめき声が聞こえるような重傷者が、数体運ばれ寝かされていた。よく見れば、先日まで一緒に復旧作業をしていた外線班の人達である。急に目頭が熱くなり涙がにじんだ。この人達は、復旧作業が続いており、作業中被爆されたのだ。ほかにも相当数の作業者達がおられたが、どうされたのだろうか心配だった。中には福岡勤務時の友達も福岡から応援に来ていた。

支店長室につくと、支店長を始め各長が集まり、被害状況の集約や復旧工事応援依頼等の検討会が終ったところであった。その内容報告書を私が持って諫早に行き、諫早営業所長に手渡し、所長から福岡の本店にすぐ電話連絡して

もらうのが私に与えられた任務であった。どうやって諫早まで行くかについても検討された。多少きついが見経由で徒歩で行けば安全ではあるが、「被爆地を縦断すれば道の尾駅から汽車に乗れそうだ」ということで、これに従うことになった。支店長は、報告書に添えて、机の引出しからバラの煙草を十本程取り出してくださった。昼食のおにぎりをもらい腰にぶら下げて会社を出発した。

長崎駅は完全に燃焼して残骸がくすぶっている。あたり一面燃え尽し、余燼（燃え残った火）がくすぶり、鉄道線路、電車線路とも瓦礫の山に埋もれ、その位置も分からない。進むにつれて被害がひどくなった。道は全然分からない。私は焼死体と瓦礫の間を歩き続けた。家族や知人を探し回る人たち、水を欲しがる人、ぼんやりあきらめたように立ちすくむ人、三十代の息子と思われる大きな死体を背負った老母も見かけた。

幸町まで来た。紡績工場が捕虜収容所となっており、捕虜たちも被爆していた。重傷者たちを戸板に乗せ、捕虜たちが担ぎ、日本の軍人が付添って運んでいた。突然、空襲警報が発せられた。「待避、待避！」とあちらこちらで声が上がった。その戸板の上に乗っていた重傷の捕虜たちも戸板から飛び降り待避しかけたが、二、三步走ってバツタリ倒

れ、そのまま息絶えた者もいた。人間の「生」に対する執着の強さを垣間見たようだった。

茂里町にいくると、広大な建物の三菱製鋼所は、鉄骨が一面にねじ曲り全壊している。さらに進むと、走行中の電車が被爆し、その残骸の中に乗客が座ったまま数人焼死体となつてゐる。「つり革」を握ったまま焼死体になつた人もいる。三輪車のハンドルを握ったままの焼死体など、あわれな光景が広がる。

また、女子報国隊の寮跡であろうか、建物が全焼して、十七〜十八歳くらいの子学生が夜勤明けで就寝していたのか、折り重なつて死亡している。幼児を自分の体で庇いながら死亡している母親もいる。お腹が破れて腸が飛び出し風船のようになつて風にゆれている死体もある。損傷がひどく男女の区別も解らぬ黒こげの死体の山が続いている。大橋の川辺には、水を求めて人と共に数頭の馬も死んでゐる。大橋、松山、山里この辺一帯に広がる、三千度といわれる光線をあびた光景は、この世の出来事とは思えぬ「地獄絵図」というか、表現することができない。

私は、傷の痛みや疲れも忘れたかのように、空襲警報が鳴ると死体と一緒に折り重なり、死臭にむせ返り吐気をもよおしながら壕に待避した。B29が二機、東方から飛来し

て「ビラ」を撒いたのだった。拾ってみると「米軍は、今度新型爆弾を使用した。その威力は充分わかったことと思われる。この爆弾で日本全土は灰となる。天皇陛下も大変心配されているから、日本は早く降服した方がよい。」このような要旨が、日本語で印刷されていた。数人の人も拾っていたが、間もなく憲兵が回収にまわり取り上げられた。

地獄の場所を悪戦苦闘の末、やっと道の尾駅にたどりついた。私は、食欲はなかったが、喉はカラカラに渴いていた。駅の入口にあつた井戸には長蛇の列がつくられていた。喉の渴きに耐えかねて列の後に並びかけたが、何だか氣になつて我慢した。駅員に尋ねると「ここまでは汽車が来る」とのこと。時間は分らないが、重傷者を諫早と大村の軍病院に運ぶ列車とのことだった。ここは、無惨な重傷者であふれていた。主に旧制五高、熊本高校の学徒動員の学生が大半であつた。真黒に焼けただれて手足のない人もいる。一般の乗車は禁止されていた。重傷者優先だったので、一人で歩ける程度の軽傷者が乗車できるのは、夜になるだろうとのことだった。

私は、駅長に支店長の報告書を見せて、重要な任務である事情を説明し、やっと今度来る列車に重傷者と一緒に乗車できることになった。一時間ほど待つと列車が来た。重

傷者と一緒に乗せてもらえたものの、車内は異様な悪臭が立ちこめていた。満員の列車内は、人間が真黒く生焼けさされて目玉だけがギョロギョロした、目を背けたくなるような者ばかりだった。途中、その悪臭のため気分が悪くなり、何度か「下車して歩こうか」と思ったが、任務のことを思うと「一刻も早く着かねばならぬ」と我慢した。

ようやく諫早駅にたどり着き、疲れきった身体を這うようにして、当時は公園橋の側にあった営業所まで歩いた。報告書を所長に手渡し、事情を説明し終わったら、昨日からの疲れでそのまま失神してしまったようだった。その後のことは全然わからぬまま、気がついた時は、どうして運ばれたのか、城見町の自宅に寝かされていた。心配して見つめている両親の顔が目に入ったとたん、私は思わず涙が溢れだした。すでに日が暮れようとしていた。

長崎から諫早まで、この二日間は長い長い日数がかかったように思えた。傷は痛み、鼻についた悪臭は取れず気分が悪い。しかし、無事に大任を果たした心の安らぎがあった。翌日連絡があり、重傷者は諫早の海軍病院に入院し、軽傷者は諫早小学校（現在の市役所のところにあった）の講堂に通院治療することになった。会社からも連絡があり、毎日治療をうけ静養するようにとのことだった。私の闘病

生活が始まった。

早速、私も杖をつきながら毎日通い始めた。広い講堂の中は足のふみ場もないように負傷者が収容された。市内の婦人会の方達が介護の応援をされており、また、小野地区の婦人会からは白米のおにぎりに、たくあんを添えてご馳走になった。私は頭と右半身の火傷の治療であった。そのうち黒人の頭のように丸くちぢんだ焼けた頭髮が、触るたびに「ボロボロ」と抜けだし、また、下痢もひどくなった。

開業医に診てもらおうことにし、馬に乗って、往診もされていた近所の荒木医院や、新橋近くにあった余瀬医院にも通院を始めた。多量の放射能を吸い込んで侵された内臓は、なかなか治らなかった。当時はまだ原爆症の治療等医師も不明で、「こんな状態が長く続けば生命の保証は出来ない」と言われ、海軍病院や診療所は毎日のように数人の死者がでている話を聞くと心配でならなかった。

母は、ドクダミ草や色々の薬草をあちこち聞き集めて、飲ませたりつけたりしてくれた。また母は、婦人会で海軍病院の治療手伝いにも行きだした。入院患者のウジ取り作業が大半で、真夏のことで重傷者の傷口が腐敗してウジが湧きだしたとのことだった。毎日箸とバケツを持って行き、負傷者の口や鼻等から這い出るウジ虫を箸で取ってやる仕

事らしい。重傷者の中で特に多い人は一人でバケツ一杯も取れると話していた。当時は薬品も不足し、治療方法も解らない中での闘病生活は、今から考えると想像も出来ない苦しいものだった。かくて八月十五日、陛下の終戦の言葉を自宅の病床の中で聞いた。母の必死の看病により、幸い下痢の回数もだんだん少なくなり、火傷の後も薄くなり快復していった。

終戦によって、今まで張りつめていた気持ちが溶けて、何だかうつろな開放感が訪れた。しかし、無条件降伏により「今後日本はどうなるのだろうか」との不安な気持ちも高まる。果たして数日もたたぬうちに、誰からともなく「長崎に占領軍が上陸する」といううわさが広まった。「アメリカ兵だ」「いやソ連兵なども来るかも知れぬ」という不穏な状態となった。「貴重品や婦女子は、当分山奥に避難したがよい」とのうわさが広まり、最小限の家財道具を持って、小学校の頃によく遠足に行つて遊んだ目代の野原から少し入りこんだ多良山麓に避難が始まった。この頃には、どうにか私の身体も快復し、会社に出勤できるようになった。まもなく、小野平野の中心で、国道から諫早湾より少し入りこんだ所にあつた旧軍の飛行練習場に、約千人の米軍が進駐する通知を受ける。九電も、大村にあつた旧日本

軍の電気材料を運搬して、突貫工事による専用配電線の建設が始まった。私は、米軍兵舎の電気主任として常駐することになった。建築、土木、電気、水道、通信など各関係業者が動員され、占領軍の兵舎造りが急ピッチに行われた。だいたい工事が完成する頃、続々と米兵が進駐して来た。街中の要所には、紫地に白で「MP」と染められた腕章を付けて小銃を持った米兵が配置されて治安の任務についた。日本側は、諫早市長の池松林一氏が総指揮者となられ、受入態勢の指揮と米軍との折衝にあたられた。問題が生じた場合は、市役所や、時には市長宅に関係者が集まり打合せが行なわれた。

ある日、私は命がけの危険なことを体験した。それは、米兵三名と大村の旧軍の倉庫まで配線材料を取りに行くことだった。運搬車は、水陸両用の上陸用舟艇（周囲は全部鉄製で車輪が付いていた）で、大きさは十トントラック並であった。彼等は以前に運搬した事があり、地理や相手方との連絡はついているとのことだった。彼等は運転台に乗り、私一人が後ろの荷台に乗せられた。幹線道路に出たらスピードを上げだした。訓練された運転は荒く、当時はまだ舗装されていない道路で凹凸が激しかったので、大きな空車がバウンドする度に飛び上り、手がかりにつかまっては

いるものの身体全体が飛び上り、腕はちぎれんばかりの状態が続いた。いつ車外に飛ばされるかと死にもぐるいが続いた。前の運転者には連絡のつけようもなく「原爆でせっかく助かった命だ、こんな事で死んでなるものか」と神仏に祈った。やっと到着し安心した。帰りは材料をいっぱい積んだので無事だった。

間もなく通訳も動員され、私は、兵舎の中の受電室勤務となった。同時に、米軍側から電気要員として、ジョンという名前の下士官が紹介され、生まれて初めて米軍人と握手をした。昨日の敵は今日の友となり、この日から、ジョンとの公私にわたる親交が始まった。当時、私は二十三才であったが、奇しくも彼も同年で、米本国では機械技師とのことであった。初めは言葉が通じないため、通訳の方の世話になっていたが、お互い不自由で仕事がかどらず、ジョンが「駐留軍用の日常会話英和辞典」を私のために特別にもらってきてくれたので、仕事の合間にお互いが先生となり、英語と日本語の特訓がはじまった。

ジョンの案内で兵舎内照明の新增設工事、配線検査、保守工事等作業員と共に行い、指導監督をするのが当面の私の日課であった。兵舎が足りないため、広い飛行機の格納庫も兵舎に改造され、にわか造りのベッドが何十となく

作られた。その各ベッドの上に電灯を一灯ずつ付けるという工事をまず始めた。兵隊達はベッドに寝ころびながら、一灯つけるたびに二十本入りのアメリカ煙草を「サンキュー」といって「ポン」と上にほうる。こちらも「サンキュー」と言って受取る。ほほえましい光景が、ただ広い室内のあちこちに見受けられた。不点事故などで修理に行っても必ずといえるくらい、タバコやガム、石鹸などをくれた。

物資が欠乏している当時においては、どれも非常にありがたい品であった。米軍側も宣撫工作（占領地で人心を安定させること）の一つとして用意していたらしく、我々関係者以外の雑用作業員を始め、通行人や子ども達にも、彼等が外出した時は、小さな袋に入れたガムや石鹸、砂糖、菓子、一本入煙草などを渡している光景が見受けられた。なかには、こちらから欲しがって無理にねだっている者も多く、敗者の悲哀を痛感した。

また、双方誰もが困ったのが雨天の時だった。なにしろ、小野平野の真中だけに周囲はみな田んぼで、構内も軟らかい土が多く、雨が降ると一面ぬかるみと化した。その上を相当数の人たちが行き来するので、たまったものではない。下半身泥だらけの人もいる。室内に入るためには、その都度時間をかけて洗い落とさなければならなかった。私はジ

ジョンが米軍の長い編上靴をくれたので大分助かった。

その後、ジョンとは会話も大分慣れて親交も深まっていた。ある時ジョンが、今度の日曜日に私の家に遊びに行きたいと言いだした。私は何もできないが喜んで承諾し、街中で落ち合い自宅に案内した。いざ迎えはしたが、物資のない当時、何のもてなしもできない。彼は土産として母に砂糖、缶詰、コーヒー等を持参し、私に七つ道具付のナイフと高級な「ライター」を持ってきてくれた。(私はこの品をその後記念として十年以上愛用した。)母手作りの「イモの天ぷら」と「焼イモ」を出すと喜んで食べてくれたので安心した。また日本茶もどうにか飲むことができた。これくらいのもてなししかできず、また土産としてやる物もなかった。ジョンは最初、あぐらをかいて座っていたが、我慢していたらしく、そのうちモジモジしたので、妹の勉強机の椅子を持ってきたらやっと安心して落ち着いたようだった。

まもなく、アメリカ兵も遂次本国に帰還が始まり、そのうち色々な思い出を残しながら、ジョンとも別れることになった。私も兵舎の仕事から開放され、本務につくことになった。ジョンがその後、アメリカ本国でどんな暮らしてあったか、私は英語も忘れてしまったが、時々思い出され

てなつかしい。戦争のない平和のありがたさを痛感するとともに、もしも今後、核保有国間で戦争が始まれば、広島、長崎の悲惨な状態の数倍の被害が相互の国を壊し、地球の崩壊につながることを各首脳は考えるべきで、核の全面廃棄を願うものである。

原爆犠牲者のご冥福を祈りながら、戦争から平和に移行した思い出すままの体験記である。

(平成十九年十一月寄稿)

『私の被爆体験』

橋本 利一（高来町）

みなさん、五島列島の福江島はご存知でしょうか。私は福江の港から小さな船で一時間ほどの、「黄島」という小さな島で生まれ育ちました。子どもの頃は、夏になると海に潜り、鋒で魚をついたり、サザエやアワビなどを採って遊んだ思い出があります。十四歳で国民学校を卒業しますと、島の男たちは、ほとんど漁船に乗っております。

私は、叔父の勧めで、国鉄長崎駅に就職しました。昭和十九年七月でした。昭和十六年に戦争がはじまってから、あちらこちらで空襲があり、そのつど避難させられる毎日をごすごしていました。

就職から一年が過ぎた昭和二十年八月一日、米軍が長崎上空に飛来し、爆弾を長崎駅の貨物ホーム近くの線路に投下いたしました。これにより、仲間が一人即死しました。また、同時に貨物ホームの反対側に時限爆弾が投下され、五日後に爆発しました。その直前に、私はその近くに行きましたが、なんとか巻きこまれずにすみました。

八月九日午前十一時二分、私は、長崎駅構内の詰所で次の作業を待っております。「ピカッ」と青い閃光が一面に

走り、その後すぐさま、「ドオン」という大音響とともに、詰所は潰され、その下敷きになりました。詰所入口の近くに木製の電柱があり、それも一緒に倒れましたので、そのすき間から、外の明かりを指して這い出ました。そして立ち上がりますと、NHK長崎放送局の近くの木造家屋から火柱が上がり、火災が発生しました。

気がつくくと、首がヒリヒリし、左わき腹もやけどしておりました。そして鼻血が出ました。子どもの頃、母から聞いた話で、鼻血が出たときは首の後ろの髪の毛にちよつと刺激を与えると止まると聞いていたので、そのとおりに髪の毛を引っ張って刺激を与えましたところ、鼻血は止まりました。

線路とホームを越えて、駅の鉄道診療所に行きますと、死んだ赤ちゃんを背負ったお母さんが、顔にやけどを負って鉄道診療所に来て治療を受けておりました。私のやけどは軽傷だったので、看護婦さんからヒマシ油を塗ってもらっただけでした。被災者が次々と診療所の方に運ばれてきます。私は長崎の地理をよく知らないもので、夢遊病者のように町の方へ行ってみましたところ、そこが新興善小学校（現長崎市立図書館）だったので。道路から校舎内を見ましたところ、たくさんの被災者が来ておりました。被災

者の一人の背中が焼けただれているのを見まして、本当に何とも言えない思いがいたしました。

新興善小学校をあとにして、駅の貨物室に戻りますと、先輩が、「橋本君、僕の弁当を半分食べていいよ。」というのでいただきました。本当にありがたく、おいしかったことを今でも覚えております。食事が終わりますと、先輩に、「線路を走るモーターカーが、大橋町の鉄橋付近に来る予定になっており、長崎駅長も現地向かうので、橋本君も同行してくれないか」と言われましたので、「行きます」と答えました。

日が暮れてから、長崎駅長以下十八名が、長崎駅から線路を歩いていくことになりました。夕方になり、貨物室から届いた夜食用のおにぎりを食べ、浦上方面に向かって出発しました。途中、井樋ノ口電車停留所付近では、真っ赤に焼けた電車が鉄のかたまりになっていました。浦上駅の踏切付近は、現在、ブリックホールなどのりっぱな建物が建っておりますけれど、当時はすべて三菱の兵工廠であったわけです。その兵工廠も焼けて、曲がった鉄骨と化していました。道路には馬車馬も死んでいました。

踏切を越えて、浦上駅の方に行きましたが、すべて真っ暗でございます。すると、誰かが、「敵機来襲！伏せろ！」

というので、その場に伏せました。もしかしたら、死体の上に伏せているんじゃないだろうか、と思いました。それから、浜口町の方に歩いていきましたら、三菱球場の中の宿舎が火災で燃えていました。それを明かりに球場内に入りますと、そこは死体の山でした。山川駅長が、「まだ生きている人もいるようだ。」と言いましたが、皆どうすることもできませんでした。山川駅長が、「このあたりに青年寮があるはずだが」とおっしゃられるので、「はい、私の住んでおりました青年寮は、この球場のとなりでしたが、もう焼けてしまっておりません。」と答えました。そこは私のいた寮でした（現長崎西洋館付近）。「寮がすぐそこであれば、線路はこの近くだから線路上がろう」ということで、職員十八名が線路上がりました。下の川の鉄橋を渡って国道の入り口まで行きましたが、左右の建物が燃えていたので、それより先へ歩いていくことができず、長崎本線の線路へ戻って、大橋町の鉄橋付近まで歩いていきました。

大橋まで来ましたが、モーターカーは来ておりませんでした。すると、その近くにあった小さい防空壕から、「水を、水をください。」という女性の声がしました。もちろん真っ暗で顔もわからず、どうすることもできませんでした。それから、あの長い大橋の鉄橋を、四つんばいになって渡り

ました。

西町に着きますと、そこには線路脇に多くの被災者がおりました。救援列車が到着していましたが、山川駅長が、「我々がこの救援列車に乗れば、その分被災者の方が乗れないから、我々は道ノ尾駅まで歩いていこう」と言われたので、救援列車が出発した後に、道ノ尾駅まで歩いていきました。道ノ尾駅に着きますと、二度目の「敵機来襲」の声があったので、私は道ノ尾駅のトイレに隠れました。しかし何事もなく、最後の救援列車で諫早に向かいました。

途中、長与駅で臨時停車しました。長与駅には、戦前から大波止の税関の前にあった国鉄の長崎管理部が、火災で焼け出されて一時的に移設されていたので、その管理部に行きますと、この部屋の半分くらいの広さでしょうか、救援列車で運ばれてきた負傷者の方がたくさんいました。女性の方が髪を垂らし、シャツもボロボロで、「苦しい、苦しい・・・」と言っていました。それが一人や二人ではありません。多くの方がそういう呻き声を上げていました。しかし、しばらくすると、その声も聞こえなくなりました。皆、亡くなったのです。長与駅の職員さんが、「今から、救援列車が諫早へ出発するので来てください。」というので、列車に乗って諫早へ向かいました。

諫早駅から国鉄職員養成所に行きました。現在の運動公園の北側第二駐車場が、当時の国鉄職員養成所があった場所です。長崎の鉄道診療所から、看護婦さんも二名来ておられました。「橋本さん、やけどにはキュウリがよかとよ。」と言われ、いただいたキュウリを食べました。まもなくすると、東の空が白けてきました。一睡もできなかったと記憶しています。そのうち、諫早駅の職員の方から、「橋本さん、これから本河内町の地区公民館に来てください。」という連絡があったので、下りの列車に乗って、本川内駅下車しました。

地区公民館にいきますと、おにぎりの準備がしてありました。本河内には職場の同僚がおりましたので、公民館を使わせていただけなのです。その日は公民館に泊まりました。

翌十一日の夜、浦上―長崎間が復旧し、諫早―長崎間がすべて開通になったので、本川内駅から長崎駅へ戻りました。長崎駅はすでに焼失して、ありませんでした。長崎市役所近くの豊後町というところあった、国鉄が青年寮として借り受けた旅館に行きまして、三日ぶりに風呂に入ることができました。

翌八月十二日、五島出身の先輩が、「橋本君、私の兄の船

が今日の午後から福江に行くから、五島に帰って両親を安心させなさい」と言ってくださったので、五島の実家に帰りました。父によれば、八月九日、長崎の空が真っ赤になったので、「これでもう利一は生きてはおらんだろう」と母と話しあっていたところ、私が突然帰ってきましたので、両親は嬉し泣きして出迎えてくれました。故郷の黄島で毎日新鮮な魚と野菜を食べて、体力が回復しましたので、一カ月後に長崎に帰りました。

駅に行きますと、構内詰所も新しくできておりました。そして、八月十五日の終戦以後、進駐軍の輸送で、多忙な日々を送っていた仲間たちもいました。

ある日のこと、進駐軍の列車に病院車があり、軍医が乗っておられました。その軍医の方に四リットルほどの肉の缶詰と大きな角パンをいただいて、職場のみなさんと分けて食べました。食糧事情が悪かったにもかかわらず、栄養失調になることはありませんでした。後にわかったのですが、その方が進駐軍の有名な軍医さんであることを著書で読みました。

その後、「被爆された方々が結婚をして生まれた子どもは奇形児になる」という風評が出ました。しかし、先輩方が結婚されて生まれた子どもは、五体満足であったので、そ

れはあくまで風評であることが証明されたのです。また、「長崎市では、七十年間は草木も生えない」という風評もございました。しかし、翌年の春には、山々に草木が生え、緑がきれいでした。

私は、今でも心配になることが一つあります。それは、落下中心地の松山町から長崎駅まで二〜三キロメートルの距離で被爆し、さらに当日の夜、落下中心地を歩いていきましたので、私の体内に、もしかして放射能なるものが入っているのではなからうかということですが。

去る四月に、アメリカのオバマ大統領が、チェコの首都プラハで、核兵器を世界からなくそうと演説をおこないました。しかし、それはわれわれが生きているあいだには実現しないだろう、とのこと。長い、長い道のりになるうと思いますが、世界平和への第一歩となりうるのではないかと考えております。

話は前後しますが、ある日、私が県立図書館で、ある一冊の本を読んでいると、このような一説がございました。『この世の中で、何が一番こわいか。それはライオンでもなければトラでもない。それは人間である。』というものです。私はなるほどと思いました。人間が原爆をつくらなければ、あの日、長崎市で七万四千人の尊い命が失われるこ

とはなかったのです。

終わりにあたり、私は、今後とも核兵器廃絶運動に、ま
い進していく所存です。今の子どもたちが大人になったと
き、戦争のない日本を、いつまでも築いていってくれるよ
う願っています。

(平成二十一年八月講話)

『戦争を知らない君たちへ』

竹下 民輔(馬渡町)

私が持っている被爆者手帳、これには今の住所も書いて
ありますが、原爆を受けたときにどこにいたかということ
も書いてあります。私が原爆を受けたのは、長崎市新橋町、
爆弾が落ちた地点から三・二キロメートル離れたところで
す。手帳に書いてある「第一号」というのは、原子爆弾が
爆発したときに、その場で直接それを受けた人のことです。
原子爆弾が投下された土地は、十日間ぐらいは放射能が残
っているのです、その間に長崎へ入って、放射能に身体を汚
染された人もこの手帳を持っています。そのとき、私は九
歳でした。

日本は、私が生まれる五、六年前から戦争をしていま
した。中国に攻めていって、自分のものにしてしま
した。アメリカやイギリスに「やめなさい」といわれても
聞かなかったのです、アメリカはどうとう、石油もゴムも食
べ物も日本には売らないことを決めました。日本はそうい
うものが取れないので、とても困りました。そこで日本は
どうしたかというと、太平洋の南の方に攻めていって、ア
メリカと戦争を始めたのです。それが太平洋戦争です。最

初はアメリカやイギリスが十分な用意をしないうちに攻めこんだので、日本は勝っていました。しかし、アメリカの方がお金持ちだったので、すぐに軍隊を準備して、逆にじわじわと日本に攻めこんできたのです。太平洋戦争が始まったとき、私は幼稚園生でした。幼稚園で、戦況を伝えるラジオを聞かされたのを覚えています。そして小学校に入学した頃には、国中から物がなくなっていました。お菓子はもちろん、服も本もお店に売っていないのです。カメラやフィルムありませんでしたので、私には入学式の記念写真ありません。ラジオや電話がある家も、地区に一、二軒しかありませんでした。そのころ流行した言葉に『欲しがりません、勝つまでは』というのがありますが、欲しがるうにも、そのころの日本にはもう何も物がありませんでした。

一年生のときには、戦争に勝つようにお祈りするために、十二月八日の朝五時頃から長崎の神社にお参りにいきました。眠い目をこすりながら学校へ行って、諏訪神社や八坂神社などの長崎市内の神社にお参りをして回わるのです。その頃は子どもの数が多かったので、一クラス六十人ぐらいはいたでしょうか、それが四クラスあったので、一学年二百四十人ぐらいで、しもやけやあかぎれをつくって、ブ

ルブル震えながら、お参りに行きました。食べ物不足してお腹が減っているので、よけいに寒く感じました。何人かの子どもは、自分のお兄さんやお父さんが兵隊さんになっているので、特別にストーブが焚いてある神社の社務所に入れてもらって、お参りしていました。そうではない子どもたちは寒い境内で、じっとだまって待ってなければいけませんでした。

小学校二年生までは、男の子も女の子も同じクラスでしたが、三年生から男女が別のクラスになりました。そして、男の子は戦争に勝つためにと言われ、毎日木剣を振らされました。今考えてみると、男女別のクラスに分けられたのは、男の子は将来強い兵隊になるために、とにかく鍛えるためだったのでしょう。少し難しい言葉になりますが、当時の学校では、教育勅語にしたがって修身という科目がありました。その教科書には、天皇陛下が子どもたちにこうしなさいと教えた言葉が書かれていました。「朕ちんおも惟ちんおもうに我が皇祖皇宗国を肇はじむること」という文句からはじまる勅語を覚えさせられ、きちんと覚えられないとたたかれることもありました。昔は、言うことをきかないと、容赦なくたたかれるような時代でした。

四年生になると、日本はだんだん戦争に負けてきていた

のですが、学校や大人たちはそれを教えてくれません。家にラジオのある子に聞くと、大本営発表といって、「日本が敵の戦艦を沈めました」とか「敵の飛行機を何機落としました」というふうに放送されていたのですが、後で知ったことですが、それもウソばかりでした。ですから、日本国民は「天皇陛下のいる国が負けるわけがない」とその放送を信じきっていました。原爆が投下されるまで、それはずっと続きました。

今でも覚えているのは、当時は薪をかついで本を読んでいる二宮尊徳像がどの学校にもあって、その前を通るときは、必ずおじぎをさせられたことです。「二宮尊徳はまじしくても一生懸命勉強してえらくなったので、皆さんも物がなくてもしっかりと勉強して、天皇陛下のためにがんばりなさい。」と教えられたのです。もう一つは、ご真影といって天皇陛下と皇后陛下の写真が職員室に飾ってあるのですが、それに外からおじぎをしなければいけないのですが、あるとき、「どうしておじぎをしなければいけないのか」と先生にたずねると、「なんでそんなことを聞くんだ。」と怒ってたたかれました。天皇陛下がなぜえらいのか、不思議に思うことすら許されなかったのです。先生たちも天皇陛下の話をするときは、直立不動で「おそれ多くも天皇陛下

は……」という調子で話しだすのです。だから子どもたちは「天皇陛下は神様だからえらい。天皇陛下の言うことは間違いのあるはずがない。だから、天皇陛下のために死ななければいけない。」と頭から信じさせられて、戦争で死ぬことは当たり前だと思いうようにならされていきました。

ところが、戦争に負けはじめると、町にもアメリカの飛行機が飛んできて爆弾を落としていくようになりました。爆弾が炸裂すると、家一軒ぐらいは簡単に吹き飛んで、地面に大穴が開きました。それだけでなく、爆弾の外側は鉄板なので、爆発すると鉄の破片が飛んできて、けがをすることもあります。ですから、敵の飛行機が飛んでくると、警戒警報というサイレンが鳴って、子どもたちは学校にいても家に走って帰りました。敵機がさらに近づくと、警戒警報は空襲警報に切り替わります。空襲警報になると、道路のわきに掘ってある溝に避難して爆弾をさけるのです。夜寝ていても、警戒警報が鳴ると起こされました。家の近くの坂をのぼって、お寺の防空壕に逃げこみました。そうしないと、いつ爆弾が落ちてくるかわからなかったからです。もつとこわいのは、焼夷弾を落とされることです。そのときの日本の家は障子やふすま、板壁でできた木造の家ばかりだったので、一度火がつくとすぐに燃え広がって

しまうのです。だから、敵の飛行機は空の上から油をまい
て、火を付けました。東京大空襲などでは、それで焼け死
んだ人がたくさんいました。しかし、長崎にはあまり爆弾
は落とされませんでした。私が覚えているのは、五、六回
ぐらいです。いちばん大きかったのは、長崎駅に爆弾が落
とされたときです。警戒警報も空襲警報も鳴らないのに、
突然「ババババツ」と音がして、土煙があがったのが学校
からでも見えました。急いで教室に避難したので、低学年
の子が転んでけがをしたりもしたようでした。ですが、長
崎で大きな爆撃といえばそれぐらいでした。「長崎は昔から
キリスト教とかかわりがあるし、京都も日本の昔からの都
なので、この二つの都市は爆弾が落ちないのだろう。しか
し、長崎には三菱造船所がありますので、そこは狙われる
かもしれない」と言われていました。

そうこうしている間に、八月六日、広島に爆弾が落とさ
れたのですが、さつき言ったようにラジオもテレビも電話
もないので、何もわからないのです。ただ「広島に新しい
爆弾が落ちたそうだ」と大人たちが話していましたが、多
くの人が詳しいことはわからないままでした。

八月九日はとても天気の良い日でした。私はたまたま家
にいて、机の下に寝ころんで本を読んでいた。そして

十一時二分、「ピカーツ」と光りました。気がついたときに
は、私は吹き飛ばされてしまいました。たまたま私のいたこ
ろが、爆風の通り道にあたったのでしょう。「何だろう、何
だろう」と言いあっていたのですが、とにかく家の外に出
ました。

外に出て裸でセミ取りをしていた子たちが、泣きながら
帰ってきていました。原爆の光でやけどをしてしまってい
たのです。これも後で知ったことですが、そのときの温度
が三千度といわれています。人間が今まで経験したことが
ないようなものすごい熱さです。原爆は上空で爆発したの
で、地面近くに届いたとき温度は下がっていましたが、そ
れでも真下にいた人は影も形もなくなってしまいました。

爆風といって、爆弾が爆発したときに起こる風の速さは、
毎秒六百三十メートルくらいでした。神社の鳥居が吹き飛
んでしまうくらいのもものすごい速さです。原爆が落ちたと
ころの近くにいた人は、その熱風で吹き飛ばされたり、や
けどしたりしたのです。私がいたのは三千二百メートルも
離れたところでしたが、それでも外で遊んでいた子はやけ
どして、「ぎゃあっ」と泣きながら帰ってきました。「子ど
もは危ないから防空壕に行きなさい」と言われ、防空壕に
逃げこみました。屋根がわらなどがバラバラに粉々になっ

て落ちてきて、地面は足の踏み場もなくなっていました。大人たちはそれを片付けていたようです。

それから二時間ぐらいたったところでようやく、「バリバリバリ」と音がしたので外に出てみると、県庁が燃えていて、煙が上がっているのが見えました。いつもなら私の家から県庁なんて見えるはずなのですが、とにかく真黒い煙が上がって、バリバリバリと音が聞こえるのです。太陽が煙でかくれて、あたりは真っ暗になりました。そうすると、急にこわくなって、どうしようかと思いました。

ちょうど、うちの近くに日赤病院という大きな病院があって、そこにけがした人を運んでいました。私は初めて大人の男の人が「痛い、痛い」と泣いている姿を見ました。手がちぎれたり、目玉が飛び出したり、腕が焼けてただれて皮がむけて、たれ下がったりした人もいました。担架がないので、けが人はみんな戸板に乗せられて運ばれてきました。けがをした人たちは、みんな「水がほしい、水がほしい。」というのですが、「水はやっちゃいかん」と誰かが言っていました。たくさんけが人が運びこまれたので、病院に入りきれなくなりました。そこで病院の近くの芝生に、夏の暑い日が照りつける中、そのまま寝せられました。すると、腕がなくなったり人だとか、脚がもげた人だとか、

ひどいけがをした人が見えるわけです。血が出ていても止血ぐらいいはできて、薬がないものだから、そのまま寝かされて「痛い、痛い」と泣いているのです。たぶんその人たちは死んでしまったと思います。

夜になり、坂の上の延命寺から長崎市内を見てみると、長崎中が火事になって、火が近づいてくるのが見えました。「うちが燃えてしまうんじゃないか」と思って心配で心配でたまらず、防空壕に逃げてきた近所の人たちといっしょに、一晩中眠らずに見ていました。腕章をつけた憲兵が来て「防空壕に入れ！」と銃剣で突き刺すようにして怒られました。しかしその憲兵が行ってしまうと、みんな防空壕から出てきました。「日本が負けるはずがない。天皇陛下が負けるはずがない。」と憲兵に怒られながら、それを何度も繰り返しました。

三、四日が過ぎたころ、私の家に下宿していた長崎医科大学の学生さんたちが戻ってきました。話を聞くと、その人たちは学校に行かずさぼっていたので、命拾いをしたということでした。しかし、まじめに学校に行っていた一人の学生さんが帰ってこないということで、探しに行くことにしたのです。被爆から何日後か覚えていませんが、私も母について一升瓶を二つ肩にかついで、爆心地近くに探し

にいきました。そのころは放射能なんて知りませんでした。長崎駅から先はずっと燃えていて、道ばたには何人か死んでいる人もいました。顔を確かめようとして横向けると、桃の皮がむけるように、ずるりと顔の皮がむけてしまうのです。馬なんかはお腹がパンパンになって、お尻からはらわたが出ていました。さすがに人間はあまり死んでいませんでしたが、十人くらいは見かけました。みんな死体の片付けにまで手が回らないようでした。火葬場がやられていたので、死体を焼けないのです。放っておくと腐ってしまいうのですが、誰か探しに来るかもしれないので、そこに置いておくしかありませんでした。

穴弘法にその学生さんがいるという話を聞いたので探していくと、ぜんぜん意識がないような状態で見つかりました。戸板に乗せてみんなで抱えて、連れて帰りました。学生さんは和歌山の出身でした。電話が通じないので、和歌山のご家族には手紙を書いて知らせました。四日ほどしてお母さんが長崎に来られましたが、そのころには学生さんは口の中がたいそう腫れて、ご飯が食べられない状態でした。意識はあつたので、「苦しい、苦しい。」といいながら、ちようどお母さんが来たその日に亡くなってしまい、とてもかわいそうでした。

私の家の前は建物疎開地といって、焼夷弾が落ちてきたときに火が燃え広がらないように、ところどころの家をこわして、空き地にしてありました。古い材木を組んで、そこに死体を大八車に乗せて運んできて、焼いていました。人間の焼ける匂いというのは、すごいにおいがします。そのにおいが鼻について、ご飯が食べられませんでした。灯油もなにもないので、死体はなかなか焼けませんでした。結局生焼けのまま、どこかに運ばれていった死体がたくさんありました。

現在の原子爆弾の威力は、当時の原爆と比べて五百倍ぐらいだと言われています。原爆一発で長崎市が全滅してしまつたのに、その五百倍の威力ですから、日本全土が全滅してしまうでしょう。そんなこわい爆弾が、今、世界中の国にあると言われています。地球上の人間を五回全滅させるほどの爆弾が、存在しているということです。しかも、そのころは飛行機で運んできて落とさなければいけませんでしたが、今はミサイルで遠くまで飛ばすことができます。あのころの原爆はとても大きかったのですが、技術が進んで小型化されているので、それができるようになったのです。今、高校生平和大使の人たちが、核兵器をなくすためにがんばって活動しているのは、原爆がたった一発でも一

『私の被爆体験』

小林 壽美（高来町）

都市を全滅させるくらいの威力を持っているからです。ところが、長崎や広島の人はそのを知っているけれど、よその県の人はその知らないのです。だから、あなたたちが「長崎ではこういうことがあったんだ」ということを伝えていってください。

原爆を受けた体験を話すと、「そのとき生きていなくてよかったね。」と言ったり、「大きくなったら、アメリカに仕返ししよう」と言ったりする人も中にはいます。そうではなくて、お互いにケンカをせず、話せば分かるのだから、少しはがまんすることが大切です。少し難しいお話になりましたが、私はそういうことを伝えたいと考えています。

※ この体験談は、竹下さんがご家族に語られた映像をもとに編集したものです。

（平成二十二年八月編集）

私は長崎市竹ノ久保に生まれ育ち、被爆当時は十四歳でした。城山小学校を卒業して湊国民学校に進み、動員学徒として三菱兵器大橋工場に勤務していました。同じく三菱兵器大橋工場に勤める父、母と私の三人は長崎に残り、幼い妹と弟は深海の祖母の家に疎開していました。他の学徒は甲板工場と製造工場に行きましたが、私を含めた十人ほどは、県の機械製造補導所に回されて補導を受け、技術部設計課に配属されました。魚雷の設計図の図面を部品ごとに分けて、写し書きするのが私たちの仕事でした。

八月九日のお昼頃、大橋工場で勤務していると空襲警報が鳴りだし、みんなで避難しました。警報が解除されたので工場に戻ってきて上着を脱いだところで、ピカーツと激しい閃光がして、真っ暗で何も見えなくなりました。ただ大声で力いっぱい「助けて」と叫びました。同じように吹き飛ばされた友人の声が聞こえ、そばにかけ寄って抱き合ってみると、やけどした皮ふがべらりとはがれました。私はそこで力つきて、気を失い倒れてしまいました。どれくらいの時間がたったのか記憶が定かではありませんが、私

は目を覚ましました。周りには亡くなっている方も生き残った方もいらっしやいました。生き残った方に、「早く早く」と急かされて外に出てみると、工場も長崎市内も何もない焼け野が原になっていました。他の工場は屋根や壁が吹き飛び、鉄筋があめのようにねじ曲がっていました。設計課が入っていた建物はコンクリート造だったので、私たちも命だけは助かりましたが、顔と両手はやけどを負い、洋服は血だらけでぼろぼろの重傷でした。髪の毛は逆立ち、男女の区別さえ分からないありさまでした。

それでも意識はしっかりしていたので、西町の上の方に避難しようと、とぼとぼ歩きだしました。道のそばには「水、水」「助けて」とうなる人や、焼けただれて裸になった人が倒れていました。立ったまま真っ黒に焼けこげた馬も、ばたばたと倒れていきます。時々、道の脇に積み上がった燃え残りの灰がごそごそと盛りあがったかと思うと、黒こげになった人間が出てきて、そのまま地面に倒れこむこともありました。私は悲鳴をあげながら、同僚とともに必死で逃げました。浦上川に差しかかり、川の中を覗きこむと、そこは人間の頭首と胴体が浮かぶ人間の川になっていました。それをガボガボと踏みつけるようにして逃げました。人を助けるような余裕はありませんでした。ただ自分が生

き残ることしか考えることができませんでした。

逃げる途中、野口英世さんがやけどを負ったときに指同士が癒着しないように指のあいだに布をはさんだという話を学校で習ったことを思い出し、ぼろ布を拾って指の間に一本ずつはさみ、長めの布で首の傷を止血し、山を登っていききました。さつま芋畑に横たわって気を失っていると、だれかが一升瓶に水を持ってきて、「飲みなさい。でも寝たら死ぬから目は開けておきなさい」と言ってくれましたが、その方にお礼を言うこともできず、眠ってしまいました。

目が覚めて左右を見ると、もう夕暮れどきのようでした。下に救援列車が来ていたので「あれに乗れば、諫早にいるおばあちゃんや妹弟のところに行ける」と思ったのですが、何度立ちあがっても転んでしまうので、芋虫のように這って山を下りました。その途中、男の人が一人ぼつんと立っていました。「俺は造船所から来て親せきを探しよるとぼつてん、あんた違うね。」と聞かれたので違うと答えると、パンを一個くれました。「水をください」と言うと、「近くに井戸があつたようだ」と言つて水をくんできてくれました。その人に停車場まで連れて行ってもらい、列車に乗せてもらいました。列車に乗るやいなや、血をたくさん吐きました。この子はもう死んでしまうから列車からおろせ、と引

きずりおろされそうになりましたが、「いいや、私は深海のばあちゃんの家に行く」とソファの下にもぐりこみました。負傷者はあとからあとからどんどん乗ってきて、列車は少し詰め状態になりました。本当にこの世の地獄のようでした。

列車は諫早駅に着きましたが、病院はいっぱいでした。無我夢中でまた列車に乗り、大村まで来ました。その頃にはもう力つきて、列車からおりる元気もなく、そのまま川棚まで運ばれました。救援隊の方がトラックで学校のようなところに連れて行ってくれて、そこではじめて治療を受けました。血で真赤に染まった下着一枚で寝かされ、やけどに油を塗ってガーゼを当てるだけの簡単な治療を受け、板の間に寝かされました。名前を聞かれるとき、はっきりと「西山壽美です。大橋兵器工場技術部設計課で働いていました。」と言ったら、「銀の三菱の徽章を付けていましたね」と言われ、よくお世話してくださいました。横に寝ていた人がわめき泣きさけぶので、よく見たら同じ設計課の方のようでした。「あら、徳山さんでしょう。私、西山です。」と言うと、やはりその人でした。あんたはやけどにうじがわいているかと聞かれ、「いる」と答えると、「うじは肉と一緒にばい菌を食べてくれるからうじがいるとよかとよ」、

と言いながら、翌日には亡くなられてしまいました。

負傷者はみんな髪の毛はちりちりになり、真っ黒に焼けて、板の間に三列に並べて寝かされていましたが、一人二人と死んで戸板に乗せて運ばれていきました。私も運ばれそうになりましたが「いいや、私は死なない」と言って頑張りました。しかし「今度は自分の番ではないか」と、神に祈るばかりでした。山里町の家も父母も焼け死んでいるのに、どうしたらよいのかわからないのも、また不安でした。

その頃から少しずつ気分がよくなり、川棚の婦人会の方やお医者さんにお世話になったことを感謝しました。やけどで両手が動かないので、お腹がすくと口を大きく開けて「何か食べさせてください」と叫んだら、婦人会の方がおにぎりを少しずつちぎって、梅干しと漬物と口の中に入れて食べさせてくださいました。あのおいしさは一生忘れることはできません。また、血だらけで男か女か分からないような有様だった顔を濡れタオルで拭いて、「あら、あなたは女の人だったのね」といって綺麗に拭いてくれたことも嬉しかったです。

その頃、深海大戸の叔父と叔母たちが川棚の収容所に来てくれました。長崎まで私たちを探しに行って、警察で西

山壽美が生きていることを聞き、引き取りにきてくれたのでした。「おばあちゃんの家疎開している妹弟に会いたい。帰りたい。」と頼むと、帰ると死んでしまうから連れて帰れないと言われました。「死んでもいい」と言って無理に頼んだら、川棚の消防団の方が担架の代わりに戸板を持って来て、四人で私を寝かせて駅まで送ってくれました。親戚がリヤカーを引いて小江駅に迎えに来てくれましたが、「臭い臭い」と言って鼻をつまみ、「毒を持っている」と言っ、私に近寄りませんでした。

病院はないので、毎日叔母がリヤカーを引いて診療所に連れていってくれました。火傷の葉はないので手のつけようもなく、治療といっても油を塗りガーゼを貼るだけでした。ガーゼを取る時は「痛い、痛い」と泣き叫びました。やけどした手からは大きなうじ虫が出ました。何日か経ち、少しずつ治りかけてきたかと思いましたが、やけどを負った皮ふがケロイドになり、ひじが曲がったまま固まってしまいました。それを「ガネ（蟹）の横ばい」とからかわれたことが、本当にくやしく悲しかったです。

母は山里町の自宅で亡くなったらしいのですが、遺骨も残りませんでした。家の焼け跡に落ちていた、びん留めと財布の口金を遺品に持ち帰りました。父も死亡届が出され

ていましたが、嬉野の病院まで運ばれて助かっていたことが分かり、私たちがお世話になっている母の実家に帰ってきました。父は福岡の大牟田の生まれで、私と同じ三菱兵器大橋工場で電気の工場長をしていて被爆したのです。

母の実家にいつまでもお世話になるわけにもいかず、大牟田の父の実家に移り住みました。終戦から一年が経った頃、父が長崎の矢の平に焼け残った家を見つけて、そこに移り住みました。

働かなければ食べていくことはできないので、私も「何とかして働かなければ」と毎日水の入ったバケツを両手にさげ、曲がった腕を伸ばす練習をしました。手術をするお金がないので、毎日毎日痛みをこらえてがんばり、くの字ぐらいまで肘が伸びるようになりました。もともと洋裁が得意だったので、洋裁の仕事に就きました。

当時はやけどを隠すために、夏でも長袖の洋服を着ていました。長い年月が経ち、やけどのあとはほとんどわからなくなりました。しかし原爆の後遺症はいまでも残っています。私自身だけでなく、私の子どもも病気を患っています。しかし、子どもの病の原因が原爆にあることを疑いながらも、それを口にすることはできませんでした。今でこそ話せますが、昔は自分の子どもにすら被爆体験について、

話したくない、知られたくない、という思いがあったので
す。

原爆の生き証人として、お話いたします。

(平成二十二年七月聞き取り)

『私の被爆体験』

吉野 ツギノ (高来町)

私は、湊中学校を卒業してすぐ三菱幸町工場に就職し、被爆当時は十六歳でした。妹たちはまだ学校に通っており、学校から田舎に親戚があればそちらに疎開するように言われていたので、家族全員で長田に疎開していました。大波止の水産場で働く父、トンネル工場で働く兄と一緒に、長田から汽車で仕事に通っていました。

当時、私の働いていた幸町工場には防空壕がなかったの
で、交代で坂本町の山に防空壕を掘りに行っていました。
私は、前日の八日が防空壕掘りの当番で、九日は工場勤務
の予定でしたが、友達が「長浜さんも今日防空壕掘りに行
こう。私が班長さんに頼んでくるけん。」と言って、班長に
かけ合ってくれたので、私は九日も坂本町の山まで行くこ
とになりました。

九日の十一時ごろ、防空壕の入口で休憩していると、「爆
音がしたぞ」という声が聞こえて、立ち上がった瞬間、物
凄い爆風で防空壕のなかに吹き飛ばされました。何が起こ
ったのか、ぜんぜん分かりませんでした。そのうち「大丈夫
か。けがはないか?」「長崎は全滅だ」という声がして、

防空壕の外に出てみると、私は驚きのあまり座り込んでしまいました。長崎の町は火の海で、真っ黒な煙が上がり、足元はけがを負った人と亡くなった人と黒焦げになった人だらけでした。私も目のところとひざをけがしていました。が、それすら気づきませんでした。畑に倒れたけが人が、目を真っ赤にして「助けて」とうめきながら、私の足首をつかんできます。その拍子に芋づるに足を取られて倒れこみました。ちょうどそのとき目の前の地面にキュウリが転がっていたので、水ほしさに必死にそれを食べました。

丸二日、けが人と死人の間に折り重なるようにして眠りました。もしかして、父がこちらの方に逃げてきてはいないか「父ちゃん、父ちゃん」と父親を呼んで探して回りまわりましたが、見つかりませんでした。ふと「こんなふう倒れとって死んではだめだ。長田に帰れば父と母がいる。家に帰ろう。」と思い立ち、そう思うと元気が出てきて、三日目の朝に大橋のほうに歩きだしました。途中、赤十字の帽子を被った人に「あなたは全身をけがしているから、山のずつと上のほうに赤十字の治療所があるから、そこで治療を受けなさい」と教えられました。あたりは煙でいっぱいだったので、どこにあるのかも分からないうえ足も思うように動かないので、とうとう行けませんでした。

大橋まで来たとき、歩いていると軍服を着た兵隊さんと会いました。「あんたはどこに行くかね」と聞かれたので、肥前長田までだと答えると、「自分は鳥栖まで行くから、私の背中に乗りなさい。」と私を背負ってくれようと思いました。その兵隊さんは、休暇で帰ってきていらつしやって、妹さんと浜の町で買い物をしているときに爆弾にやられたということでした。妹さんは親せきの家にあずけて、鳥栖へ戻ろうと駅へ向かっているときに、私に会ったのでした。兵隊さんは、自分たちの起こした戦争のせいで長崎に爆弾が落ちたことに責任を感じてか、「すまんなあ、すまんなあ。」としきりに謝って、私を抱きかかえるように支えながら、道ノ尾駅まで連れて行って汽車に乗せてくれました。原爆投下から三日経っていたので、そのころにはあまり負傷者はいなかったようでした。汽車に乗るときにデッキの窓ガラスで、原爆にあつてからはじめて自分の顔を見ました。真っ黒に焼けた自分の顔がおそろしくなり、思わず手でおおってしまいました。服がぼろぼろになっているのは自分で分かっていたいましたが、自分の顔を見るのははじめてだったので。

突然、長与駅付近で汽車が止まって、空襲警報が鳴り出しました。「汽車の外に避難しろ」と言われ、乗客は皆デッ

キから飛び降りるように避難しました。兵隊さんに「逃げましょうか。」と聞かれましたが「いいえ。私はもう逃げられません。そちらだけ先に逃げてください。」と言って、汽車の座席の下にかくれました。「もうここで死んでもかまわない」とも思っていました。兵隊さんは「あなたが死ぬときはぼくも一緒です。」と、私の体におおい被さるようにしてかばってくれました。「あなたは若かけん、まだ生きてがんばらんばよ。死ぬのなんのと言わずにがんばりなさい。今まで生き残ったのだから、今から元氣にならなくては。」と私をはげましてくださいました。そのとき兵隊さんの戦闘帽に、糸で”ヤナギサワ”と縫い取りがしてあるのを見て、「ああ、この人はヤナギサワという人なんだ。ヤナギサワさんにこんな親切にしてもらったのに、死んでもいいと思っではだめだ。」と思いました。長田駅に着くと、兵隊さんは私をホームに抱え下ろしてくれました。列車の窓から身を乗り出して、帽子を振りながら「元氣でがんばりなさいね。さようなら、さようなら。」と見送ってくれました。今でも、そのヤナギサワという名前を忘れることはできません。

駅には父母や兄弟、親せきが待っていてくれて、「あら、今けが人がおりてきたとは、あれは誰やろか。男やろか女

やろか。」と言っていました。

「母ちゃん、母ちゃん」と大声で呼びながらかけ寄りましたが、最初はみな私とは気付かず逃げていくのです。けが人が私だとわかると「生きとったとな」と私を抱きしめてくれました。父も兄も、九日の夜に長田へ帰ってきていたのですが、私だけがもう三日も帰ってこないの、遺骨を探しに行かなければならない、と思っていた矢先のことでしたので、家族はとても喜んでくれました。裸足だったので叔母がわらぞうりをはかせてくれ、リヤカーに乗せて長田小学校まで連れて行ってくれました。小学校もけが人と死人でゴった返していました。

私が働いていた幸町工場で働いていた人は、みんな亡くなってしまったそうです。私は、防空壕掘りに誘ってくれた友達とそれを許してくれた班長さんのおかげで、助かったのです。

原爆のおそろしさは、実際にあってみなければ分かりません。「あなたは原爆手帳を持つけん、病院代がタダになるもんね。いつでも好きなときに病院に行つてよかたい。」と心ないことを言われるのがいちばん辛く感じます。

(平成二十二年七月聞き取り)

『十五の夏』

中道 義若（本明町）

あの日、私は母と一緒に田んぼで草取りをしていました。途中で腰が痛くなつたので立ち上がって伸ばしていた時に、突然、長崎の方角の空が、「ばあっ」と一面、オレンジの夕焼け色に光りました。その後数秒して、今度は、「ドーン」という音と共に地響きが伝わってきました。そしてさらに数秒後、稲の葉っぱが向こうから順に風になびくのが見えました。しばらくすると、空がまるで墨をこぼしたように、黒雲で真っ黒になっていきました。

次から次に起こる、今までにない体験に「これは大変なことが起きた」と直感しましたが、当時は広島に新型爆弾が落ちたという程度の情報しかなく、詳しい被害などは知らされていませんでしたので、それから後の様子など予想だにできませんでした。

当時、私は高等科（今の中学校）を卒業したばかりの十五歳でしたが、警防団に入っていたため、午後四時頃呼び出しを受けました。諫早駅に救援列車が来るというのです。私達が駅に着いた時にはもう、列車は到着していました。そこで目に入った光景は、まるで地獄絵図のようでした。

ホームから待合室、広場まで、体中が焼けただれた人々であふれていました。重傷の人は海軍病院（現諫早総合病院）へ運ばれ、私達は、歩ける人を何十人かまとまった形で教員養成所（現北諫早中学校）まで連れていくことになりました。肩を支えたりしながら、共に歩いていきました。辺りの学校は全て、そういった收容所になっていたと思います。

次の日は、朝から呼び出しを受け、また諫早駅前に集合後、指示に従ってあちこちに分散しました。私達は、海軍病院へ行くようにと言われ、「何だろう」と思っていたところ、死体安置所へと連れていかれました。むしろの上に寝かされ、さらに上からむしろをかけられた遺体が四体ありました。正応寺（天満町）へと運びましたが、すでに遺体でいっぱいだったために受けつけてもらえず、遠い火葬場まで運びました。帰るとまた遺体があり、三、四回往復したように記憶しています。

あくる日は、火葬場での遺体処理でした。幅三メートル長さ二メートル、深さ一メートルぐらいに穴を掘り、廃屋を壊して運んで来た木材を切り穴にしきつめてから遺体を十体ほど並べ、その上にまた木を並べて、ガソリンをかけて焼きました。空襲があるので、昼間しか焼けません。朝、

火を点け、四時頃まで焼くのですが、焼け残るので棒でつついたりもしました。むごいことをしたと思いますが、当時はかわいそうだという風に考えていると精神的にとても耐えられない状況だったのです。何も考えずにいる事しかできなかったのです。

次の日、火葬場へ行くと、また遺体がたくさん運ばれているので、さらに二日間ぐらい行って焼きました。火を点けると、その後は焼けてしまうまでの時間、木材を切り、焚き物を作りました。運ばれてくる遺体は、皮がはげたり、うじがわいたりしていて、その死臭は何年たっても忘れることができませんでした。

戦争が終わり、十年後の昭和三十年くらいからは体調が悪くなり、夏の暑い時期は全く仕事ができなくなりました。日中、暑くなると吐き気がして、だるくて体が動かないので朝五時頃、まだ暗いうちからの涼しい時間帯に畑仕事をし、昼間は横になっています。若い時には運送の仕事をしていたのですが、夏は一カ月くらい休みをもらっていました。他の時期に一生懸命仕事をしたので、会社も大目に見てくれたのです。今でも、夏は地獄です。三十年前には、大腸がんの手術もしました。

今回、初めてあの夏の体験を話しました。経験した者が、

もうほとんどいなくなったと言われたからです。三十人余りいた当時の警防団の仲間も、今では五人になってしまいました。これまで家族にすら話したことがなかったのは、やはり思い出したくない、辛い体験だったからに他なりません。

もう、二度と戦争だけは起こしてほしくない、そう強く願っています。

(平成十九年七月寄稿)

『私の被爆体験』

山口 正則（川床町）

昭和二十年、私は県立諫早農業高校の前身、県立農学校の三年生（十六歳）で、八月九日は、学校の農場で農作業をしていました。翌日からは諫早に運ばれてきた負傷者の救護活動に携わりました。その後は長崎に入り、数日間長崎医科大学付近などで、被災地の後片付け作業に携わりました。そのとき諫早駅や諫早市内の学校に運ばれてきた被爆者の悲惨な姿は、今も脳裏に焼きついています。当時のことを詳しくお話しします。

当時の農学校は、授業はありはしましたが、ほとんど農作業でした。二年生になると、授業はほとんどありませんでした。一年生の終わりがごろから、食糧増産や軍事教練ばかりで、勉強という勉強はありませんでした。その前の年の三年生が、食糧増産のために北海道や満洲に行っていました。私たちは「やっぱり危ないだろう」ということで、どこにも行きませんでした。終戦になるまでほとんど勉強することはありませんでした。その間は、三八銃が四十五丁ぐらいあったと思いますけど、それを持って銃剣術の訓練や剣道、槍やりを作って、敵に見立てたわら人形に

刺す訓練をしていました。その頃から空襲が始まったので、警報がなったらすぐに学校の中にある防空壕に逃げていました。

農場ではお茶やイモ、カボチャ、稲などを作っていました。それと小野の航空隊の近くに赤とんぼの飛行場があった。その近くの吉永農場というところで水田を開墾して、米を作っていました。寺峰農場というところでは、牛や豚を飼っていました。あそこは個人の土地を買収したもので、まだ何かを育てるということではできませんでした。食糧増産が主な目的でしたから、ほとんどイモやカボチャなどの野菜でした。他の学校の学生は軍需工場やなんかに行っていましたが、私たち農業学校は、食糧増産のために野菜ばかりを作っていました。

八月九日当日は、小野の農場で、イモ畑の草取りやお茶の手入れをしていたんです。それで、空襲警報が鳴ったので、防空壕に隠れていました。「コの字型」に掘られた防空壕の一番奥に隠れていました。「ピカッ」という光を見た覚えはありません。「ドーン」という音は聞いたと思います。二時間くらいして防空壕から出たら、空が真っ暗になっていました。長崎の方からこちらに、黒い紙切れやなにかの灰がビラビラと飛んでくるんですよ。「ああ、これは大事だ」

と感じました。字は読めませんでした。書類に使う和紙が飛んできていたので、大きな官庁か何か焼けたのだと思っていました。

農場から帰ってきたら、「長崎に大きな爆弾が落ちたらしい」という話が飛び交っていました。その頃から「日本はどうなるのかな」という噂はしていました。南洋へ行っても玉砕だし、その少し前には沖縄も占領されましたし、空襲もほとんど毎日のようになっていました。以前はB29が高い高度を飛んできていたのに、その頃は艦載機とかが運動場に機銃掃射をかけていくのです。そういうことがあって、「どうも日本はだめじゃないか」と感じていました。

その翌日ごろだと思うのですが、私達も学校の命令に従って、今の市役所があるところに、諫早商業学校というのがある、そこと諫早駅のホームを往復して負傷者を運んだのです。負傷者は長崎から貨物列車で運ばれてきて、諫早駅のホームにごろごろと降ろされていました。トラックで来た人は、商業学校に集めて部屋の中に収容したわけです。その様子を見ながら、当時は原子爆弾という言葉を知らないものだから、えらいことだと思いました。負傷者は、もう人の形をしていないんです。顔は真っ黒で、シャツはぼろぼろの有様でした。私たちの組は、四十五人くらい

たと思いますが、組ごとに指揮者が違いますから、色々なところに行つたと思いますが、ほとんどが商業学校から海軍病院（現諫早総合病院）まで、ずうっと担架で運んだんです。それを一日に三、四回は繰り返したと思います。負傷者の苦しみようは大変で、軍人さんもおられたと思いますが、「水をくれー」とか叫ぶんですけれど、「水をやったらいけない」と最初に注意されているものですから、あげることはできませんでした。薬を塗るといっても、何か黒い薬を軍医さんらしき人が、火傷したところに塗っていくんですけれど、もうそれが、言葉には出せないような苦しみだったんでしょう。とにかく「水をくれ、水をくれ」と苦しんでおられました。

原爆投下から数日後、道ノ尾駅まで貨物列車で行きました。長崎医科大学の近くに鳥居がありまして、それが一本足になって残っていました。あそこに行くときはものすごい異臭がしましたね。大学の付近は一面なにもないんです。原爆が投下された後は（原爆だと分かったのはもつと後だったんですが）「草木が一本もはえない」と聞いていました。学校としても、多分ジャガイモだったと思いますが、生えるかどうかを調べる目的で長崎に入り、また被災地の片付けのために三日から一週間ぐらひは長崎に行つたと思いま

す。

今は被爆者団体の地区の代表をしていますが、今後の課題は被爆二世対策です。被爆二世への恩典は、ほとんど何もないので、今後の活動を引継いでいくためにも、被爆二世の問題を中心に活動していこうと思っています。

(平成十六年にビデオ収録した内容を、平成二十二年に編集)

『戦争と原爆についての体験』

馬場 守久(森山町)

私は、大正十四年二月四日に生まれ、昭和六年に小学校に入りました。当時、森山西小学校は鳥島小学校といっていました。尋常科と高等科があつて、尋常科は六年、高等科は二年でした。

私が小学校に入学した年に満洲事変が起こりました。それからだんだん戦時色が濃くなっていきました。

当時、水も水道ではなく、燃料もガスなどはない時代でした。水も井戸のある家はよい方で、井戸からツルベで水をくみ、水瓶に水をため、井戸のない家は、「飲み川」という出水の水溜りから、水を運んで使っていました。風呂に水を運んで入れるのも、風呂を沸かすのも子どもの仕事でした。森山に水道ができたのも、道路の舗装がはじまったのも昭和四十四年ごろからです。

農作業も人力が主体でしたので、田植えのときや稲刈りのときは、「農繁休暇」といって、何日も学校は休みで、農作業の手伝いをしていました。電灯のない家はランプでしたから、ランプのホヤ磨きも子どもの仕事でした。

昭和十二年に長崎県立諫早中学校に入学しました。この

年に日中戦争が始まりました。戦争が始まりますと、元氣な若者は軍隊に召集され、戦地に行くわけですから働き手はなくなり、それをカバーするために、生徒たちは、「勤労奉仕」といって、戦争に行った兵隊さんの家の稲刈りや、麦刈りの手伝いに、勉強は休んで学校から行きました。自動車がない頃でしたので、行きも帰りもひたすら歩きました。

また、戦争をするためにはたくさんのお金や物資が必要です。お寺の梵鐘ぼんしやうや橋の欄干まで供出させられました。その影響で国民生活は不自由になり、ついに生活物資は統制され、配給ということになりました。

中学生になると教練という学科があり、陸軍の将校が配属になり、軍隊教育を週二時間くらいしておりました。また、武道があり、柔道か剣道どちらかを選択しなければなりませんでした。

中学校五年のうち、三年半を自転車で通いました。中学五年のとき、太平洋戦争が始まりました。さらにたくさんの人手と物資が必要になりました。私たち五年生は、大学進学組を残して卒業見込ということで、戦争関連の職場に散っていきました。同級生の中には、海軍軍属で南方に行った人もおりました。

私は、華北交通という会社に就職することになり、中国に行きました。門司から黒龍丸という貨客船（六千トンくらい）に乗り、中等学校卒業見込の、内地採用者の集団赴任となったわけです。大連上陸と同時に任地が発表されました。太原鐵路局行きが決まりました。

太原鐵路局に行きますと、太原機務段配属が決まりました。機務段というところは、蒸気機関車の仕事をするところ、職種は乗務関係であっても、いきなり機関車に乗れるわけではありません。半日は運転規定や機関車の構造についての教育、半日は機関車掃除という生活が三カ月続き、司炉試験に合格、学習司炉になり、いわゆる釜焚きの見習として乗務することになりました。

蒸気機関車の燃料は石炭ですが、学校で教わった「燃焼とは熱と光を出して酸化する現象をいう」という言葉を思い出しました。物を燃やすときには空気（酸素）を十分供給しないとよく燃えないということですね。

ここで線路の中のことを少し考えてみましょう。JRの在来線の線路の中は、千六十七ミリメートルです。新幹線の線路の中は、千四百三十五ミリメートルで、これを「準軌」といって世界の標準軌条にしております。鮮鉄、満鉄、華北、華中（※それぞれ、朝鮮総督府鉄道局、南満洲鉄道、

華北交通、華中鉄道の略称。いずれも日本が設立した鉄道会社。)のほとんどの線路はこの準軌でした。

ただ、私たちの受け持ちの区間を含めて四百キロメートルぐらい、千ミリメートルというところがありました。ロシアの線路の中は、千五百二十ミリメートルあるそうです。そうになると「広軌」になるわけですね。

また、レールの規格は、一ミリメートルの重さで呼びます。「六十キログラム軌条」とか「四十五キログラム軌条」となるわけです。

昭和十九年の夏、機関士の試験を受け、九月十六日付で学習司機員の辞令が出ました。機関士の見習になったわけです。そのころ内地では学童疎開が始まっていたのです。疎開とは、アメリカ軍の飛行機の爆撃の心配のある都会の小学校の児童を、爆撃の心配のない田舎に避難させることです。子どもたちは親元を離れて、旅館や集会所、お寺などで不自由な生活を強いられました。

また、中学校、高等女学校などの生徒たちは、勉強をやめて軍需工場に動員され、軍艦や飛行機や鉄砲などの部品作りをやらされました。

昭和十九年の暮れ、現役入営の電報を受取り、翌二十年一月四日に太原を出発し、一月十日の朝、諫早駅に着きま

した。

それから家の農業を手伝いながら入営の日を待っていました。途中いろいろ行き違いがあったようで、最終的には昭和二十年九月十日に千葉県津田沼の鉄道連隊に入隊するよう命令書が来ました。

八月九日は、いつものとおり、家から百五十メートルぐらい離れた田んぼに行つて、父と二人、草を取っていました。

昼近くなつて、雲ひとつない青空をB29重爆撃機が二機、白い機体をキラキラさせながら、東の方から長崎の方へ飛んでいきました。しばらくして大きな爆発音がしました。私たちは「上井牟田に爆弾が落ちたのでは」と話し合いました。それほど大きく聞こえました。それが十一時二分だったのです。まもなく、長崎の上空で白い雲がもくもく渦を巻いて大きくなっていきました。太陽の光で雲の中は薄いピンク色をしておりました。それが原子雲だったのですね。

夕方四時すぎだったでしょうか。真黒い煙が北東の方へ、空が暗くなるほど流れていきました。原爆による長崎の大火災の煙だったのです。

二日目の午後、役場から使いが来て、「長崎に救援に行つ

てもらうので、握り飯の用意をして、今夜、森山駅前に集まれ」ということでした。召集を受け、私たちは森山駅前に集合し、中村浅エ門さん（故人）、草野順作さん（故人）などの引率で、歩いて長崎へ行きました。途中、いたるところで長崎から逃げてくる被爆者に会いました。古賀の松原付近で、白々と夜が明けてきました。日見トンネルをすぎると、道路脇に軍鶏籠しやもが出してありました。眠りながら歩いていた誰かが、その籠に乗りかかりました。勝山小学校の近くまで行ったとき、米軍のロッキードP38が双胴の機体をキラキラさせながら飛んできました。市役所に着くと、浦上方面に行くことになりました。長崎駅前を過ぎたころ、ガスタンクの近くで、馬車を引いたまま馬が倒れ、腹が破裂せんばかりに膨れていました。

目的地に着き、長崎市立商業学校を本拠地にして、山中の防空壕などを探してまわりました。小川の堰せきのところに、水を飲みに行ったのか、うつぶせになった少女の死体がありました。防空壕のなかにも、逃げこんでから亡くなったのか、いたるところに死体がありました。生きているけど動けない人は、わらむしろの担架で学校近くのテントのところ運びました。その人たちからは、警察官が住所、氏名、生年月日などを聞いてメモをしておりました。亡く

なった人の遺体は、学校の下の広場に運び、倒壊した建物の材木を敷いてその上に並べて火葬しました。死体には、うじがわき、動かすときにあごの下から両手一杯くらい落ちたのもありました。

平釜で玄米を炊いて、商業高校の校舎の日陰で昼食をいただきました。風が吹くと死体を焼く煙が来るので、食事どころではないと顔面蒼白になり、うずくまっている人が二人いました。

その日の作業を終え、引き揚げる途中、爆心地近くでは、木材は燃えてしまい、鉄の台枠だけになった電車の上に白骨が折重なっていました。電車のそばには、電車の窓ガラスが一握りの紫色のかたまりになって落ちていました。

市役所に着いたら、もう一日加勢をもらうように言われましたが、みんなで話し合い、召集のとき「一日だけ」と言われたこと、従って、みんな自分の家には「一日応援に行ってくる」と言って出てきたので家族が心配するとうことを、長崎市役所も了解され、日本酒を湯呑み一杯ずつごちそうになり、長崎駅から汽車で帰りました。みんな疲れて汽車の中で眠りこんでいました。そのとき着ていた服の死体を焼いた匂いは、三カ月くらい消えませんでした。

日本は、戦後から今日まで、戦争をせず平和が続いてお
ります。病気や怪我をしなければ、健康のありがたさがわ
からないように、戦争の苦しさ、みじめさを味わったもの
でなければ平和のありがたさは、わからないものかもしれ
ません。

(平成二十二年八月寄稿)

『学徒動員中の被爆体験』

江嶋 ミスエ(栄田町)

私は、十七歳のとき長崎三菱兵器製作所住吉トンネル工
場で被爆した。当時、現在の北諫早中学校にあった長崎県
立青年師範学校の二年生で、昭和二十年一月から学徒動員
中だった。

長崎三菱兵器製作所の女子寮は住吉地区にあり、そこ
は青年師範学校の担当の教官と四十人の女子生徒とともに
挺身隊などの女性が工員として生活していた。そこでの忘
れえない記憶の一つが、食事の合図の手振りで鐘が「リン
リン」鳴ると女子工員が食堂へ脱兎の如く走っていたこと
である。食堂は一テーブル十人分の配膳がしてあり、ご飯
(脱脂大豆入り)と汁物(大根の細切り数本)だけで、テ
ーブルはグループごとに決められていたが、座席は早く来
た順となっており、少しでも盛りの多い席へ着くためであ
った。当時は、いかに食糧不足を切り抜けるかが大切で、
私たちは、休みに実家から交代で、煎り大豆を袋に入れて
戻ってきた。夜間学習は、昼の仕事の疲れで殆んどできず、
大豆をボロボロ食べ、翌日にはニキビが発生していた。女
性教官が監督指導の当番に当たると、部屋の出入作法など、

所作の指導をいただいたが、私はその当時、女工員そのもので教師になる研鑽不足が心配だった。

最初に配属された長崎三菱兵器製作所大橋工場へは、国防色（黄土色）の作業服に戦闘帽、救急カバン、防空頭巾所持で一小隊（一部屋）ごとに出勤し、門番へ班長の「歩調取れ、頭右」の号令で挨拶をし、まるで兵隊さんであった。私と友人のT子は、ロクロ機の前で小さな魚雷のネジ作りの作業をしていた。昼食は、赤い木製の弁当箱にご飯が少しと平べったい大豆粕、大根漬等が入っていた。学徒動員の生活が数カ月経過し、やっと仕事になれた頃から、空襲警報のサイレンが度々鳴った。その都度、長崎三菱兵器製作所住吉トンネルまで走って避難した。

その後、被爆する一週間前に、私とT子は長崎三菱兵器製作所住吉トンネル工場へと配置替えとなり、旋盤機で同じネジ作りとなった。長崎三菱兵器製作所住吉トンネルには、トンネル工場が数本あり、工事中のトンネルもあったが、私達の配置されている三本目のトンネル工場までは、兵器製造の機械は設置済みで稼動していた。稼動しているトンネル工場には、途中に三本の横穴の通路があり、材料・道具などがあった。

八月九日、その日はT子と並んでトンネル内の新しい旋

盤機に向って作業していたが、旋盤機の調子が悪く、トンネル入口の事務所で旋盤機の故障部分の部品取替え手続きをしていた。外は太陽が強烈に照りつけ、広場には、工員の弁当箱を高く乗せた馬車から、馬方のおじさんが弁当箱を下ろしていたのが見えた。もうすぐお昼だが、仕事はうまくいってないのに、ちよつぱり嬉しい気分だった。

手続きを終え、ほっとしたその時、台風の何十倍ものスピードで、「ピカー、ゴー」と耳をつんざく音と青白い光に襲われ、トンネル中央にズラリと並ぶ電球やもろもろの物体と共に、トンネル奥へと吹き飛ばされ気絶した。どれ位たったか不明だったが、気がついたら手足がべっとりしており、頭が痛い。トンネル入口の方だけが微かに明るく、身辺は暗闇だった。運良くT子と大声で呼び合い、ぴったりに寄り添って、他の工員さんと、手さぐりしながら、横穴へたどり着いた。「B 29が爆弾を落としたのだ。外はどうなっているのだろう。」と長い沈黙の中でとても不安であった。

間もなく、燈油（手持の皿）を持った男性の工員の方が近づいて来られたので、ぼんやりと人の存在が見えた。横穴は身動きできぬほど工員さんで一杯になっていたが、それでも入口からは、爆弾で負傷された避難者がぞろぞろと

入ってこられた。暗がり、まどついている衣服は見えなかったが、声もなく空ろな眼であった。なかには担架で運ばれている人もいた。恐怖に身を寄せ合つて、成り行きにまかせ、時間が過ぎる。何時間経つたか、突然メガホンを持つた男性の方が現れ「トンネル内は危険です。外へ逃げて下さい。」と言われた。T子と二人で防空頭巾を被り救急カバンをさげ、皆の後からトンネルの外へ出た。

外は、トイレ、物置小屋、馬車、道路沿いの民家、飯場、全てなくなり、緑の田畑も燃えつきて、灰色の荒野と化していた。

私たち二人は道ノ尾方面へ逃げだしたが、上空で爆音があったので山手の方に逃げた。山の方もあちこちに煙が漂い、どんな爆弾が落ちたのか不明であった。しばらくして爆音も止まったので駅へと下りた。

線路に近づく頃はもう日は落ち、浦上の方から被爆した人がぞろぞろと線路伝いに歩いているのが見えた。素足の人、唇がふくれ、空ろな眼、焼けただれ今にも倒れそうな弱りきつた人、裸体に近い人、友人に支えられ歩く人、負傷者を背負って重そうに歩く人、まさに生き地獄だった。そのなかに大橋の本工場で作業していた同級生Hの傷だらけの顔があった。

呼びかけにも応答せず、笑顔も見せぬ、頭部もやられたのか、耳の上から出血の跡が見えた。二人で支えてやつと道ノ尾駅にたどり着いた。

ホームには、様々な負傷者が山のようにおり、「重傷の人だけ乗って」との声に、二人の救急カバンの中の包帯を全部取り出し、Hの頭部の手当てと、私とT子の軽い傷にも巻きつけ、何台目の救急列車だったのか分からなかったが、やつとこのことで乗車できた。絶対、今日中にHを諫早へ連れ帰らねばと必死だった。

車中は、負傷者でひしめき合い、大混雑の中でHを気遣いながら「早く出発して」と祈っていた。やつと動き出したかと思う間もなく、耳に突き刺さる空襲警報のサイレンが鳴り、列車が止まった。車中では乗客のうめき声とともに異様な臭い、蒸し暑さが充満していた。警報解除となり再び列車が動き出す。これを繰り返し、ようやく諫早駅へ到着し下車した。ホームで座り込む人もいたが、静まり返ったホームには、駅員も迎える人も見当たらない。

私たち三人は、駅近くの青年師範学校女子寮へ向かった。寮へ着くと、臨時養成科の人達が深夜にもかかわらず迎えてくれ、おにぎりを三個出してくれた。T子と私は、朝から何も口にしてないため、むさぼるように食べたが、Hは

口に入れようとしなかった。Hと私達は、別々の部屋に泊った。

翌朝、T子の自宅が天満町なので、家族と一緒にHを自宅がある佐賀まで送り届けた。私は学校へ行ってS教官に昨日のことを報告すると、S教官は即座に「それは原子ぞ。

ソ連とアメリカの対立になるかも。」と話された。

原爆投下二十年後から、長崎原爆慰霊祭に生き延びた級友が毎年参拝し始め、数年後の慰霊祭の際に、各自の被爆体験記録を残すこととなり、その後の編集作業の中で私は、青年師範学校M教官の八月九日以降の記録により、級友の被爆体験の詳しい状況を把握した。M教官は当時、前日の夜間作業で、就寝中の学生がいる住吉寮の最西端棟の一階で執務中、背中に火がつく熱気と青い光に襲われ、二階が崩れると同時に部屋の北隅に吹きとばされたが、幸い狭いすき間から無事這い出すことができたとのことだった。以下は、そのM教官の記録によるものである。

『・・・さつきまで整然と建っていた寮舎は、マッチ箱を押しつぶしたように重なりあつて倒れ、悲鳴と叫喚の中、次々と黒ずんだものから燃え始め、私は煙と炎の中、必死に生徒を探したが、かねてからの避難場所であるトンネル工場に避難したのか一人も見えず、走ってトンネル工場入

口にさしかかると、生徒全員が飛びついてきた。だが横腹から腸が見え、出血中の生徒M・Uには何一つ施す術がなかった。トンネル工場の外は黒い雨の夕立で、雨の中を海軍の方が立ち入り働いていたが、一般人はトンネルからの外出は許可されていなかった。

私は「生徒の引率者として、どうしても」と、海軍の幹部と思われる方の許可を得てトンネルから外出し、生徒を探しに行った。トンネル工場から出ると雨は止み、晴天だった。見える限り建物は全壊し、方々に火災が発生していた。道路には電線、電球、電柱など障害物が山積しており、やつとのことで大橋の兵器工場へたどり着いた。従業員七千五百名がいた最新鋭の魚雷製造工場の建物が、鉛をねじ曲げたようだった。倒れた鉄骨、ガラスの破片、学生作業場は見る影もなかった。

次に、長崎三菱兵器製作所大橋工場の分工場になっていた市立商業高校へ生徒を探しに向かったところ、途中で生徒のH・S（島原半島出身）と出会うが、元気そうだったので、みんな住吉のトンネル工場で待っていることを告げ別れた。市立商業高校分工場へ着くと、建物は全壊し、生徒も見えず思案にくれて戻りかけた時、従業員の方らしい人が「あなたは青年師範学校の先生では…」と右腕の腕章

を見て言われ、C子が純心女学校方面の丘で助けを求めていることを知らせて下さった。丘へ、丘へと数多の罹災者は、焼ける市街から蟻のように向かっていた。登りながらC子を血眼になつて探した。

五時を過ぎた頃、奇跡的に負傷者に交じつて田の畦に全身傷だらけで横たわっているC子を見つけることが出来た。

私は海軍の担架隊を探しに丘を往復した。その後、担架隊と一緒にC子を救急列車に乗せる線路まで運ぶと、「後で来るから」と言い残し、生徒が集まっている住吉のトンネル工場へ迎えに行き、トンネル工場にいた生徒たちを方々から集まっていた負傷者とともに救急列車に乗車させた。

だが数百歩先には担架で運んだC子のほか、たくさんの負傷者も救急列車を待っている。私は機関車によじ登り、頼み込んでC子がいるところまで汽車を進めて貰ったが、自力で乗れる人で満員になり、C子と私は取り残された。暗くなつた夜空に数時間おきに照明弾が上がり、市街地の火災はまだ続いていった。向いに見える山里国民学校も火柱を吹き上げ、燃えていた。

C子は、水を欲しがる。昼間通つた岩屋川の流水をタオルにしみ込ませて、唇だけ潤してあげた。深夜になつても

敵機は頭上にいた。C子は仰向けの状態で私の防空頭巾を枕にし、弱い声で「先生、安全なところへ逃げて下さい」と言い、私は「何を言う。死ぬなら一緒だ。」と言ひ地面に伏せる。このような状況が繰り返された。

市街地の火災もだんだん下火になり、周囲の負傷者のうめき声も小さくなつた頃、東の空が薄明るくなり、あたりの様子が見えた。火傷された方があちこちで亡くなつており、思わず合掌した。あれほど水を欲しがった人達だったのに、願いを叶えることが出来ず心で詫びた。だがC子は生きており、守ることができた。

一夜が明けると太陽が照りつけ暑い日になったが、日陰を作る物が何もない。午前八時頃、待ちこがれた青年師範学校の救護隊の教官二人と父兄一人が来た。その後、にわか作りの担架でC子を救急列車の車内に運んだ（後日、C子に当時のことを聞くと、長田小学校の避難所で消防団、婦人会の方の介護を受け、被爆後二日目にして初めてさつま芋を口に入れることができ、生き返つたとの話をした）。消息不明の学生がまだ数名いたため、救援教官と手分けして、方々を探し回つた結果、一人を除き消息が判明したが、S・Sだけがどうしても見つからない。

見つかった学生は、諫早、大村、川棚、早岐の各駅でそ

れぞれ下車し、收容所にて手当てを受け、重傷者は病院で治療を受けていた。

S・Sの捜索には、青年師範学校の教官が交代で当たっていた。彼女は、原爆投下時、長崎三菱兵器製作所大橋工場に勤務中であつた。私は、原爆投下後五日目に一人で当地へ向かい、アメのように曲がり倒れている大屋根の下、ガラスの破片をガチャガチャ踏みつけながら、多くの旋盤機の周りを探した。様相の変わった死体が多数あり、生徒の上衣の内側に縫いつけてある名札を一体一体調べた。

何十人目かにS・Sが見つかったが、余りにも無惨な姿になっていた。佐賀高校の救援隊に協力を求め、大屋根の下から、工場空地の合同火葬場へとS・Sの遺体を運んだ。海軍兵らしい人が火葬の作業に当たっていたが、近親者らしい人は一人も見当らない。私はトタン板を探してS・Sを乗せ、空地に咲いていたヒメジョオンを枕許まくらもとに供え、水筒の水で口を潤した。火葬の作業を行っていた方に他の死体と一緒に火葬を依頼し、遺骨を貰える時間を確かめた後、焼け残った住吉寮の一棟で一夜を過ごし、板切れと、垂れ下がっているカーテン布を利用して遺骨箱を用意し、翌十四日の朝、予定の時間に合同火葬場へ戻った。

黒々と積み重ねられていた死体の山は、小さな冷たい灰の塚と

化していた。誰もいない火葬場でトタン板の上には、多くの白骨があつた。それらしいものを掘り出し、手製の箱へ納め、姿なきS・Sと午後の列車で親元へ向い、その遺骨を届けた。

その後、腹部出血していたM・Uが気になり、休む間もなくその足で療養先の佐世保海軍病院へ向かった。M・Uは両親に見守られているが重体であつた。夜になると爆音がし、燈火を消した病室で、じっとM・Uを見守り夜明けを待った。しかし、人影が見える夜明け頃になってM・Uの容態が悪化した。両親の呼び声にも反応はなく、段々と安らぎの顔に変わっていった。これが最期だつた。自分の無力さを許してくれと冥福を祈った。終戦の詔勅はその日の正午だつた。』

以上がM教官の記録によるものである。この頃からM教官自身も、歯茎の出血、下痢、右腕・脇腹の火傷の痛みと生徒の生存確認の責務を果たしたとの安堵感からか体力が抜け、疲れ果てていたため、郷里の広島の田舎で療養されているが、二カ月後には復帰を果たされている。

無傷であつた森山出身のH・Yと市立商業高校分工場から住吉のトンネル工場まで歩けたH・S（島原半島出身）は放射能のためか、紫斑が体中にひろがり食が進まず、ま

た、有田出身のH・Sも容態が悪化し、三人とも原爆投下後三十日前後で亡くなった。

森山のH・Yの墓参りに行く度に「親代りに嫁にも行かず、妹を先生にと夢見ていたのに」との気持ちヒシヒシと私の胸を打ち、生き残った自分が代っていたらと責められる。

その後、原爆投下から数年が経過して一名、更に六十六年目に五名、合計十一名の級友が亡くなった。

被爆直後から、学校責任者の長崎市在住K教頭とM教官には本当に良く対応していただき、生存した生徒は、無事卒業することができた。しかし、その後、被爆の後遺症、風評に怯えつつ家庭に学校にと日々の生活と戦った。昭和四十年からは生き延びた級友に声をかけ合い、亡くなった級友の御霊前に集い冥福を祈っている。

この世に「原爆のない平和な世界」をどうしたら築けるのかと思いつつ、戦争、原爆での犠牲者及び関係者の方々に深く頭を下げ、今生きている幸せを感謝し、私の体験談を終わります。

(平成二十三年七月寄稿)

『私の原子爆弾被爆体験記』

丸内 進(真崎町)

現在、私は、諫早市に住んでおります。しかし、被爆当時は、長崎市昭和町に住んでおりました。現、長崎大学附属小・中学校のすぐ北側です。

被爆後六十六年経ちましたが、あまりに酷すぎた体験だったので、これまで話をしたり、書き残したりしたいと思いませんでした。しかし、年月が過ぎ、大勢の被爆者が亡くなり、少なくなってきました。平均年齢は七十七歳と高齢化し、次第に当時を語り継ぐ人が減ってきたことを考えると、私の体験を知っていたらと思えばと思ひ、当時の体験を書き記すことにいたしました。

当時、九歳で国民学校(現在の小学校)三年生でした。広い視野で現状を見ることも出来なかっただろうし、忘れたこともたくさんあることと思いますが、精一杯思い出して、皆さんに私の被爆前後のことを知っていただけたらと思っております。

皆さんご存じでしょうが、昭和十六(一九四一)年十二月八日に大東亜戦争(第二次世界大戦)が始まりました。始まってから終わるまで約三年八カ月間でした。

最初は、日本が先手を取りました。ハワイの真珠湾に駐留していたアメリカの軍艦を攻撃したことから始まり、日本が勝利していました。しかし、間もなく占領していた東南アジア諸国を取り返され、日本国は負けていきました。

世界地図を見ても分かるように、日本の国は小さくて資源も少ないのに比べ、アメリカは爆弾や船や飛行機に必要な鉄やガソリンがたくさんあり、人もたくさん住んでいる大きな国だったからです。だから戦争が始まってしばらくすると、日本の近くの海に、アメリカの軍艦や潜水艦、また、たくさん飛行機を積んだ航空母艦が来ました。そして、日本の国全体に大砲を撃ち込んだり、大きな飛行機が百機以上も一度に飛んできて、昼となく夜となく爆弾や焼夷弾を落としていくようになりました。東京にも大阪にも、県内は、長崎、佐世保、大村、島原、この地諫早にも、隙間の無い程、たくさん落としました。多くの家が焼け、多くの人が死んだり怪我をしたりしました。

昭和二十（一九四五）年八月十五日、日本が無条件降伏をし、戦争が終わる直前に、アメリカ軍は、広島市と長崎市に原子爆弾を落としました。広島市には昭和二十年八月六日、午前八時十五分、長崎市にはその三日後の昭和二十年八月九日の午前十一時二分でした。

原爆が落ちた時、私は爆心地から千八百メートルしか離れていない昭和町に住んでいました。何しろすぐ近くです。

その日の朝、私の家には、母と姉（父は昭和十六年十月に病死し、十一歳年上の兄は、昭和二十年八月に入隊し不在）、力野の叔父さん親子五人（長崎市銭座町に住んでいましたが近くに変電所があり、空襲攻撃の目標となるこのとで強制疎開となり、我が家の二階に仮り住まいをしていました。被爆当時、屋敷内に家を建て替えようと解いた材木等を運んでいた。）、離れに茶の木原（お父さんは出征）のおばあさん、お母さん、子ども二人の四人、合わせて十二人が住んでいました。私の祖父と祖母は、「昭和町は爆弾の落ちて死ぬけん恐ろしか。」と言って隣の川平町（祖父の弟の小屋を借りて）に疎開しておりました。姉は県立女学校二年生（現中学二年生）でしたが、女学生でも学徒動員とって仕事に行かなければならなかったので、母と離れのお母さんと一緒に三人で、爆心地から一キロメートルくらい離れている、三菱兵器製作所（当時、魚雷を作っていた。）に仕事に行っており、その日も一緒に出かけていました。

原子爆弾が落とされたその日は、朝から雲一つ無く晴れ渡り、家の前の大きな柿の木からは幾種類もの蝉が鳴き騒ぎ、じっとしていても汗が噴き出すような凄く暑い日でした。

た。力野の叔父さん（お縁で新聞を読んでいた。）と叔母さん（洗濯物を干す為に庭にいた。）は太陽の光が当たっている所にいました。私も太陽が当たっている庭で、草箒ほさきを持って鐘楼トンボを捕って遊んでいました。（十キロメートル離れていても、太陽の光が当たっている所に居た人は、全員が酷い火傷をした。）

すると突然、耳をつんざくような飛行機の「ブーン！」という、もの凄い爆音がしました。

当時は、アメリカの飛行機が長崎方面に飛んでくると、警戒警報が発令され、「ウーウー」と長いサイレンが鳴って、注意するように知らせていました。さらに、もっと近づくると空襲警報のサイレンが「ウー、ウー、ウー」と短く何回も鳴って、防空壕に入るようにと知らせていました。

その日の朝方は、空襲警報でしたが、その時は飛行機が見あたらなかったのか、警戒警報に変わっていました。警戒警報なのに、何故、突然爆音がしたかという、後で分かったのですが、原子爆弾を落としたB29はエンジンを切ったので飛んできたので、飛行機が来たかどうか分からない所を飛んできました。しかも、突然大きな爆音がしたのは、パラシュートをつけた原子爆弾を落とし、爆発（地上五百メートル）する間に速く逃げなければ自分たちも危険

なので、原子爆弾の投下後、エンジン全開で逃げたのだと思われまます。

私は一瞬「日本の飛行機か、アメリカの飛行機か、どちらかな？」と考えましたが分かりませんでした。でも、いつも母から「離れに住んでいる茶の木原のおばあさんは耳が聞こえにくいから、空襲警報のサイレンが鳴ったら教えと一緒に防空壕に入りなさい。」と言われていたのを思い出しました。そこで、離れの玄関に走り込みました。するとその途端、稲妻の光など比べものにならない、「赤、青、黄、緑、黒、紫」等のありとあらゆる色の閃光が束となって、南側のお縁の方から私におおいかぶさってきました。

私は、今まで経験したことがない出来事にびっくりし、何が起こったのか分からずパニックになりました。茶の木原のおばあさん達のことなど忘れ、庭に飛び出ました。二、三步庭に出た時、光と同じ方向から、今度は台風の何十倍、何百倍とも思われる、もの凄い風が吹いてきて、その場に押し倒されました。

私は、「両手の親指で左右の耳を塞ぎ、他の四本の指で左右の目を塞ぎ、足は甲を伸ばし地面に着ける。」と繰り返し言いながら、日頃学校で訓練していた「伏せ」の動作を行いました。すると、地球が破壊されて無くなるのではない

かと思うような、もの凄い音が何回もしました。私は「もう死んだ。もう死んだ。」と言葉に出しながら、本当に死んだのだと思っていました。それは長い時間のようでもあり、また、短い時間のようでもありました。

死んだと思いつながら、何気なく息を吸ってみると呼吸が出来ました。「あつ！生きとる！」と大声で叫んで頭を上げました。

そこに見えたものは、壁土と瓦の下の泥とが、もうもうと立ち登り、かすかにしか見えませんが、壁もない瓦もない、柱は折れ曲がり、今にも倒れそうな我が家でした。つい先程まで、大きく立派な二階建ての姿は、見る影もなく無残なあばら屋と化した光景でした。

私は、はつと我に返りました。全身を覆っていた落ちてきた折れた木材や割れた瓦などを払いのけ立ち上がりました。そして、いつも決められた場所に、袋に入れて置いてある貯金通帳や配給の通帳などの重要書類と、私の教科書が入っているランドセルを持って防空壕に入らなければと思いつ、ガレキが山のように積もった所を乗り越え、玄関らしいところから家の中に入りました。そして、もの凄いや量のホコリで、土の上か畳の上なのか分からない所を通り、この辺りだったと思われる所を、ホコリを手で払いのけな

がら重要書類やランドセルを探しました。しかし、ホコリが厚く積もっていて見つかりません。すると、外で洗濯物を干していた力野の叔母さんに会いました。原爆の光線をあびて、着ていた着物が燃えてしまい、全身酷い火傷を負っていました。台所と家の裏にある防空壕の入り口の間を、丸裸で「とし子、とし子。」と長女の名を呼びながら探して走り回っていました。二人の妹たちは、「ここに埋まると」と声がありました。かまどだった所には、土壁が幾重にも折り重なって倒れていて、それを持ち上げようとしていました。すぐ側には、自家製の醤油が入った大きな樽が割れて、醤油がドクドクと流れ出ているのが見えました。

私は、そのような光景を見て、「もうここはダメ！危ない。そうだ祖父母が疎開している（四キロメートル位離れていた）川平町に行こう。」と思いつ、表に走り出しました。しばらくして、「えらく汗が出るなあ。」と思いつて手で顔をぬぐうと、血が付いていました。「こんくらいは大したことはないか。」と思いつ、次に、さつきから歩きにくいと思いつていた右足を見ると、草履の鼻緒が切れて引きずって歩いています。「ああ、鼻緒の切れとる、これは捨てんば。」と声に出して捨てました。裸足になると歩きやすくなりました。隣の家との境に植えてあったチンチク竹の間を通り抜けると、

その隣のわら屋根だった辻本さんの家は、燃え上がっていました。家の中から、泣きながら荷物を運び出しているおばさんの姿が見えました。

私が大きな道に出るために、細い裏道を通っていると、佐々木さんの家で三週間ほど前に生まれた真っ白い可愛い子ウサギと親ウサギが、崩れた箱の側でピョンピョン跳ね回っていました。私は無意識に、「お前達も生きとったか？」と声に出して言って通り過ぎました。パニックになると考えたことが言葉として発せられるのだろうかと思いません。大きな道に出ると、たくさん電線や電話線が倒れかかったりしている電柱と電柱の間で切れて、垂れ下がっていました。

ふと後ろを見ると火傷が酷く、皮は剥げて関節で垂れ下がり、顔は腫れ上がり、着物の縫い目だけ残っていた、とても人間とは思えないほど酷い姿の裸に近い人が、住吉町方向から、まるで幽霊のようにふらふら歩いて来ました。川平に疎開していた祖母に似ていたので、まさかと思って、「ばあちゃん。」と呼んでみたけれど、返事はありませんでした。

「人違いだったかな。」と思いながら五十歩程歩いて、二階建ての校舎が潰れてペシャンコになっている西浦上国民学

校（当時の小学校で現在は附属小・中学校）の校門の所まで来ました。すると、国民学校の脇の細い道を、母が走って来るのが見えました。「お母さん。」と呼ぶうちにすぐ横まで来ました。母は、私の血のついた顔を見て「どこばやられたね？」と尋ねました。「ここばやられた。」と言って頭を指で指しました。もう血は止まっていました。坊主頭の短い髪の毛を分けて、「大したことはなか。」と言って家の方に行こうとしました。私は、あわてて「家はやられて、崩れてしもうて駄目ばい。川平町に行こう。ばあちゃんはどこに？」と後ろを振り返ると、すぐ横にいました。なぜ一度は人違いと思った祖母を、「ばあちゃんはどこに。」と言ったのか今も分かりません。

母がびっくりして、「どうして川平町に疎開した人が、ここに居るとね？」と尋ねました。でも返事はありませんでした。今思うと、爆風と爆音で鼓膜が破れて聞こえなかったのかもしれない。母が、「家が駄目なら、川平町に行こうか。」と言ったので、祖母を気遣いながら、三人で川平町に向かって歩き出しました。その後、祖母はリヤカーを借りて、家に荷物を取りに来る途中、路上で被爆し酷い火傷を負ったことがわかりました。

途中、火傷したり、怪我をしたりして血を流しながら歩

いている人、人の肩にすがって歩いている人、道端に座り込んでいる人など、大勢の人達を見ました。腕から血が噴き出して、「ここをきびびって下さい。」と言って、わら縄を持って来る人や、「私の家はどこでしょうか?」「私の子どもはどこに行ったのでしょうか?」などと聞いてくる人もいました。しかし、自分たちもどうなっているのか、これからどうなるのか分からない状態の中で、人のお世話をするような余裕などありませんでした。

私は、着ていた半袖シャツが破れて裸同然でした。落ちていた風呂敷のような布切れを拾い、母に肩から掛けてもらいました。また、裸足だったので、たまたま草履が片方落ちていたのを拾って履きました。三人でとぼとぼと歩きながら、周りの様子、自分たちの様子を思い浮かべたとき、家の仏壇の引き出しに入れてある「地獄の絵本」が思い出しました。死んで地獄に落ち、痩せて骨と皮だけになり、争いながら我先にと、水とか食べ物を欲しがっている姿です。「本当は、私も死んで地獄に来ているのではないだろうか?」などと周りを見回したりしながら歩きました。

三十メートル程歩いて、昭和町と川平町の境が見える所まで来ました。道のすぐ上に建っていた三軒の家が、まるで紙くずを積み上げて燃やしているように、高い炎を上げ

て燃えさかっていました。

それを見ながら、また百メートル程歩き、谷口さんの家の下まで来ました。すると母が、「あそこは道のすぐ上で、あれだけひどく燃えていたら通られんばい。」と言いました。また少し行くと、たくさんの人が左側の急な坂を登っていました。母が、「何処に行きよつとね?」と一人に尋ねると、「水道のトンネルに行くと。」と答えました。「川平には行かれんけん、そこに行こうか。」と母が言ったので、長さ三十メートル位の坂を、足を滑らしながら登りました。祖母の手を引っ張ったり、お尻を押ししたりして、やっとトンネルの入り口まで辿り着きました。

水道のトンネルというのは、浦上水源地からポンプで水を吸い上げ、三菱兵器製作所に水を送るため、山の中腹を掘って貯水槽を作ったものでした。やっと貫通したばかりで、床は大小の石がごろごろ転がっていました。それでも石を除いて平らにすると、大きくて安全な防空壕でした。

トンネルの中央付近に場所を決め、石を除いて、平らになった土の上にさっき拾った布を敷き、祖母を寝かして一息つきました。すると、入り口の方からも奥の方からも、「お母さん。」「苦しい。」「痛い。」「水が飲みたい。」などで聞こえなかった、怪我をしたり火傷をしたりした大勢の

人達のうめき声や、それを励ます家族と思われる人たちの声が聞こえてきました。

祖母の火傷の状態を、母が薄明かりの中で見ていて、「こりゃー、ひどかね。全身皮が剥げてしもうて肉だけになっている。」と言いました。しかし、そんな状態でも、どうしてやることも出来ませんでした。

少し落ち着いたので、トンネルから外に出て下を見渡しってみました。すると、そこから見える全部の家から炎が上がり燃えていました。私の家は山の陰になっていて見えませんでした。しばらくして「丸内の家も燃えたげな。」と誰かに聞きました。しかし、まるで人ごとのようで何も感じませんでした。その間に、何度も飛行機の爆音がして、トンネルの中に逃げ込んだり、その場に伏せたりしていました。

夕方近くになって、少し落ち着きを取り戻した母が、「こげんしとつても、どうにもならんばい。家は焼けて無いだらうけど、家の裏の防空壕の中には米、味噌、醤油、塩、梅干し、それに鍋、釜も入れとつた。力野の叔父、叔母、姪達、茶の木原の人達も、どげんしとるか気になる。道は通られんじやろうけど、山の中を通過って防空壕が無事か見に行ってみようか。」と言いました。その頃は、もう飛行機

の爆音もしていなかったもので、母は、「防空壕が残っておればすぐ迎えに来るけん。寂しかろうけど、いつとき、ここで我慢して待つとつてくれんね。」と言い、祖母のことを隣の人に頼み、私も一緒に出かけました。だけど、母が言ったことは、多分祖母には通じてはいなかっただろうと思います。

母は、被爆した時、上から落ちてきた材木か鉄骨かで右足を打撲していました。気が動転していたので、痛みを感じていませんでしたが、少し落ち着いてきて痛みだしていました。痛みをこらえて、足を引きずりながら倒れている木を乗り越えたり、くぐったり、除いたりしながら、長い時間をかけて西浦上国民学校の防空壕の所まで辿りつきました。

そこでは、先生方が、あっちに行ったりこっちに行ったり、せわしく走り回っておられました。私の受け持ちの先生も居られたので、「こんにちは。」と挨拶をしたのですが、知らん顔でした。その時はおかしいなと思いましたが、後になって、同僚の二人の先生が壊れた校舎の下敷きになって亡くなられていたことを知りました。

我が家の見える、隣家の下まで辿り着きました。我が家は、噂通り焼けてしまい跡形も在りませんでした。家の横

に植えられていた、当時としては珍しい大きな八重つばきの木も焼けて、立ったまま黒い煙を上げてくすぶっているのが見えました。

その光景を見た途端、母は我に返ったのか、「あや子はどげんしたろうかね？三菱兵器製作所は、やられ方の酷かったけん、死んだじやろうね。」姉のことを思い出してつぶやきました。

少し平静に戻ったからでしょうか、私も家が焼けて無いことや、今朝別れた姉が死んだかもしれないと思うと、急に悲しくなり、母と一人で声を出して泣きました。そして、姉に可愛がってもらった事などを思い起こし、しばらく立ちすくんでいました。しばらくして我に返り「防空壕に行こうか。」と言って、また山の中を歩いて行きました。やっと防空壕の抜け穴にたどり着きました。抜け穴の階段を下りて行くと、防空壕の中にいるたくさんの人が、薄暗い中に見えました。さらによく見ると土の上に板を敷き、その上に布団を敷いて一人が寝かされていました。他の人は、肩をよせ合い抱き合うようにして、土の上に座っていました。そこには、全身火傷をした力野の叔母さんが寝ており、叔父さんは太股を火傷していました。他は全員無傷でした。「進ちゃんも無事だったね、良かった良かった。」と言って

私と母の無事を喜んでくれました。

しばらく被爆時のことを語り合っていました。茶の木原のおばあさんが、「うちの母ちゃんは、まだ帰えらんが、どげんしとったろうか？」と母に尋ねました。母は、「すぐ近くで働いとったけど、何かの下敷きになっていて動けん状態だった。近くで火の手が上がっていたので、ひよつとすると駄目かもしれない。」と言いました。茶の木原のおばあさんと子ども達は少しがっかりした様子でした。

辺りが少し暗くなり始めた時、「母ちゃん、母ちゃん、誰もおらんとね。」と誰かが家の焼け跡や防空壕に向かって叫んでいる声が微かに聞こえてきました。防空壕の入り口に行つて見ると、叫んでいるのは姉でした。母は、「無事じゃったね。みんな防空壕の中に居るけん、気を付けてこつちに来んね！」と叫びました。

姉が防空壕の中に来ると、みんな抱き合つて無事を喜び合いました。母は、髪一つ乱していない姉を見て不思議に思い「どげんして、かすり傷一つな状態で帰つてこられたとね。」と尋ねました。

姉は、兵器工場で働いていると、強い光線と爆風で壊れるもの凄いい音がして、その場に伏せたこと。すると、同級生が自分の上に倒れてきて、その上に柱や梁、天井の鉄材、

瓦などが落ちてきて下敷きになったこと。しばらくして、いろいろな物の壊れる音も止み、静かになったので、起きあがろうとしたが重くてできなかったこと。二人で「助けて下さい、助けて下さい！」と叫んでいると、全身血だらけの知らない男の人が来て、上に載っている物を一つずつ除いて下さり二人とも助かったこと。自分の上にかぶさっていた同級生は怪我をしていて、あちこちから血が出ていたが、自分は何ともなかったこと。その後、三人ともその場で別れ別れになり、自分は大勢の人達について行ったこと。あちこちに行つて時間を過ごしたが、どこも飛行機が飛んで来て安全ではなかったこと。最後は、赤迫のトンネルの兵器工場（アメリカ軍に分からないようにトンネルの中で魚雷を作っていた。）に避難に行くと、大勢の人達が居たこと。そして、しばらくして家のことが気になり、道らしいところを探しながらやつとの思いで帰ってきたことを話してくれました。

話を聞きながら、姉も運が良かったし、私もこうして母とも姉とも会い、生きていられることを運が良かったと思えました。

しばらくすると母が、「昼から何も食べても、飲んでもおらん。みんな腹のへつとるじゃろうけん、ご飯ば炊いて食

べんばいかんね。米も、釜もそこに入れてったね。抜け穴から山の中を通つて、馬場さんの井戸水を汲んで米を研がんといかんね。アメリカの飛行機に見つからんごと、山の中でご飯ば炊いて、みんなで食べようで。」と言いました。元気な姉と従兄弟達にご飯を炊いて、梅干しとか、塩をおかずにして食べました。やつと人心がついて、防空壕の土の上に布、布団などを敷いて寝ました。途中で寝返りを打つと、冷たい土が手に触れ目が覚めました。「あつ、防空壕の中だったか。」と昼間の惨事を思い起こし、現実引き戻されました。

翌朝、朝食を食べ終わった頃、「婆ちゃんば探しよつとばつてん、そこにはおらんね。」と祖父の声が、焼け跡の向こうからしました。そこで、はつと我に返り、水道のトンネルに残して来た祖母のことを思い出しました。「婆ちゃんば水道のトンネルに居るけん。」と言うと、祖父も動転していたのか、我々の様子は一言も聞かず、急いで行つてしまいました。

昼頃になり、叔母さん達が飼っていた五羽のニワトリのうちの一只が、防空壕の前の焼け跡に突然帰ってきたので、布のきれ端で足を結び、やけた敷石につなぎました。そして、次に見た時、そのニワトリが卵を一つ産んでいました。

喜んでそれを持って、防空壕の中で寝ていた力野の叔母さんに見せに行くと、「これは進ちゃんにやるけん食べんね。」と言われました。私が貰い、夕食に卵ご飯にして食べました。その美味しかったこと。その味は今でも忘れません。

次の朝一番に、ニワトリが、また卵を産んでいないかと思いい見に行くと、かわいそうにつながれたまま死んでいました。力野の叔父さんがさばいてスープにして、みんな久し振りのご馳走に、「おいしい、おいしい。」と言って食べました。後になって、あのニワトリは放射能障害で死んだのではないかと思うと、それを食べてよくこの年齢（七十五歳）まで生きられたなあと思議に思います。

十三日になって、祖父が水道のトンネルから川平町に連れ帰っていた祖母が亡くなったと知らせが届きました。母は痛い足を引きずりながら、姉と私の三人で川平町まで歩いて行きました。しかし、すでに祖母の遺体はお墓に埋葬され、水道のトンネルに置きっぱなしにしたお詫びも、最後のお別れも出来なかったことが、今でも申し訳なく残念でなりません。

このように戦争はむごいものです。勝ったアメリカの方もたくさんの方が死にました。負けた日本の方も、それ以上たくさんの方が死にました。これから戦争がおきると、

あなた方のお父さん、お母さん、兄弟、それに親戚、近所の人、あなたたち自身も死ぬのです。本当にたくさんの方が何も悪いことをしていないのに殺されます。

たとえ、運良く生き残ったとしても、破壊し尽くされ、住む所も無く、食べる物も無く、着る物も無くなり、今のような平和な生活は続けていけません。

しかも、また原子爆弾が使用されれば、一発で広い範囲の大勢の人達を一瞬にして怪我をさせたり、火傷をさせたりして殺します。しかも目に見えない放射能が百年、二百年、いやもっと長い間地球上に残り、ガンになる人、白血病になる人、肝臓が悪くなる人等、大勢の人がいろんな病気になるって苦しみますし死んでいきます。私も被爆のせいなのか分かりませんが、胃ガンになり平成十九年七月に胃の全摘手術をしました。

世界中には、原子爆弾を保有する国があり、その数は二万発といわれています。今から作ろうとしている国もあります。戦争になると原子爆弾を落とす国が出てくるかもしれません。そうなったら放射能が風に乗って地球全体に広がります。人も動物も死んでしまおうし、植物も枯れてしまします。地球上からすべての物が無くなってしまうのです。

もしそうになると、今のような平和な生活は続けていけま

せん。この平和な生活を続けていくためには、世界中の国々が戦争をしないように、また、させないように、皆さんも世界の人達と手を取り合って、戦争のない、核兵器（原子爆弾）のない、平和な世界にしなければならぬのです。

（平成二十三年八月寄稿）

『被爆者救護にあたり』

馬場 すづ子（小川町）

まず始めに、なぜこの太平洋戦争が始まったのかというと、日本軍が宣戦布告無しに真珠湾（パールハーバー）という所に爆弾を落としたことが原因です。いきなり爆弾を落とされたアメリカは当然怒り、日本軍は勝った勝ったと大喜びしました。今でも、この奇襲によるアリゾナ駆逐艦「ユタ」の残骸が一部現れており、千人余りの遺体は引き揚げられること無く残されているとも聞きました。どれだけ多くの悲惨なことが、日本及び全世界を覆ったことかと考えます。その後、アメリカはどんどん日本に攻めてきました。当時の日本には、鉄や金などの資源が全くありませんでした。それに食糧も底をつき、貧乏になっていました。

昭和二十年当時は、男子はみんな兵隊にとられ、若い女性も軍需工場にとられ、戦争のために何もかもが「足らん足らん」という生活の毎日でした。重湯のようなご飯、イモやかぼちゃの入ったご飯、食べる物も着る物も無い無いづくしの世の中で、「欲しがりません。勝つ迄は」と言い聞かせて我慢したものでした。玄米を少しだけ分けてもらって一升ビンに入れ、棒でつついて、もみガラを取ったわず

かなお米に、沢山の野菜を入れてご飯にしました。食べ盛りの子ども達は大変だったと思います。現在の様な白ごはんなどはとんでもなく、それでも不平も言わずに頑張ったものでした。

空襲、空襲の毎日。お縁の雨戸も開けっ放しで、着のみ着のまま、大事な荷物だけを持って防空壕に避難しました。その頃二十五才の私は、幼い子どもをおんぶしていました。みんな必死で「勝つ迄は。勝つ迄は。」と言いきかせる毎日でした。「いよいよ召集がくるとばい。」と、皆案じていました。召集令状は「四十才までは来るらしい」と話していました。私の夫は三十五才できました。召集令状が来ると、「出征兵士の家」と書いた紙を玄関の表札の横に貼られます。当時は大変名誉なことでしたが、今思い出すと、その時の気持ちは複雑なものでした。「死して帰れ。君（天皇陛下）の為。」など寄せ書きに書いてありますが、本当に当時は戦争に行くのを喜んだものです。変ですネ・・・。

みんなに集まってもらい、寄せ書きを書いていただきました。また、「千人針」の布を身につけてお守りにしました。「千人針」とは、鉄砲の玉に当たらないようにと願いを込め、千人の方々から一枚の布に玉どめを作ってもらうことです。とにかく無事を祈りました。寄せ書きは、海水につ

かった為にボロボロに傷んでしまいました。召集を受けることみんなから「万歳!!万歳!!」と送られました。夫は、陸軍として出征しましたが、上の都合で海軍に配属されました。夫が乗った船は戦艦「喜備津丸巡洋艦」。大きな船の先頭高射台には、人員八名が配置され、敵の戦闘機を撃つ役目でした。しかし、散々にやられてしまい、逃げる所もなく、四人は海に飛び込んだそうです。飛び込んだ海には人や馬の死体が沢山浮かんでいて、その中で、もまれにもまれ、運良く日本の海軍の船に助けられたそうです。

その時、身につけていたのがみんなから書いてもらった寄せ書きで、今ではうちの宝物になっています。不幸にも泳げない者は沈んでしまいましたが、私の夫は水泳が人より達者だったのが幸いして、九死に一生を得ました。その海はフィリピンのマニラ海でした。昭和十八年一月三日の事です。

その二年後の昭和二十年八月九日、十一時頃、B29が諫早市上空を通過しました。偵察機が来たのかなと思ったら、「ピカーっつ!!」と閃光が走り、光ったと思いきや「ドカーンッ!!」と大きな音がしました。空は曇り、夜のように真っ暗になりました。三時間程で元に戻りましたが、長崎から三十五キロメートルも離れている諫早に夕方六時頃、

灰がチラチラと降ってきました。「さあ大変!! 長崎がピカドンにやられて大変だ!!」と慌てて防空壕に走ったのを憶えています。

夏休み中だったので、生徒のいない学校に負傷者が次々と収容されました。班長や婦人会の役員等、そして会員であつた私も召集されました。沢山の毛布や布団等をリヤカーで何度も運んだり、おにぎりや梅干の用意を手伝つたりしました。収容された学校の教室には見るも哀れな負傷者が一杯でした。小さい女の子が「母ちゃん。母ちゃん。」と母親にすがりつくのですが、その母親もひどく負傷していました。髪は焼けちぢれ、身重の体にすがりつく女の子を手で払いのけていました。ヤケドの傷は痛々しく、手のほどこしようなありませんでした。私達は薬を塗つてあげることにくらしかできないのですが、これといった薬もなく、何やら黒い液を筆の先で塗るだけでした。

同じ部屋に五、六年生位の男の子がゴロリと寝ていました。頭に服をかぶつており、「お水飲む?」と聞いても首を振るのがやっとでした。そつと服をとつてみると、なんと耳の穴からウジ虫がモゾモゾ動いているではありませんか。声にはならないくらい驚き、私はそつと割り箸でウジ虫を取つてあげましたが、その時の感情は今だに忘れ得ません。

その他にも、朝鮮の男性は、腰のあたりの傷口から腸が十センチ程とびだしており、これにはお医者さんも首をかき上げておられました。教室の入口には「一、軽い」「二、ひどい」「三、死者」と書かれた紙が貼つてありました。その「三」の教室は死者で一杯でした。ふと見ると、きれいな娘さんの頭が半分切れていました。自分の目を疑いました。その娘さんの母親と思われる人がみえられ、その娘さんを抱きかかえ泣き崩れておられました。今思い出しても胸が痛みます。

こんな悲惨な事が起こっていても、無情にも敵機はまだ来るのです。動けない負傷者を気使いながらも、私達は外に出て地面に伏せ、身の安全を守りました。本職の看護婦さんと交替して家に帰りましたが、一晩中眠れませんでした。翌日、学校に行きましたが、前日見た女の子も、ウジ虫がわいていた男の子も、腸がとびだしていた朝鮮の男性も、頭が半分切れていた娘さんも、もう部屋にはおらず、また違った負傷者で一杯になっていました・・・。

八月十五日。十二時のラジオ放送を聞くようにと町内より連絡がありました。茶箆筒ちやだんすの上に置かれた小さいラジオにむかつて、皆かしこまって聞いておりました。ラジオは雑音が入り聞こえにくく、玉音ぎよくおんといって、天皇陛下のお言

葉の「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び…」との言葉だけ聞きとることができました。私はてっきり敵前上陸でもするかと思つた矢先に、叔父がやつてきて、「戦争に負けたとばい。よかつたたい。お父ちゃんも帰つてきんしゃつとばい。」と言いました。まさか日本が戦争に負けるとは思つていませんでしたが、内心ホツとしたことを覚えておりません。

夫が帰つて来た日の事を思い出しました。軍服はシラミだらけで、シラミの卵もいっぱい付いておりました。私はすぐ洗濯して、大きな釜で熱湯消毒して外に干しておいたところ、泥棒に盗まれてしまいました。なにせ、この頃は人の物を盗んでも生活していく、という死にももの狂いの毎日で、銭湯に行った時は、特に泥棒には注意したものでした。

終戦を迎えても恐れと不安で一杯でした。「明日、進駐軍がやつてくるから、女、子どもは押入れに隠れる様に」との連絡がありました。やがて戦車に乗った体格の良いアメリカ兵がやつて来ましたが、何事もなく通り過ぎました。それどころか、子ども達がアメリカ兵から飴やチョコをもらい、喜んでついでまわる様子を見て、なんとも言えない気持になったことを覚えています。終戦後の日本は、戦前

と同じ様に、食糧も着る物も切符制で、「足らん足らん」の生活が毎日続きました。しかし、それが当たり前と辛抱して、耐えて耐えて過ごしたものでした。

六十五年前に落とされた原爆のことを知り、家族や皆さんと一緒に平和の為に考えてみましょう。

私の願いは永遠の平和。皆さん、戦争は決して正しくはないんだということをしっかり知って欲しいと思います。

平成二十三年八月四日（被爆体験講話会にて）

『爆心地から二十五キロメートル離れた諫早 で目撃した「生き地獄」の忘れえぬ記憶』

山口 忠喜(天満町)

昭和二十年八月九日、十一時二分、長崎に原子爆弾が投下されました。私は、北諫早小学校の五年生(十歳)、天満町に住んでいました。

原爆投下当日、午前十時頃、空襲警報のサイレンがけたましく鳴り響きました。我が家のラジオは性能が悪く、雑音でニュースが聴きにくいので、下の家までラジオを聴きに走りました。十時五十分には警報が解除となり、安心して下の家の玄関を出ました。その時、頭上でB29爆撃機の爆音がし、見上げると大きな機体を銀色に輝かせながら長崎の方向へ飛んでおり、「警報が解除されたのに、どうして？」と子ども心にも不審に思い、機体の行方を眺めていました。それから一、二分経った時、強烈な赤紫の閃光が空全体を覆い、間もなく大きな爆発音がとどろきました。私は恐怖のため、身動きさえできず、突っ立ったまま足が動きませんでした。ふと西の方向に目を向けると、二百メートル余り離れた本明川の対岸にある海軍病院の別棟の東側の窓ガラスが爆発したように破れ散るのが見えました。

とっさの出来事であり、そこに爆弾が落ちたと思ひ、あわててわが身を伏せました。その後、何事もなかったのが家へ逃げ帰りました。

それから二時間あまり経った頃から、真昼というのに、急に夕暮れ時のように暗くなりました。それは原子爆弾の爆発による「きのこ雲」と広大な浦上のすべてが焼き尽くされて空高く舞い上がった粉じんが、西風に乗って諫早の上空を覆ったためでした。その薄暗さのなか、太陽がひときわ大きく、不気味な赤い風船玉のよう見え、こちらに向かって落ちてくるように感じました。近所の人みんなが、「新型爆弾が落ちてくるぞ」と口々に叫びながら、あわて防空壕に逃げ込みました。しばらくして空が少し明るくなり、錯覚ということが分かりましたが、錯覚と分かるまでの恐怖と緊張は忘れられない記憶です。

その日、大人たちは田畑で農作業をしていました。警防団の人たちがメガホンで「長崎から新型爆弾で怪我をした人たちが大勢諫早駅に運ばれてくるので、みんなリヤカー、戸板などの運搬用具を持って駅前集合せよ」と召集をかけて走り回っていました。召集の対象者は老人と婦人でした。当時、敗戦色が高まる中、元気な男性は猫も杓子も赤紙で召集され、外国の戦地へ送り出されていたからです。

午後三時過ぎ、私の母も息急き切って田んぼから走って帰るなり、すぐさまリヤカーに戸板を数枚積んで、諫早駅を目指して走り出しました。私も後を追い、駅前広場に着いたのは午後四時頃でした。駅前広場には多くの大人たちが集まり、駅からは、次々に目を背けたくなるような、見るも無惨な重傷者が次々に運び出されていました。手足の骨折だけという人はまだ軽い方で、全身が焼けただれ、体のいたるところにガラスの破片が突き刺さり、ドス黒い血を垂らしながら、かすれた声を振り絞って「水、水を飲ませて」と死に物狂いの表情で絶叫されている様子はまさしく「生き地獄」でした。子どもであった私には、あまりにも衝撃が大きく、全身がガクガク震えました。

駅前広場から北へ百七十メートルのところに、海軍病院の諫早分院（現・諫早総合病院）がありましたが、ここは軍の病院だったため、戦地で負傷した軍人さんで病室はほぼ満室ということでした。そこで、一番南の病棟の外にゴザを敷き詰め、上にはテントを張り、そこへ原爆のけが人はどんどん運び込まれていました。運ばれる途中、負傷された方が我慢できず、水をねだっており、必死に頼み込まれた運び手のおばさんが「飲ませてやりたいけど、飲ませれば死ぬと言われとつとよ」と涙ながらに答えていました。

「ひと口飲ませてー」と叫ぶ人もいましたが、声すら出せない人はより一層、苦痛の表情を浮かべておられました。子どもだった私にはどうすることもできず、もどかしさと悲しさで胸が張り裂けそうでした。

なかには子どもの負傷者も運ばれていましたが、悲しくてまともに見ることはできず、目を合わせないようにしておりましたが、運ばれてくる負傷者の方があまりにも多くなり、運搬の足が止りました。その時、私は、前にあった戸板に目が釘付けになりました。そこには、全身が焼けただれ、焼け残った肌着が皮膚に焼きつき、火傷でつぶれかけた目を一生懸命開こうとして顔が引きつり、手足をバタバタさせ、大声で泣こうにも声が出ない一歳前後の幼児の姿がありました。この子から目を離すことができず、高鳴る鼓動をじつと我慢しながら、涙を耐えていましたが、あまりの非情さに胸が張り裂け、我慢も限界となり、涙が止らなくなりました。当時は、「男子は泣くべからず」と教育を受けていましたが、この子の分まで思いつきり大声で泣きながら家まで走って帰りました。

その日の夕方は西からの風で、爆心地である浦上から、全てを破壊し、焼き尽くしながら、空高く舞い上がったキノコ雲により、灰や粉じんが半径三十キロメートルにわた

り降り注ぎ、二十五キロメートル離れた我が家の庭や周囲の畑にも雪のように降り積まりました。午後八時頃、昼間目撃した悲惨な負傷者の地獄絵が頭から離れず、気が重いうえに、家の中は蒸し暑かったので、私は、庭に出て降り積もった灰の上にゴザを敷き、その上に横になりました。よく大人の方が「心身ともに疲れた」と言いますが、その言葉を味わいながら、ひと眠りしようとまぶたを閉じました。その時、何か異様な音か地響きが聞こえてきました。

西風の影響か、高かったり、低かったりする音で、今まで聞いたことがないものでした。その音を確かめたくて、音の方向をたどりました。その音の発生源は、負傷者のテントの中でした。「苦しい」、「水」、「痛いよー」など、苦し紛れの絶叫が何百人もの口から発せられるときの地響きのような集合音でした。そこでは、看護婦さんが忙しそうに立ち回っておられました。私は、どうしても確かめたかったので、怒られるのを覚悟して看護婦さんに「ねー、ねー、看護婦さん。なんで水を飲ませられんとねー」と尋ねると、丁寧「この新型爆弾が爆発するときの温度は、三千度から四千度あるとよ。その高い熱でのどや気管に大ヤケドを負っているから、水を飲ませるとたちまちに水ぶくれができて、息ができなくなり死ぬとよ」と説明してくださいま

した。納得し、「そうね。どうもありがとう」とお礼をいい、気がかりな問題が一つわかったので、少し気持ちが軽くなるのを感じました。

夜中十一時頃、家に帰りました。母も一時間ぐらい前に帰ってきたとのことで、「大変な仕事だった」と寝言のように口ごもりながら畳の上に大の字になっていました。私も眠ろうとしましたが、なかなか寝付けず、うたた寝の状態で夜が明けました。

翌日十日は、朝から本明川沿いに死体の運搬が始まっていました。海軍病院の負傷者テントから七百メートル余り離れた天満町に市営の火葬場がありました。そこで火葬するための運搬でした。日増しに亡くなる人が増え続け、運ぶ間隔が縮まっていき、運搬手段も、リヤカーから車力、牛車から馬車へと大型化していきました。

二十日余り経ったある日、用事があって火葬場の下を通りかかりました。火葬場から約四十メートル余り離れた場所にか高く積んであり、そこに馬車が三台停めてありました。なにか高く積んであり、近寄ってみると一台に二十人から三十人の死体が積み重ねてあり、上にゴザをかけてありました。異臭がひどく、横の土手が黒く霞むくらいにハエがたかっていました。風上に五十メートルくらい離れたところ

に馬子と他の馬がいたので、その訳を聞いてみると、「ハエが多いので馬が暴れて危ないため、離れた場所で死体の積込みの順番を待っている」とのことでした。

火葬場では運び込まれる死体があまりにも多く、処理できないため、裏の畑に縦・横二メートルあまりの大きな穴を三カ所掘り、そこへ薪、死体、薪の順で積込み、上から廃油をかけて燃やし、焼き終わったらお骨の整理を済ませ、次にまた入れ替えて火葬。この繰り返しで、二十四時間フル稼働で一カ月余り要したようでした。「その苦労は携わった者しかわからない。」と火葬作業を行われていた方が話しておられました。そのような中、当時、諫早に三千人あまりの負傷者が運び込まれ、その七割くらいの方が亡くなれたと聞いていましたが、実際は四千人あまりが運び込まれたとの集計記録が公表されているようです。なお、市内の数箇所に分散し負傷者が収容されていたため、死亡された方たちは、近くの墓地や適当な広場で火葬が行われたとの話もあります。

私の妻も当時、長崎市の水の浦町に両親と住んでいましたが、そこで八歳（小学校三年生）の時、被爆しました。被爆後、緊急避難のため、両親の実家がある三重檜山まで、近所に住んでいる人たち十五人と歩いて帰っている途中、

浦上川沿いを通っていると、川に飛び込み、泳いで反対側の岸をよじ登った方たちが、鴻で汚れ、ずぶ濡れの衣服のまま、怪我による出血とヤケドにより倒れ込んでおり、助けを求めて足にすがりつかれ、一緒に歩いてきた大人たちがそれを振り切り、「ごめん。ごめんね。」と繰り返し、逃げながら通り抜けたとのことでした。その時は他にどうすることもできなかつたそうです。

ようやく被害が大きかった浦上を抜けましたが、そこから檜山まで十四キロメートルあまり歩かなければならず、途中で頭痛や腹痛ができて、そのうち、発熱と下痢に襲われ、苦しみながら死に物狂いで夜中の道を歩きとおし、ようやくたどり着いたのは翌朝の六時だったそうです。みんな息も絶え絶えで、抱き合って泣いていたとのことでした。その記憶は死んでも忘れないと話していました。

妻とは昭和三十三年に結婚したのですが、妻は被爆から二年後に甲状腺がんを患い、切除手術を行っていました。甲状腺がんは、原爆症の初期症状と言われており、それを私に話してくれたのは結婚から五年を経たことでした。それまでの十数年間、世間の噂で「被爆者は白血病で倒れるか、結婚しても奇形児が生まれる確立が高い」などの被爆による後遺症の事例を聞くにつれ、本当に生きるこ

とがいやになることもあったそうで、その心境について涙を流しながら話してくれました。「被爆者」と聞いただけでショックを感じることもあったそうです。このように被爆者が自分の責任のように思い込んで悩み続けていたのかと思うと、可哀想でなりませんでした。

昭和三十四年に長女を出産したのですが、五体満足で生まれわたが子の体全体を確かめながら、涙を流して喜んでいました。その後、次女、三女をもうけ、子どもたちは無事成長していきました。昭和四十四年、妻の体調が悪くなり病院を受診したところ、体の一部にがんが発見され、手術を受けました。昭和五十五年に私の古里である諫早市に新居を構えました。その後、妻は健康を取り戻し、日本ハム諫早工場に元気に勤めていましたが、平成七年の初夏、体調不良のなか、両腕に発疹が出て、日増しにひどくなりました。そこで、近くの皮膚科で診断し、投薬を試みましたが薬効が現れず、院長から諫早総合病院で精密検査を受けるようにと紹介状を渡されました。翌日、諫早総合病院で約四時間にわたる検査を受け、その結果が言い渡されました。それは、聞きたくもない「骨髄性白血病」との宣告でした。ある程度予期していましたが、痛撃なショックでした。病院からは「この病は、抗がん剤の薬効で完治する

ことは皆無で、人によって異なるが、長くて三年、短くて六カ月と理解しておいてください。」と説明を受けました。

妻には、細部についての説明は伝えませんでした。安心したような表情で私を見つめました。励ます言葉が思い浮かばず、つらい気持ちを隠すのが精一杯でした。抗がん剤の投薬が始まったとたんに妻は脱力感を訴え、食欲もなくなり、栄養剤の点滴が増やされました。二三日経った頃から頭髮が抜け出し、間もなく丸坊主になり、毛糸の帽子で頭を隠していました。苦しみながらも、よほど頭が気にかかる様子でした。それから一カ月あまりの間、生死との苦しい闘いに必死に耐え抜き、ようやく痛みが和らぎはじめ、日ごとに回復へ向かい、笑顔が見え、冗談も言えるようになり、このまま完治するのではないかと思えるように元気になりました。

年が明け、二月に元気になった妻に、主治医から三日間の外泊許可が出ました。その時の妻の喜ぶ顔は今でも私の脳裏に焼きついています。三日間、家に帰れた喜びを妻とともにかみしめていました。楽しい時間は早いもので、あっという間に三日間が過ぎ、「また病院に行かんばとね」と言葉を残して、病室に戻りました。それから一カ月あまりして、また発疹ができました。主治医から「抗がん剤の再使

用はどうしますか？」と相談を受けましたが、「あの苦しみは二度とさせたくない」と思い、断りました。それから容態が少しずつ悪くなりましたが、「抗がん剤の苦しみより耐えやすい」と言っていました。痛み止めの点滴だけを続けていきましたが命の限界でした。主治医並びに看護婦の皆さんの必死の努力も虚しく、平成八年四月五日、静かに目を閉じ、他界しました。

私は、主治医に「妻は被爆者ですが、三度もがんになったのは、原爆と関係があるのでは？」と尋ねましたが、「関係ありません」とのことでした。私は釈然としませんでした。なぜなら、妻が息絶えた諫早総合病院は、原爆による負傷者を収容した海軍病院の跡地に建てられた病院であり、何か因縁めいたものを感じたからです。妻のがんによる苦しみと、原爆により負傷された方の苦しみが重なり、人々に耐え難い苦痛をもたらす原爆に対し、胸がかきむしられるような怒りが込み上げてきました。

私は現在七十八歳になりましたが、二度と原爆による被害が起こらないために、地球上のすべての核兵器廃絶と世界平和を目指し、私の体験を一人でも多くの人に語り継いでいきたいと思っています。

(平成二十五年五月寄稿)

『原爆が落ちた日』

吉川 湊子^{ていこ}さん(小長井町)

昭和二十年八月九日「長崎に原爆が落ちた日」の私(当時二十歳)の体験についてお話しします。

自宅は長崎市でしたが、昭和二十年四月に小長井の叔父さんの家に疎開していました。毎日朝五時五十分、小長井から汽車に乗って長崎まで通勤し、弟も学徒報国隊として工場行きでした。私は、三菱重工長崎造船所に勤務しており、会社に着くとすぐ「空襲警報」毎日がそうでした。その日も解除になるまで横穴(防空壕)に入っていました。やっと横穴(防空壕)から出られ、仕事のため第二事務所(造機設計部)にいました。

十一時二分、光線が「ピカッ」と光り、すぐ「ドカン」とすさまじい音がしました。ロビーにいた十人ぐらいの人が、訓練どおりみんなその場で目と耳をふさぎ、長くなつてうつつ伏せになりました。みんなが重なり合っており、私は下の方だったので起き上がるのが大変でしたが、頬ほおに刺さったような気がしました。この時は空襲警報が解除され、警戒警報中だったので、外の現場で仕事中の人は、突風の影響で火傷されたと思います。

事務所に帰ってみると机の上には何もなくなっており、書類や母が作ってくれた弁当も飛ばされて何も見つかりませんでした。その二・三日前、上司が広島に新爆弾が落ちたそうだと話されていたのを思い出しました。

隣の席で一緒に仕事をしていた同僚の活水女学校五年生（現在の高校二年生）の吉田さん（学徒動員で働いていた）が、すぐに「私の家において」と言ってくれ、二人で厚い防空頭巾をかぶり、水筒、大豆のいり豆の袋を肩に掛け、専用の船に乗って大波止まで行きましたが、その間、また爆撃がありはしないかと心配でした。

船を下りた後、県庁の坂は上れなかったので、江戸町を回り小島へと急いで行きました。吉田さんの家に着いてみると、崇福寺（中国寺）の上の方（高台）だったので、少しホッとしましたが昼も食べられませんでした。その頃は配給だったので、余分の食糧はなかったと思います。段々と日が暮れていき、家の窓から外を見ると長崎の空が火の海になったように赤く染まっています、私の家が焼け落ちるのも見え涙が出ました。

翌朝早く、泊めてもらった吉田さんにお礼を言っ、水だけでもらって家を出ました。私は、防空頭巾をかぶり、母が作ってくれたマスクを着けて、小長井へ帰る元気を出し、

長崎駅へと急ぎましたが駅は無くなっていました。両親がどんなに心配しているだろうと思うと、心ばかりが急いでいました。その付近の情景は見られるものではありませんでしたが、線路を歩くしか道はないと思い、勇気を出して枕木の上に足を乗せてしっかりと歩きました。

線路の両側には真っ黒に焼け焦げた人体があり、中には弟がずがるように兄の足をつかまえたまま横たわった姿もありました。馬もそのまま倒れていたのを覚えていました。浦上を通り大橋の鉄橋がありましたが、そこを歩くのが怖かった記憶があります。

その川の辺りで「テルコ」、「ケイコ」と娘を探す人の叫ぶ声がし、その声が、みんな私の名前「テイコ」と聞こえ、急いで帰らなくてはと思いました。歩いていると、私の前にはお尻が半分焼けただれた男の人が歩いており、見るにみかねていましたが、どうすることもできずに黙って後ろからついて行きました。その時の光景が今も脳裏に焼き付いています。

ようやく道ノ尾駅に着くと列車が停まっております、中を見ると怪我人がいっぱい網棚まで乗っていました。「水を、水を」と言う人たちが、可哀想とは思いましたが、水を飲むと命が亡くなるのではないかと思ったりしました。そんな

中、小長井に疎開している遠い親戚の江口さんとぼったり会い、涙が出るほど嬉しかったです。江口さんから、道ノ尾駅では乗れないから長与駅まで歩きましようと言われ、また元気を出して歩き長与駅でやっと乗ることが出来、本当にホッとしました。途端にお腹がスカスカになりましたが、もうすぐ小長井だと思いましたが元気を出しました。

やっと小長井駅に着き、駅のホームには母が待っていてくれました。寝たきりの父の看病の傍ら、汽車の着くたびに駅に来ていたのだろうと思うと嬉しくて涙が出て、心の中でありがとうとつぶやきました。偶然にも、同じ汽車に乗り合わせていた弟も降りてきて、二人の子どもが無事に帰ってきたことが、どんなに嬉しかったことだろうと今にしています。

三菱重工長崎造船所に勤務する前の事ですが、女学校を卒業した後、昭和十七年五月から二年間、内地採用になり友達の金子貞子さんと二人、上海の華鉄に就職しました。その後、何があったか分かりませんが、金子さんは私の知らない間に日本へ帰国し、兵器工場に勤めていたそうです。金子さんは、工員さんの弁当を取りに長崎の大橋まで行った帰りの電車の中で被爆したようで、お母さんが洋服の柄で金子さんを探し出し、その場ですぐ火葬されたそうです。

終戦になり、仏前にお参りに行ったときに話されておりました。

あの時、空襲警報が出ていたらこれほど沢山の死傷者は出なかったのではないかと、今でも悔やまれてなりません。戦争は人殺しです。二度とこんなことがあってはならないと思います。

現在は、両親も兄弟も亡くなり、私は八十九歳になろうとしています。被爆者の私がかんなに長生きさせてもらい申し訳ない気がします。せめてものお勤めとして、先に逝った方々を偲び、毎日朝夕は感謝の意を込めて仏前で手を合わせています。

毎日が、感謝、感謝の生活です。

(平成二十六年八月 寄稿)

『青天の霹靂』

—諫早史談第四十一号（平成二十二年三月発行）より—

古賀 力（本野町）

私の生涯に於いて体験した事象の中で、このことだけはいつかは書き残し、後世の人に伝えなければと八月九日を迎える度に思いながら、六十年余りの年月が経ってしまいました。しかし、現在の日本の内外情勢を見ると先人が残した「歴史は繰り返される」という言葉が私の頭の中で激しく点滅し始め筆をとることにしました。

昭和二十年八月九日、その日の朝は家族が長崎から移り住んでいた大村の家から、学徒動員先の工場に出勤するため汽車で長崎に向かいました。汽車が浦上を通過するとき、本来ならばそこから出勤したはずの祖母と住んでいた城山住宅を数時間後の地獄を知る由も無く、乗降デッキの風に当たりながら眺めていました。丘の上に建つまだ新しい護国神社と白黒の迷彩色を施された城山国民学校の姿が、その日に限って妙に印象的でした。

県立長崎中学三年生であった私が学徒動員により勤務した工場は、鳴滝町の県立長崎中学校の特別教室を改装して造られた三菱造船から分散疎開した工場であり、製品の検

査係に配属されていました。その日は、午前十時頃に飽ノ浦の三菱造船本工場に製品を運搬するようにと指示があり、鉄車輪の大人車に製品を積み出発しました。工場を出た私達検査係六名は、誰が言い出すともなく持っている弁当を早う腹に入れて走ろうと、当時生徒の中で流行りの早弁を食べることで話が決まりました。工場を出発したとはいえ、まだ学校内に居た私達は、門衛の人に断りを言って校門の所で車座を作って早弁を食べたのです。そこで費やした時間が運命を分けるとは知る由も無く、大人車の鉄車輪の音を響かせて新大工町の坂を駆け下り、飽ノ浦の本工場に向かいました。諏訪神社前から馬町を通り勝山国民学校から右折し、次いで八百屋町から中町方向に左折し、ちょうど家屋強制疎開で辺り一面が空地になった中町天主堂の近くにさしかかった所で、私達は小休止をとりました。疎開家屋の跡にまだ水が出る水道蛇口があり、その水で喉の渇きを潤おしたり、上半身裸になり水で濡らした手拭で汗を拭く者もいました。

その時です。北側上空に爆音が聞こえ、振り仰いだ山の上に「三個の白いもの」が高低差のある状態で浮かんで見えるのを見たのです。頭の中を「あれは？」という疑問符が過ると同時に青白い閃光せんこうが走り、熱いと感じるとともに一時

は全く視界を失ってしまい、その後僅かの間を置いて一瞬身体が浮き上がるような感触とともに、猛烈な風圧が押し寄せ、辺り一面が土埃で薄暗くなりました。

その時に私がとった行動は、未だによくわかりません。今までに経験したことがない閃光と風圧に、戦慄（せんりつ）（恐ろしさで震えること）と恐怖感に襲われた身体は、ただ反射的に溝など低いところに伏せていたのだと思います。学友達と長崎駅に向かうため、途中から同行していた二年生達が無事であることが確認できると、先ずは安全な場所に避難しようとして大人車を曳いて、落ちた瓦礫や半壊の家で埋まった道を夢中で走り、現長崎歴史文化博物館敷地に残る横穴防空壕に避難したのです。

しかし、時間が経過するとともに次々と負傷者が担ぎこまれ、壕内は一杯になり、元気な者は壕から出るように言われ、状況が判らない不安な気持ちのまま壕を出て鳴滝の工場まで走り帰りました。校門を入ると、学年主任の森永種夫教官が立っておられ「無事だったか、よかった、よかった」とほっとした表情で迎えられた。

浦上方面の詳細は判らないが、甚大な被害が出ている模様で、「今後のことは追って連絡するので本日は帰宅して下さい」との指示があり、帰宅することになりました。そこで

私達は、喜々津より以遠に帰宅する者達と矢上経由の徒歩で帰るか協議した結果、西山から山越えし、道ノ尾方面を目指すことになったのです。

まず、西山水源地の手前から金毘羅さんに登りはじめたのですが、稜線（尾根）近くになると浦上方面から脱出してくる負傷者が目に入り始め、山頂近くでは当時設けられていた高射砲陣地の側に負傷した兵士の姿がみられました。そこからは、稜線伝いに穴弘法さん付近を通り坂本町の上にてたのですが、その間眼下に見た浦上方面一帯の状況は忘れることはできません。

朝、汽車から見た城山地区は、それと分る城山国民学校を除いて建っている建物はなくなり、一面が家の土台で区画された更地のような光景でした。また、途中は衣服も無く火傷を始めさまざまな傷を負い、一様に黒ずんだ身体で横たわる沢山の人々を見るようになりました。空は薄暗く夕立の降り始めのように雨が落ちてきたのもその時だったと記憶していますが、雨とともに落ちてくるごみに、宣伝ビラらしきものも混じっており、それを拾ってみると『日本国民に告ぐ即刻都市から退避せよこの爆撃は一発の爆弾でB29、二千機による爆撃効果に相当する云々……』の文が記されており、その日の朝刊の一面に書かれていた

『広島に新型爆弾・・・落下傘で投下・・・甚大な被害』と書かれた見出しの文字と、炸裂直前に見た「白い三個の落下傘」が頭を過ぎりました。これは大変なことが起こったのだと恐怖と絶望、その他諸々の感情が押し寄せ、一同黙りこくって尾根伝いの道を急ぎ、倒壊して燃えかけた農家から助けを求める声に耳を塞ぎ、神学校が火を噴いて燃えるのを見ながら、現在もある三菱造船船舶試験場のところに辿り着きました。

完全に倒壊した三菱兵器製作所の方を見ますと、後を振り向き振り向きしながらこちらに小走りにくる女生徒がいて、そばまで来ると道路にへたと座り込んでしまいました。長与まで帰ると言うのでその女生徒を交代で背負い、付近の山の立ち木が盛んに燃える住吉のトンネル工場付近を見ながら、浦上水源地を経て線路沿いの道路を長与駅にようやく辿り着くことができ、女生徒とは氏名と校名を聞かないまま別れました。

駅周辺は大混乱で、救援列車には重傷者以外は乗せないと外に出されてしまい、プラットホームで待つことにしたのですが、動き出した列車の機関車は逆向きで、炭水車が先頭になっていたのとつきの判断で炭水車の上端に飛びつき、石炭の上に乗ることができたのです。薄暗くなって

きた沿線には、たくさんの人が不安そうに列車を見る姿があり、トンネルや跨線橋（鉄道路線をまたぐ橋）では皆が声を掛け合って注意し、暗くなった頃に諫早駅に到着しました。そこで大村へ帰る私は学友と別れ、同じ大村まで帰る三菱の工員さん二名に同行し、徒歩で大村市本町の家に午前0時を過ぎた頃ようやく帰りついたのです。玄関で待っていた母が飛び出してきて、身体じゅうをなでまわしながら「怪我はしとらんね、わあーこの臭いは何ね」と言いながら服を脱がせてくれました。巻き脚絆を解くと、細かいガラスの破片や塵がズボンの裾から出てきたのに母は驚きの声を挙げ、夢中でまったく気がつかなかった私自身も、あらためて身体の隅々まで怪我が無いか確かめました。その後、夜が明けるまでの浅い眠りをとった私は、城山の祖母と叔父一家の安否を確かめるため、長崎へ向かった父と伯父の後を追って、八月十日の午後から大叔父と共に再び長崎へ向かいました。

親が陸軍の将校寮を経営していた関係で、長崎市桜町まで軍用自動車に便乗できた私達は、西坂町から松山町を経て城山に入りましたが、途中の惨状は今ここで筆に表わせるものではありません。特に、下の川電停横の歩道上にいた「乳飲み子を胸の下に、幼い子供を脇に抱え蹲るよう

して黒焦げになった母子」の姿は、脳裏から消えることはありません。城山では先ず、護国神社東側の崖下に造られていた隣組横穴防空壕に行きました。そこで祖母や叔父と同じ隣組の服部アサノさんをはじめ、即死を免れた僅かの人達と会うことができました。被爆直後に叔父一家は生存していて、近所に出かけていた叔父と家に居た叔母と子供二人は別行動になり、叔母は「大村に行く」と言って城山を離れ、叔父は上半身ひどい火傷を負いながらその後を追ったことが分かりました。服部さんからは、「娘の県立長崎高等女学校三年で三菱兵器工場に動員されていた澄子さんが帰らないので安否を確かめて」と頼まれ、そこを後にし、安否の分からない祖母と叔父一家の搜索のため、城山一帯の死体を一体ずつ確かめながら歩き廻り、城山国民学校下の横穴防空壕では、壕の奥に死者がまるで壁のように折り重なって亡くなっていたため確認が出来ない状況でした。浦上川の川原では、沢山の死者と重傷者が溢れ、搜索して歩く私たちの足にしがみ付こうとする人もありました。続いて、長崎駅前と大橋電停の間を往復するなど搜索を続け、夜明け近くに赤迫六地藏前を経て道ノ尾駅に向い、大勢の負傷者や死者を確認しながら駅に着きましたが、駅前の広場は負傷者と死者で一杯でした。叔父一家の被爆直

後の情況を知ることが出来ましたが、その後の足取りは攫めることが出来ませんでした。二昼夜に及ぶ戦場にも勝る体験で、私の心身の疲れは極限に近く、戦場経験がある大叔父もさすがに疲れてしまい、そこで仮眠を取り、一度帰宅してから再度搜索に来ることとして、救援の貨物列車で八月十一日の午後大村に帰りました。

一昼夜の搜索で見つからなかった叔母と子供二人は、八月十二日に外傷がほとんど無い状態で大村駅に着き、私宅に収容することが出来ましたが、二歳の従弟、次いで四歳の従妹と幼い者から放射線特有の症状で亡くなり、叔母は最後まで「祖母ちゃんを助け出せずにごめんなさい」と繰り返しながら亡くなりました。また私には「他人は薄情やよ、赤迫の六地藏の前で座り、この小さい二人だけでも大村へ連れて行ってくださいと頭を下げて頼んでも、一人の人も立ち止りもせんじやったとよ」と話す叔母でした。私自身も炎の中に助けを呼ぶ声を聞きながらどうにも出来なかつたり、縫すがりつく手を避けたりしたことが、未だに心の隅すみに疼うずくものとして残っています。

叔母の話から、台所で昼食の仕度中だった祖母は、焼け跡から掘り出しましたが、完全に白骨化していなかったため茶毘だびに付し連れ帰りました。その後、八月十五日の終戦

をはさんで、長崎市の新興善国民学校その外諫早市内から川棚町まで、あらゆる負傷者の収容場所と、死亡者で氏名が確認された者の名簿揭示箇所を、叔父の所在を求めて親族挙^{こそ}って探しましたが、とうとう行方不明のままです。

城山の隣組横穴防空壕で娘の澄子さんが帰宅しないので、安否の確認を頼まれた服部アサノさんは、諫早に収容され、一時仲沖町の民家に預けられた後に川棚の方に転送になったと記憶しています。後日、娘の澄子さんは、九日に三菱兵器製作所大橋工場で爆圧死と死亡確認者名簿に記載されているのを知ったのですが、私の体調不良と終戦による陸軍将校寮の閉鎖で、急遽立ち退かねばならない家の事情が重なったため、服部さんに知らせることが出来ないままになつてしまいました。このことも心の隅に消えることなく慙^{ざんき}愧の思いが残されたままです。

九月に入って諫早市上大渡野町の仮住まいに移り、私の町籍も昭和二十年九月六日諫早市長より罹^{りさい}災証明の発行を受けて手続きを終わり、そこから県立長崎中学まで通学することになりました。城山の焼け跡には度々立ち寄り、叔父愛用のパイプを探し当てて遺骨替わりに持ち帰ったり、従業員だった人の遺骨を収容したりしました。その後、進駐してきた米軍が現在の野球場、陸上競技場一带に飛行場

を建設するとき、まだ茶^た毘^びをしたままの白骨の山をブルドーザーで押し潰し転圧するのを見て怒りで身体に震えが走り、目の前が真つ暗になったこともありました。

毎年八月九日は、一家揃って平和公園の無縁仏のお堂に参拝し、時には護国神社東側の崖に痕跡を残す隣組横穴防空壕跡に行き、当時のことを子や孫に伝えることにしています。これが亡き人達への最大の供養と思うからです。

(平成二十六年十月寄稿)

『早弁で助かった命』

田代 一弘（多良見町）

昭和二十年四月、旧制中学三年（十四歳）になった私は、学徒報国隊として三菱長崎造船所に動員された。しかし、次第に激しくなる空襲に備えて企業は工場をあちこちに分散して操業するため、私たちの学校校舎二棟を工場に改造し、そこで特攻艇のエンジン部品の加工をしていた。

当時、工場のシフトは三交代二十四時間稼働していた。私は、喜々津から汽車で通学していたため、交代勤務が来ず工作機械を扱う事はなく、検査発送係に配置されていた。しかし、検査とは名ばかりで、主に本工場と学校工場間の材料や加工品の運搬にあたっていた。

八月九日は、私たち汽車通学者の当番になっていたが、朝からの空襲警報で外へ出ることができず、控室で待機していた。十時頃になって警報が警戒警報に変わったこともあり、すぐに出発するよう指示を受けたが、朝から出鼻をくじかれたこともあり、なんだか班員全部ぐずぐずしていた。いざ出発となったが、弁当を持っていくのもいやだから、臨時飯をしてから行こうと話はまとまり、監督の先生も黙認の早弁をすませて出発した。

後に思い返すと、早弁で十分以上も遅れて出発したおかげで全員命拾いをしたのだった。班員五名と浦上方向の自宅に帰宅するという一年下級生の二人を加えて七名の仲間は大八車を曳いて、いつものコース、新大工町から馬町を抜けて中町通りに差し掛かった。その時、近くの家のラジオの声が聞こえたので立ち止まり、耳を澄ますと「島原上空を敵機が通過」と放送していた。「ちょっと待て、敵機が来ているらしい」と言ってみんなで空を見上げた時、小さな白いものが見えた。一人が「あの白い落下傘みたいのはなんや」と言い、他の一人が「あれは日本の阻塞気球（そさい）（気球と地面をワイヤーで結び航空機の針路妨害をする気球）やろ」と言った途端に「ピカッ」と閃光が走った。

私は「退避」と叫んで、すぐそばの側溝に飛び込んで伏せた。溝に飛び込むと同時に、「ドーン」ではなく空気を引き裂くような異様な音がし、「ゴウー」という台風のような風とともに回りが薄暗くなった。しばらくといてもほんの一分も経っていないと思うが、顔を上げてみると、周りにはゴミやガラスや瓦の破片などが散乱していた。「これはすぐ近くに爆弾が落ちたな」と一瞬考え、「おーいみんな大丈夫か」と呼ぶと、三人の仲間がすぐそばの路地から出てきたので一安心した。大八車はどこかと探すと、三十メートル

ルくらい先の電柱にぶつかっており、梶棒の中の三君は呆然と立っていた。他の二人は、そばの店に飛び込んだよう
で、その一人が手首の上をガラスで切ったらしく、血が滲
んでいた。他はみんな無事だった。前進するか引き返すか
みんなで話し合ったが、被害の様子がわからないためT君
の提案で、すぐ近くの提防空本部へ行ってみると、屋上の
監視檣にいた監視員が、目をやられ全く見えなくなったと
聞いた。「どうやら、三日前広島に落とされた新型爆弾のよ
うだ」と言うので、学校へ帰ろうということになった。

下級生の二人は、自宅へ帰るといのでここで別れ、私
たちは大八車を曳いて鳴滝の学校工場へ戻った。途中の道
路は、瓦や柱が道をふさいでいるところもあったが、なん
とか学校に帰り着きもう二時近くになっていた。担任の先
生や工場の上司等が、大変心配してくれたようで私たちの
無事を喜んでくれた。

それから暫くして、校舎の高いところに登って町の方を
見ると煙が見えた。市役所が燃えているとの情報が入って
きた。担任の先生から「君たちは家も遠いことだし、汽車
も動いているかわからないから帰宅しなさい。」と言われ、
喜々津以遠の四人は「矢上經由で歩こう。」と言ったが、長
与のU君が「一緒に行こう。」と言うのと道ノ尾まで列車が

運転しているとの情報もあったので、片淵から西山を越え
て本原へ向かった。

途中ひらひらと紙のような灰がたくさん空から降ってい
た。西山の峠を越えて浦上の一帯を見渡した時は驚いた。
はるか向こうに見える城山や油木の方は、焦げた色に変わ
りすぐ下の神学校（現在はフランシスコ病院）は、真っ黒
い煙と炎をあげていた。下の方からこちらへ登ってくるほ
とんどの人は、着物が破れ、手や顔に火傷を負っていた。

神学校のそばは、煙のため通れそうにないので畑道を迂回
することにした。二郷橋まで、いくつもの畑を越えて行っ
たが、この急斜面の畑には、たくさんの人が火災から逃れ
てきていた。畑と畑の間に細い溝のような道路があり、そ
こは少し日陰になっているので、火傷をした人たちが折り
重なるようにして休んでいた。この辺はカトリックの信者
が多く、そのようになりながらも溝の中でお祈りをしてい
る人を見かけた。私たちは、二郷橋を渡って住吉に出るつ
もりだったが、橋を渡ったすぐ前の人家が、火災のため道
路を通れず、やむを得ず浦上水源地を越えて行こうと右折
をした。道ノ尾と長与の分かれ道に來た時、長与のU君が
「道ノ尾に行くも長与に行くもあんまり変わらんばい。」と
言うので「それでは長与に行くか。」と長与駅まで歩き、よ

うやくたどり着いてホッとした。駅で状況を聞くと「列車は動いてはいるけど何時に来るかわからない。」とのことで、がつくりして座り込んでいたら、まもなく列車が来た。でも、列車は昇降口まで負傷者があふれるように乗っており、負傷者以外は乗れないと言われたが、どうしても家に帰りたい私は、機関車の信号台にしがみついて乗せてもらった。どうにか喜々津駅に降り着いた頃には、すっかり日が暮れて暗くなっていた。

翌十日は、登校するかしないか迷ったが、父が「勤務先の海星中学校へ出勤したいので一緒に行こう。」と言うので家を出た。喜々津駅ではかなり待たされたが列車に乗り、道ノ尾で下車し長崎駅を目指して歩き出した。

当時、大橋の手前までは家が少なかったもので、道路の障害物もたいしてなかったが、大橋の近くになると、両側の家はすべて炎上し、まだ柱などが燻り続け、足下には黒焦げの遺体があちこちに散乱していた。浦上川の河原には、半裸状態の遺体がたくさん折り重なるように並んでおり、路面をたどっていくのが大変で、太陽の照りつけと地面からの火災跡の熱気で息苦しいほどだった。しかも、ものすごい異臭が立ち込め、何度も引き返したいと思った。ちょうど現在の平和公園の近くでふと立ち止まり、左右の景色

を見たら、金毘羅さんも右の稲佐山も頂上近くまで黒焦げで煙が上がっていた。やつとの思いで井樋の口まで来たら、陸軍の一隊が道路を片付けていた。ホッとして人心地になったものである。学校にたどり着いた時は、もう十二時近くになっていた。

その日登校した市内の学友たちは、在校生の安否確認のため被災地域を歩き回っていたようだが、遅れて登校した私は何もすることがなく、帰宅してよろしいとのこと、帰ることになった。しかし、あの浦上をもう一度歩く気になれず、矢上経由で歩いて帰った。日見峠を越えると、市内から郊外を目指す人たちがたくさん歩いていた。私は、五時間近くかけてようやく喜々津の家まで帰った。家に着く前に、喜々津小学校の近くに二年下のK君の家があったので立ち寄ってみると、彼の姉さん（私と同じ年だったと記憶している）は、大橋の兵器工場に動員されていたのに、かすり傷程度で無事に帰ってきたと聞いて、互いに喜んだものだった。しかし、二カ月あまりしてから亡くなったと聞き、やはり原爆のせいかと改めて怖くなったし、聞いてみる。

このように、その時は大した怪我もなかった人が、後になって亡くなったり、後遺症が出たりという話を見聞きし

たが、自身もかなり健康には気をつけて生活してきたせい
か、なんとか八十過ぎまで生かしていただいた。

あの時、早弁をせずつに出発していたら、丁度稲佐橋あた
りに差し掛かっており、爆風をまともに受けていたと思わ
れ、今の私はなかったと思う。

「早弁のおかげで助かった命に感謝」

(平成二十六年十一月寄稿)

『原子野を駆けて六十六年の想い』

―平成二十三年十二月三日宮城県仙台市宮城野高等学校

土曜ゼミナールでの講話より―

今白 卓司 (高来町)

一・原爆投下 (昭和二十年八月九日)

昭和二十年、長崎中学校二年生だった私は、学徒動員の
ため報国隊として学校工場で働いていた。

当日 (八月九日) の朝、学校工場へ出勤するため自宅の
諫早市高来町湯江 (疎開先) から長崎市 (鳴滝町) の現場へ
向かい、着いたのは午前九時頃だった。そこで現場主任か
ら、私は非番になっていることを知らされた。汽車の時刻
の事もあり、帰宅の時間を調整する為、級友の宮内君宅 (銅
座町の宮内歯科) に行き、十二時三十分の汽車で帰宅するつ
もりで、休憩室でくつろいでいた。十時過ぎ頃、警戒警報
が出ていたがそれも解除され、昼弁当でも早めに食べて帰
宅しようかと思っていたその時のことである。

突然、「閃光が走る……」一瞬、青白い閃光に驚くと同時
に「バサッ」と、まわりの窓硝子や壁が爆風によって打
ち当たってきた。眼の前にある応接机の下へかくれる暇さえ
なかった。ランニングシャツ一枚でいた私は、ガラスの破

片で背中に少し傷を負ったが大事には至らなかった。

外を見ると、付近の店はほとんどが大破し、街中は負傷した人々で右往左往する姿があった。これは爆撃による衝撃だと察した。路上を通行している人達は、防空壕へと走り込む大勢の姿があった。当時は、戦時態勢の中、市内の車道や軌道の両側に幾つも防空壕が掘られていたのである。

一時間ばかりして、友人の兄が外出先から帰宅してきた。大波止附近で被爆しており、半袖シャツの先の両腕と首のまわりが、閃光の熱で火傷し水泡が出来ていた。外に居た人達のほとんどが、閃光と爆風で大変な火傷を負ったのである。長崎駅より浦上方面にかけては、上空一面黒煙に包まれ、兵器工場や浦上の町全体が全滅の状態だと聞かされた。

帰宅が不可能となった今、徒歩での帰宅を考えた。再度空襲をさける為には、安全な田舎への避難が良いと思い、友人兄弟を連れて湯江の自宅まで帰ることにした。徒歩にして歩くも四十キロメートルの行程である。

夕方五時頃、私と友人兄弟の三人で諫早へ向かって日見街道へと出発した。途中、長崎市内では数人の同級生と会い、お互いの無事を確かめ合った。被災した人達が続々と長崎市内を離れる姿があった。長崎から日見街道は、避難

する人の波、荷物を積んだりヤカー、大八車、馬車など遠々と深夜まで続く有様であった。道の両側には、歩き疲れた子供連れの人達が路上に横たわり休む姿や、一時仮眠を取る人の姿もあった。

何時間くらい歩いた頃だろうか。夜十時も過ぎた頃だったろうか、歩き疲れと睡魔におそわれ、喜々津駅で休憩を取る事とした。駅舎は案の定、すでに満員で床に新聞紙を敷いて泊まる避難民で一杯だった。私達も駅舎の片隅で一晩を明かした。

翌日、一番列車が喜々津駅に到着したのは、午前九時過ぎ頃だった。駅に泊まっていた人達は、ホームで列車を待ったが、到着した列車の車内を見て驚いた。負傷者で満席となっており、お互いをなぐさめ合う姿の中に私達は入って行けず、昇降口に立ったまま諫早へ向かった。

諫早駅に着くとホームには、婦人会の人達が救護や炊き出しの活動を手際よくおこなっていた。すでに長崎の被災の様子が伝えられていたのであろう。救護作業のかたわら、下車して来る人々に長崎市内の状況を尋ね合っていた。列車が止まるたびに、家族の安否を確かめ合う大勢の人達が駅につめかけていた。

当時は、県内各地域から、多くの人達が造船所や兵器工

場などへ微用工（四十才以上の男子）として配置されていたのである。湯江駅に到着しても同様に、身内の姿を見つけて安堵する人、友人に安否を確かめ合う人々の姿、それはまた必死の様相にもうかがえた。

自宅に帰り着き、母や祖父母は安堵してくれたものの、三菱造船所の技師をしていた叔父の安否が分からない事を気遣っていた。祖父母が、あまりにも我が子の安否を気遣うので、母と妹（当時二歳半）と私で再度長崎入りし、叔父や知人の安否を確かめる事になった。汽車は長崎駅までは入れず、道ノ尾駅で折り返し運行されていた。

二・道ノ尾駅より浦上原子野へ入る

八月十二日、列車はなかなか定刻通りには運行出来ていなかったが、午前八時頃の汽車で再度長崎へ向った。道ノ尾駅に着いたのは午前十時過ぎだったろうか。途中の駅で乗り込んでくるのは皆、家族、親族、友人、知人の安否を尋ねる人達ばかりだった。駅に降り立つと、その光景は見るも余りある悲創そのものだった。この三日間、爆裂、爆風、火災にさらされて、やっと逃れてたどり着いた負傷者達が、ホームや植え込みの蔭に数百の人達が横たわり、水を求めて嘆願する姿だった。このような場面を地獄絵と言うのだろうか。

「おじちゃん、おばちゃん、水、水を・・・」
「兄ちゃん、水ば・・・、水ばのませて・・・」

悲痛な、かすかな叫び声が今でも耳の底に残っている。しかし、水を与えれば死を招くことが知れていて、無情だが黙って通り過ぎるほかなかった。後程、これらの行為を悔やんだ人達がどれ程多くいたことか。自己の無情さを悔いたことだろう。

道路は障害物が多く、線路伝いに浦上駅の方へ向かうことにした。被災地一帯は、一見、東北津波水害地の如く、一面の焼野原の広がりが見えたが、唯一違っているのは、そこには多くの焼死体の山と、死臭のただよう光景があったことである。

線路伝いに、まず医大病院を目指した。それは母の姪が看護婦として勤務していたので、その安否を確かめる為だ。炎を逃れる為だったのか、線路の土手の両側や浦上川の川沿いには、水を求めて命果てた遺体が数限りなく続き、医大の玄関口に通じる道路には、治療や助けを求めて数百人の負傷者が列をなしていた。病院自体、爆弾と火災で大破していたのだが、災害を逃れた医師や看護婦達によって必死の応急手当てに走り回る姿が見られた。

尋ね回るうちに、たまたま母の姪と同じ部署で働く医師

と会い、様子を知ることができた。その医師は、丁度防空壕のそばを通りかかった時、あの閃光を見て急きよ防空壕へ飛び込み、一命をとりとめたとの事であった。医師の案内で、職場の焼跡へ行って嘔然とした。焼け落ちた廃屋の中に焼け焦げた医療機器や黒こげの遺体、その中の一つが「野副クミさんです。」と教えてくれた。直前まで同じ場所で仕事をしていたので、誰かの判断が出来たとのことだった。母は、涙にしながらも姪の骨の一片をハンカチに包み、大事にしまい持ち帰ることにした。

医大病院を出て浦上方面へ向かう途中、一本足鳥居の山王神社前を通った。ガレキの山の中、何を求めてか探し続ける人々、なかには廃材で小屋を組み立てる人も居た。住居を確保する為であろう。多くの遺体には、変な特徴が見られた。それは、眼球が飛び出している人が多い事である。その原因が、爆風爆裂による圧力の影響なのか定かではない。そして昼食前のためか、お膳を囲んだままの家族の遺体、リヤカーを引いて仕事をしていたのか、平常の生活を思わせる遺体の姿には、爆発の瞬間の威力のすさまじさやうかがわせた。浦上地区一帯は、兵器、電気、製鋼等の軍需産業的な工場が立ち並び、機密地帯となっていたが、鉄骨はへし折れ外壁は吹き飛んでいて、殆んど全滅状態の様

相を示していた。

当初アメリカは、原子爆弾を長崎港の上空で爆発させ、最大の威力を示そうとしたそうだが、もしそうであったとすれば、東洋一を誇る三菱、香焼造船所をはじめ、県庁、市役所、最大の繁華街浜の町、銅座町、新地、市内に住む四十万人の市民の大半は災害を受け、被害の程度は恐らく二倍以上となっていたであろう。

背中に妹を交互に背負いながら、叔父の下宿を尋ねた。頭部に硝子傷を受けてはいたが無事を確認した。その後、母の知人宅を二、三軒見舞ってから帰路についた。また、長崎から諫早間四十キロメートルの道のりである。ここまですべて一日中歩き続け、何を補食しながら来たのか記憶が定かではない。

夕方、蚩茶屋を出発した時は、また今夜も一晩中歩き続けなければならぬかと思うと、気が大変に重かった。しかし、交通手段がとぎされた今は、それだけが移動出来る手段だったのである。夜道を歩く旅は淋しくはなかった。連日連夜、長崎街道は人、人、人で連なっていたのである。歩き疲れては、道端で休んだり、また仮眠を取ったりしながら諫早へ向けて歩いた。喜々津の駅を通ったのは、夜明け前だったと思う。列車の時刻表がないため、諫早市内に

向けて歩き続けた。

市内へ入ったのは、夜もかなり明けてからだだった。母が習っていた筑前琵琶の師匠である、梶田のおばあちゃん(天満町)の家で束の間の休息を取り、体を休め、食事を戴いた様に思う。疲れも最高峰に達し、歩くことが困難になり東諫早駅で列車が来るのを待った。お昼も近くなり、やっと列車に乗り自宅(湯江)までたどり着く事が出来た。しばらくは、浦上での多くの遺体死臭が体から離れず、食事が思うように進まなかった記憶が今でもはつきり残っている。

三・終わりに(平成二十七年一月追記)

今年(平成二十七年)は戦後七十年、被爆七十年の年でもあります。私達(昭和六年生れ)は出生した時から、国政は、軍事優先国家で満州事変(昭和七年)、支那事変(昭和十二年)、太平洋戦争(昭和十六年)と幼・少・青年期を戦事態勢の中で滅死奉国、奉公を教育されて成長してきました。男児は、幼少から大きくなったら軍人志望が大勢でした。

八十年前のこんな歌を想い出します。「僕は軍人大好きだ。今に大きくなったなら、勲章胸に剣さげて、お馬に乗ってハイ、ドウドウー」

戦後七十年、戦争放棄を宣言し、平和主義を貫き通してきた日本の姿勢は、世界に誇り得る事としてよいでしょう。

しかし、もし戦争が起こり、その戦争に参加した時、国民が受ける恐怖、困窮、悲愴などは想像を絶するものがあるのです。テレビ等で報道される実態を遙かに越える現実を見逃してはいけません。学習体験でなく、実体験でなくでは得られない重み(重圧)を感じ得なければなりません。今こそ、未来永劫の平和をどうすれば子々孫々まで保てるかを、全国民で確かめ合う事が大事な時ではないでしょうか。

(平成二十七年一月寄稿)

『閃光を浴びた日』

尾崎 正義さん（白岩町）

一・学徒動員

昭和十九年八月十一日の夜、米軍のB 29爆撃機二十九機による長崎初の空襲があり十三名が亡くなった。

我が家は、父は既に戦死しており子だくさんだったので、空襲をさけて疎開することにしたが、私は中学に入学するので残り、竹之久保町の村里様方に下宿した。

戦争はますます激しくなり、中学二年生以上は兵器工場に動員され、地下室や講堂は施盤（工作機械）が置かれ、三菱兵器の分工場と化していた。一年生も夏休み返上で軍の作業に協力して、長崎市田手原町の甑岩^{こしきいわ}で本土決戦に備え、橘湾方面から上陸し進撃してくる敵戦車を捕捉するための戦車断崖（戦車を崖から落とし動けなくする人口の崖）の構築作業に動員されていた。

昭和二十年八月九日の早朝、いつものように約束の場所、瀧神社の大鳥居のもとに同級生数名が集まった。竹之久保から思案橋経由で甑岩^{こしきいわ}まで、毎日約八キロ徒歩で通うのは大変だった。その上、食糧事情が窮迫し、牛馬の餌の脱脂大豆の配給をありがたがる時代、空腹と真夏の暑さときつ

い穴掘作業で、作業には行きたくなかった。そのとき誰かが「今日は休もうか」と言い出した。みんなすぐに賛同した。

近くに三菱造船製材工場や御厨製材所の大きな貯木場があった。みんなは、そこで泳いで遊ぶことにした。ところが、高原君が「僕は今日だけは休まれん。母ちゃんが田舎から米をもらって来て、米の飯の弁当を作ってくれた。母ちゃんに悪いので休むわけにはいかん。でも一人では行きたくないで誰かつきあってくれ。」と頼んだ。

みんな行きたくないで黙っている。私は困っている彼に同情し、二人でしぶしぶ作業に出かけたのだった。残ったみんなは、笑って手を振っていた。（これが最後の別れになるうとは誰も知るよしもなかった）

二・閃光

つるはしで土手を掘っていたら「空襲警報だ。雑木林に逃げろ！」と監督の兵隊が大声で叫び、誰かが「敵機らしなもの二機通過した。」と言っていた。

それでもしばらく何事もなかったので、作業を再開した。暑いので上半身裸になって岩石を掘り起こしていたら、一瞬、あたり一面が強烈に明るく淡いピンク色の光に包まれた。まるで虹が落ちてきたような、美しいと言っている情

景だった。裸の背中にかすかな熱さを感じ、しばらくすると生暖かい風が吹き抜けていった。

「退避、退避！」と兵隊が大声で怒鳴っていた。雑木林の中で「今の光はなんだろうか。」「透명한白い光だった。」「いや黄色だった。」「目が潰れるかと思った。」と、みんな興奮状態であった。

しばらくして、外は夕暮れ時のようにだんだん暗くなってきた。雑木林を出て空を見上げると、一面黒煙に覆われていた。その真中に、太陽が焦げたように赤黒くぼんやりかすんでいて不気味だった。長崎の街はどうなっているのか、林の木々に遮られて見えないので、一体何が起きたのか、みんな非常に不安がっていた。

そうしているうちに、黒煙に覆われた空の中に小さな白く光るものが、きらきら舞いながら無数に落ちてきた。それは、四辺が焼け焦げた新聞紙だった。瞬時の熱射に焼け、爆風で舞い上がったものだろう。これは大変だ。長崎の街は丸焼けか全滅かとみんな戦々恐々だった。

三．金比羅越え

午後一時頃になつて全員集合させられ、「本日は作業中止、街の方は大変らしい。みんな注意して帰れ！」と言う兵隊の話に、仲間と隊を組んで帰りを急いだ。

下山する途中、避難してくる人達に出会ったが、怪我した人が多く痛々しかった。あわてて飛び出したのか、素足でガラスをよけながら恐る恐る歩いている人、さらに進むと焦げた服の人、動けずに座り込んだままの人、皆、無言で放心状態であった。

街はどうなったのか、はたして無事帰りつけるのか、だんだんと不安になってきた。甌岩こしまいわから田手原、愛宕、思案橋と下りてきて、対岸の稲佐、竹之久保を指して県庁方面に向かった。

県庁一帯は、盛んに燃えていて危なく通れなかった。やむなく西坂の方から帰ろうと、今の桜町、玉園町、上町の方に行つてみたが、ここも木造の家が燃え尽きて崩れ落ち、道路をふさいでいて一歩も前に進めなかった。市街地はどこも火の海で危険だったので、もう金比羅越えしかないと思ひ諏訪神社の森をぬけ、山頂に向かって山路を急いだ。山沿いの坂道を進んで行くと、頂上付近は西坂あたりの家屋が炎上中で、煙が立ち昇り、一面灰褐色に覆われ何も見えなかった。その煙が目染みのどが痛かった。道には墓地の石塔が爆風で倒れ、山路をふさぎ煙でよく見えないので、倒れた墓石につまずいたり、スネをぶついたりしながら進んだ。山頂近くには、いたる所に被爆者が避難してい

て放心状態でたむろしていた。

四・避難者の群れ

今の御船蔵町、浜平町の上あたりに来たとき、捕虜のオランダ兵の群れが避難しているのに出会った。当時、三菱長崎造船所幸町工場に福岡県捕虜収容所第十四分所があり、オランダ、イギリス、オーストラリア兵四百八十名ほどが収容され、労働に従事していた。

捕虜の一団は、さかんに何か語り合っていた。囚人の一群も避難しており、怪我人が多く、目もうつろでただ黙って座っていた。彼等はきつと、この下の三菱兵器茂里町工場で作業中に被爆したのだろう。この様子では、浦上刑務所も壊滅したことだろう。彼等がその後どうなったのか、ずっと気になって仕方なかった。

その時、他校の中学生が嘉村助教を呼びにきた。(上級生の中で数名が動員を免除され、助教という名で教練や動員時に先生の助手をしていた。)我々は何事かと思いつけて行った。奥まった平地には、火傷で動けない人達が口もきけない状態で横たわっていた。あっちにもこっちにも一様にぐったりと倒れ込んでいる人達がいた。

その群の中に長田助教がいた。近くの工場で被爆したのだろう。顔は赤黒く焼けただれ、皮膚がめくれ、よく見な

いと誰か分からなかったが、体が特別大きい先輩だったので彼だと分かった。小さな声で水を欲しがったが、誰の水筒も空っぽで何の手だても見つからず、みんな彼をとりまき見つめるだけだった。

引率の先生が「ここで解散しよう。気をつけて帰れ。絶対家に帰り着けよ！」と言うので、我々はそれぞれに山路を進んで行った。

五・浦上が消えた

街に下りる道はどこも火の海だったが、坂本町の近くまで来ると、すべてが燃え尽きたのか煙が薄くなってきた。前方の左下に、白黒のしま模様の二本の煙突が見えた。その一本は、くの字に折れ曲がっていた。「あそこは大学病院だ。」「じゃあ、ここらが浦上駅だ。」と言い合いながら山際から街の方へ下りた。途中、大場君が「僕の家がない。」と泣き出した。あたりは一面焼野原で、丘陵地帯の民家は焼失してしまい、黒焦げの段々畑になっていた。みごとに焼き尽くされ、街全体が消滅して何も無い状況だった。級友達も自分の家が心配になり、急ぎ足で下りて行った。

浦上駅もなくなっており、建物も人も突然消えてしまった異様な光景であった。一面が焼野原で燃え残った木の幹が所々に点在し、もろもろの残骸や瓦礫の層、くすぶり続

けている建物の断片が見えた。広場らしい所には、荷車用の馬が数頭並んで黒焦げになって死んでいた。荷車は燃え、車の鉄輪だけが残っていた。

何もない広場らしい所が浦上駅だとわかった。今の浜口町、目覚町、川口町、岩川町、銭座町、宝町は、ただ焼土が広がっているだけであった。避難してしまっただのか人影すらない。だが、あちこちに黒い塊が点々としていた。何かと思つて近づくと、ふいにゲートルを巻いた足元をつかまれた。皮膚が焼け、服が黒焦げになった人がまだ生きていて「稲佐の〇〇番地の誰々に連絡して下さい。」と手を離さず、自分がここに倒れていることを伝えてと必死なのだ。買い出しに行つた帰りなのか、背負つたままの布袋の中には、プスプスと玄米がくすぶっていた。肩にかかった燃え残りの着物の断片を見ると、この先どうなるのか自分の事が心配だったが、仕方なく「わかつた。わかつた。」と言うと、安心したのか手を離し、ぐつたりと崩れてしまった。

六・灼熱の竹之久保

浦上駅裏の三菱製鋼所は、今を盛り燃え、時おり音を立てて鉄骨が崩れ落ち、爆風で曲がりくねって折り重なっていた。戦死した父は、以前この製鋼所に勤めていた。父によく弁当を届けに行っていたが、その製鋼所が今燃えて

いるのだ。父は出征していなくても、きっとここで被爆死したことだろうと思つた。

第一工場と第二工場間の道路を、危険を冒して抜けたとしても、その先の梁川橋が残っているかどうか分からなかった。しかし、下宿に帰るにはその道しかなく、思い切つて炎の中を突進した。幸い鉄骨が倒れてくることもなく、くぐり抜けることができた。

欄干の一部は飛んでいたが、橋は残っていた。しかし、その先（今の梁川町一帯）は倒れた家が道を塞いでおり、仕方なく屋根を乗り越えて進むとすると、ズボンと腰まで落ちた。民家は爆風で倒壊し燃え尽き、屋根の姿を残したまま灰になっていたのだつた。

やつとの思いで涪国民学校にたどり着いたが、校舎の中はまだ燃えておりコンクリートの壁も熱く、手をつくると手のひらを火傷してしまった。

それから涪町の山際を通り、下宿を目指した。途中、空き地に「かぼちゃ」が植えてあり小さな実を見つけたが、そのまま通り過ぎた。ようやく帰り着いた下宿一体は、全部倒壊していた。下宿の人は避難しているのか誰もおらず、火が迫っているが消火する気力も術もなく、ただ茫然と見ているだけだつた。日が暮れるとますます激しく燃え盛り、

夜空が真っ赤に染まり、この世の終わりかと思える光景だった。下宿も燃えてしまったので、寝る所を探した。淵神社の山中に掘った町内の防空壕も、焼け出された避難者で満員だった。寝る所も食べ物もなく、着の身着のまま山中で過ごすことになったが、夏だから野宿ができたのだ。

七・友の死

疎開先の南高湯江村（現島原市有明町）に帰るにも汽車は不通で、することもなく焼跡をさまよっていると、酒井君の家の人に出会い「うちの三夫は一緒だったんでしょ？ どうして帰って来んの？ どこにいるの？」と迫られた。作業をさぼり、貯木場に居るだろうとは言えず、「知らない。そのうち帰ってくるでしょう。」と答えるしかなかった。

あの日、作業に行かなかった級友は、貯木場の材木の上で遊んだり裸で泳いだりしていて、熱線を浴び炭化した塊となってしまうことだろう。彼らを目にする勇気のなさと、自分が生き残った不思議さと申し訳なさで、貯木場にはどうしても近づけなかった。

数日後、私は酒井君の家に下宿していた指方先輩を訪ねた。彼の話では、やっと捜しあてた三夫君を昨夜連れ帰り、空き地で倒れた木材を組み、茶毘だひにふしたとの事だった。三夫君の茶毘の黒い焼跡を見て、とてもショックだった。

竹之久保の火葬場では、栄養失調で死んだオランダ兵の捕虜（製材所に作業に来ていた）を焼いていた。焼ける間、その場に来ていたオランダ兵達と過ごし、時々釜の覗き窓から見ていたので、三夫君の焼ける姿を想像してたまらなくなつた。数日前まであんなに元気だったのに、どうして死ななければならなかったのか。

指方先輩と妹さんが、西彼杵郡雪ノ浦村まで歩いて帰るというので、三夫君の茶毘跡で水筒の水で水盃（水で盃を交わすこと）をして別れた。

八・食べ物を求めて

あまりの空腹に、作業から帰る途中に見つけた「かぼちや」の事を思い出し行ってみると、まだ花がついている小さな実まで既に誰かが取ってしまった。かぼちやの花が食用になるとは後日知った。

時々、炊き出しのにぎり飯が配られているらしいが、私は食べ物探しに出歩いていて貰えずじまいだった。空腹に我慢できずにいると、友人の誰かが「駅前の馬車の馬肉を取りに行こう。」と言った。私は、熱傷でケロイド状の馬の焦げた尻肉を包丁で切りさく場面を思い浮かべ、とても食べる気はしなかったので一緒に行かなかった。行った友人は、あの放射能をたっぷり浴びた肉を食べたのだろうか。

だとしたら、きっと体に異常が出たのではないかと思う。友人のその後の消息は、分からずじまいだ。

またある時は、倒れた家の台所付近を掘り起こし、食べ物を探しまわった。米びつが潰れ、壁の赤土が混入していたので手ですくい集め、浦上川の水で炊いてみた。赤飯みたいなきれいな色だったが、食べてみるとガリガリして食べて食べられたものではなかった。

真夏というのに、みかんを食べている人がいるという話を聞いて、早速、旭町の缶詰工場に行ってみたが、工場はまだ燃えている最中だった。ロープが張ってあり「危険だから入るな。」と警官が制止していた。それでも大人が数人中に入り、積み上げられた箱を引き出し、きれいな箱を取り焦げた箱は捨てていた。それを拾って帰り開けてみると、イワシが焼け黒く炭化していた。それでも空腹に耐えられず墨みみたいな缶詰を食べた。飢えと疲労の放浪者生活だった。それでも、母や妹弟が疎開先で元気であると思うと、別に不安はなかった。

九・帰郷

食べ物を求め廃墟をさまよい、山中で寝て一週間近くたった頃、役所の人々が町内に来て罹災証明書を書いてくれた。これがあれば鉄道は無料という。やっと長崎駅から汽車が

通うようになったと聞き、駅に行くのと被爆した人がたくさん集まっていた。その人達は皮膚がただれ、水ぶくれができ、化膿して苦しんでいた。汽車は昼間敵機に狙われ危ないので、夜に出るということだった。暗くなってから爆音が聞こえたので、皆一斉に駅前広場の防空壕になだれ込んだ。

大分待つてやっと汽車に乗ったが、満員の上、被爆で苦しんでいる人達が立っておれず、うずくまったり通路に横たわったりしていた。その中にいたケロイドで口がただれている人が、あまりに水を欲しがるので、用意していた水を一升瓶ごとやってしまった。あたりはガス会社のコークス（燃料）が燃え盛っていて、一面真っ赤だった。汽車が進むにつれ、茶毘の火がいくつも見え異様な感じがした。

汽車は諫早駅に着いたが、夜中のことで乗り換えの島原鉄道の汽車がなく、諫早駅の地下道の壁にもたれて寝るほかなかった。手には、燃える前の下宿から捜し出した竹刀と、別れ際に指方先輩がくれた形見の靴下を大事に抱えて一夜を過ごした。

翌朝、島原鉄道の貨車が来た。私は、それに乗って母と弟妹が待つ疎開先へ心急いだ。吾妻あたりまで来たら敵機が来たので、先頭の機関車は避難させるとのこと、貨車

だけ残して行ってしまった。我々は駅前の桑畑に待避した。汽車はいつ動くかわからないので、近くの農家に行き、大きな黄色い種きゅうりを分けてもらい、かじって過ごした。夕刻、やつと疎開先の湯江駅（今の有明町）に着いたが、後で必要になるとも知らず、罹災証明書を乗車券の代わりとして駅員に渡してしまった。

母の実家に行ったが留守だったが、隣家のおばあさんがいて、死んだと思っていた私がやつれた姿で急に現れたので、亡霊ではないかと驚いていた。そのおばあさんが、麦飯の大きなおにぎりを作ってくれたのでかぶりついたが、なぜか急に腹が痛くなり食べられなかった。

母達は、少し離れたところにある農家の納屋一室に古い畳を敷いて住んでいた。仏壇には、私の入学写真が飾っていた。母は、私や親戚を捜すために、原爆投下の二日後長崎に入市した。竹之久保町一帯を探しまわったが見つからず、私がいままで帰らないので、もう死んだものと思っていたらしい。田舎に帰って来た私は、一軒家の納屋で何もすることもなく過ごしていた。玉音放送も終戦も知らないままであった。

十・原爆症

しばらくしてから、私は頭髮がよく抜けるようになり、

歯茎からも時々出血し、下痢をしたり目がかすみ充血したが、体質や栄養失調だろうと思いい、気にもとめてなかった。工場動員で被爆した親戚が、毎日口に指を突込んで吐き、苦しみながら死んでいったのを見ていたので、それほどでもない自分は、大丈夫だろうと病院にも行かなかった。

そして、もう長崎では暮らせまいと思いい、島原の中学に転校することにした。でも、その中学校では疎開者や引揚者の学生が多く、体育館を仕切り教室に改造するまで待たされ、十一月頃やつと入学できた。しかし、それまでほとんど授業を受けてないので、地元の学生との学力差に苦しめられた。

その年の暮れ、指方先輩に年賀状を出したら、「貴殿の賀状は故人の霊前に供えました。」と彼の父から葉書が届いたので驚いてしまった。彼は工場に動員され、耳たぶをほんの少し火傷していただけなのに、あんなに元気で雪ノ浦まで歩いて帰って行ったというのに、なんとということか。私は一番の親友を亡くしてしまい、悔しく残念でならなかった。

ずっと後になって、私はあの日を思い浦上の丘に立ってみた。その墓地にあるどの石塔にも、原爆投下後の八月、九月に死亡した方々の名前が刻んであった。中には八名も

亡くなっている碑もあり、これは一家全滅ではないかと思
った。

長崎の叔父も錢座変電所で会議中、椅子に掛けたまま焼
死していたと聞いた。私の級友達も、貯木場で閃光一瞬に
して死んでしまったのだ。あまりにも短い人生だった。大
学時代の同級生、山口竹子さんも原爆投下後に入市したと
かで白血病になり、三十二歳の若さで亡くなった。まだま
だ生きてく無念だっただろうと思う。

あの時私を捜し回った母も、残留放射能の影響か原爆投
下後二十一年目、癌で長いこと苦しんで死んでいった。

十一・あの日から七十年

あれから七十年経った今、平和公園では鳩が遊び、観光
客で賑わっている。そこでは、あの日あの時たくさんの人
がもがき苦しみながら死んでいった。こんなにも多くの人
を殺しあう戦争は、もう二度とイヤだ。一般の善良な市民
をも、一瞬にして大量に焼き殺すあの忌まわしい原爆は、
どうかこの長崎が最後であって欲しい。

しかし、あれから七十年が過ぎても、依然として戦争も
核もなくならない。この愚かさを怒らずにはいられない。

私は今、画家である。かつての原子野の赤い炎、焼け焦
げた黒褐色、燃え尽きた灰褐色、黒煙などがいつもよみが

えり、私の描く絵はどうしても赤黒い色調の重苦しいもの
になってしまふ。本当は明るく楽しい夢のある絵を描きた
いと思っているのに。

(平成二十七年二月 寄稿)

諫早市原爆被爆者救護活動の
記録より抜粋

(昭和五十八年三月 諫早市発行)

『原爆の日によせて』

―昭和五十七年八月九日 北諫早小学校での講話から―

野中 チトヨ（船越町）

今日は、長崎に原爆が落とされた日ですね。

今から三十七年前の今日、長崎に原爆が落とされた時、この諫早ではどんなことがあったのか、私が、この目で見たことや、したことをお話します。

長崎に原爆が落とされたあの日は、今日よりもっとよく晴れたとても暑い日でした。今でも忘れません。昭和二十年八月九日、十一時二分。長崎に落とされた原爆が、まるで諫早に落ちたように、稲妻の何倍という光と、ほとんど同時に『ドーン』という物凄い音がしたのです。みんなびっくりして、その瞬間反射的に物かげに隠れました。しばらくして外へ出てみるとどうでしょう。今まで晴れていた空が、真昼というのに薄暗くなって、長崎の方に変な形をした雲がもくもくとできたのです。それは、皆さんも写真で見たことがある、あの「きのこ雲」だったのです。一体どうなったのでしょうか。きっと、今までにない、ものすごい爆弾が、どこかに落とされたに違いないとみんなで心配していました。

それから約三時間ばかりして、やっと警防団のおじさんが来て、「長崎は、さっきの爆弾でほとんどやられたそうです。怪我をした人が諫早にも来るので講堂を掃除して下さい。」と言って来られました。その頃の諫早小学校の講堂は、今の市役所の所にあって、二千人以上の人が入ることのできる大きな建物でした。私たちは汗だくになって、心配で胸をどきどきさせながら一生懸命掃除をして、怪我人を待ちました。

やがて、午後五時頃、トラックに乗せられた人たちが、次々に来ました。その人たちは、トラックに乗って来られたくらいだから、怪我といっても軽い方の人たちに違いありません。だのに、どうでしょう。着ている洋服はずたずたに破れ、顔や背中、手、足等、火傷をしているのです。なかには、外から見ても何一つ傷がない人もいました。

その人たちは、みんな講堂の床板にゴザをしいて、その上に寝ころんだり、うずくまったり、または木の長椅子に腰かけたりして所せましと収容されました。私たちは、大急ぎで、薬といってもオキシドールと赤チンキと黄色い粉の薬しかなかったけど、それを無我夢中で塗ってやりました。傷口には、ガラスの破片がいっぱい突き刺さっています。それにうじ虫までが、傷口に突き刺さるように幾つもの

幾つも食いついているのです。

「痛いよう。痛いよう……。う……う……。水水」

という傷ついた人たちの悲鳴を聞きながら、ただ夢中で、ピンセットでガラスの破片やうじ虫を取りのぞき、薬を塗ってやったり、走って行って水で口を湿らしてあげたりしました。

ふと見ると、可愛い赤ちゃんが、傷一つないのに死んでいました。するとそばにいた傷一つついてないおじさんが、ふらふらと立ち上がって十歩ばかり歩いて、そこにあつた木の長椅子に「どすーん」と座ったかと思うと、両手を椅子の背にたらしめて亡くなってしまいました。

中央の方では、女学生と若い女の先生が、輪になって座り、苦しさをおさえて、静かに小さい声で讚美歌を歌っておられました。でも、その人たちの中からも次々に死んでいく人が出たのです。

苦しさに、朝鮮の人が、大きな声で、

「アイゴー、アイゴー、水、水、水をくれ。」

と泣き叫ぶ声も耳に突き刺さりました。私たちは、そんな人たちの間を、あっちへすりぬけ、こっちへすりぬけ、まるで操られているように動き回ってお世話をしました。

やがて夕方になり、婦人会のおばさんたちが、おにぎり

をつくって持ってきて下さいました。でも、どうしても胸がつまって、一つも食べることはできませんでした。

二日、三日と経つうちに、死んでいく人がどんどん増え、ある教室は、死体を安置する場所になってしまいました。

三日三晩、家に帰らないままお世話をしたら、着ているものはもちろん、頭から足の先まで、異様な臭いが染み込んでしまっていました。でも、じつと家にいるわけにはいきません。それからとうとう十日間位、みんなで力を合わせて泣きながらお世話をし続けました。

八月二十日頃になると、生き残った人は半分くらいになってしまい、その人たちを、やっと病院に移すことが出来るようになったのでした。この時のことは、今思っても涙が出てきます。

皆さんは、こんな様子は想像もつかないでしょう。でも、これは、今から三十七年前に、私の目の前であつた本当のことなのです。

こんなことが二度と繰り返されてはなりませんね。日本だけでなく、世界のどこでも。

そのためには、一人一人がしっかりした考えを持っていないくてはなりません。どんなことが戦争につながってしまうのか、わかる人にならないといけません。

皆さんは、私の話をとてもよく聞いてくれたので、きっとこのことをわかってくれて、平和な、楽しい社会を築いてくれることを信じます。では、これで終わります。

『布を切って包帯に』

林田 アキノ（鷺崎町）

私どもは、昭和二十年八月十日午前八時頃、鷺崎町の町内会長より「ご飯の炊き出しをするように。」と言われましたので、女子青年団の支部長と一緒に、炊き出しをしました。すると今度は、「長崎より送られてくる怪我人が多いので、すぐに諫早国民学校に行くように。」と言われ、婦人会の皆さんと一緒に行きました。そこには、長崎からの怪我人が消防団の人たちの手でリヤカーで連れてこられ、その人たちは、顔も分からないほど焼けただれ着物もぼろぼろになっていました。私どもは、あまりにも悲惨な姿にただ、ぼう然としていました。その当時は、包帯が無かったので、家から持ってきた布を切り包帯の代わりに使い、怪我人の看護の手伝いや用便の世話をしておりました。「水を、水を」と言いながら死んで行く人もおりました。そこで、亡くなった方々の運び出しなど、消防団の人たちと一緒にやりました。

『被爆救護の思い出』

原 シメ（幸町）

その時、私は江の浦の妹の家に用事で行っておりました。食事の用意の手伝をしようと思いい米を洗っている時、「ピカ―」として「ドカン」と音がし、破れ障子もガラスもびりびりとしたのです。子どもたちが外で四、五人遊んでいたので、妹がびっくりして座敷に上げ、布団を被せました。

しばらくすると灰がジャンジャン降って来て、大学の処方箋と書いてある紙や、かすりの着物のきれっぱしが芋の葉の上に降りかかるので、それを拾いに行つて手で触ると、それはバラバラと灰になってしまうのです。しかし触りに行つた時は、紙は紙の形をしているし、かすりは布の形をしているのです。

翌日、妹と二人で朝早くまだ暗いうちに石原を出ましたけど、アメリカの飛行機が山すれすれに飛んで来て恐ろしくて木の下に隠れたり、家の軒下に入れてもらったりして歩く間もありませんでした。ようやく山下という所でそこにきれいな山水の出る所があったので、そこまでたどり着きました。そこに、石に腰をかけたお腹の大きな女の人がおられました。その人は「長崎はみんな焼けてしまい、私

はこんな身体で早く逃げると言われ、夜どおし歩いて来た」とのこと。今日は日見トンネルも通れないようになっている、と話して泣いておられ大変驚きました。

私たちもやっと歩いて諫早に着きましたが、ここは異常が無くてほっとしてしましたら、班長の松本さんが来られて、ばあちゃん梅干集め、妹は握り飯炊き、私は看病に行くよう言われ、私は国民学校の講堂に行きました。

講堂の中は足の踏場もありませんでした。そしてみんなが、「水、水」と怒鳴るけど水はやってはいけなと言われました。

太った男の人が便所にと言われ、廊下を片田永屋の娘さんだっと思いましたが、二人で肩にすがらせて連れて行ってやりました。前はドンゴロス（麻などで織った丈夫な粗い布）の通の前掛をしておられたので見えなかったけど、後ろをひよつと見て、頭から血がスーと引く思いをいたしました。背中からお尻までいっぱいに、もうそれこそ「がんづめ（除草用の爪鋏）」でかいたようになって、何か後ろの方に赤い物が下がっており、薄暗い中で恐ろしくてたまりませんでした。家に帰っても梅干を見ては思い出して、しばらく駄目でした。

その後、毎日のように看護に出ました。十七日頃は海軍

病院にも看護に行きました。六班の藤瀬ラジオ店の前に集まり行きました。死体の処理で、長い金ばしのような物で綿をちぎってやったりしたことを記憶しております。また、五十にはまだならぬような男の人でした。広島で用事を済ませ、長崎まで来て長崎でこんな目にあつて、やっぱり逃れられないようになっていたと話しておられます、哀れに思ったものです。

『夢遊病者のように!』

橋本 英子（永昌町）

原爆の思い出は、三十六年も前のことですから、はっきり覚えておくことは少なくなりました。当時、私の家は高城町の諫高の手前にありました。そろそろ昼食をしようとしていた時に「ピカッ」と異様な光りがして「ドーン」となったので何事かと外に出て見ました。近所の人たちも不安そうに空を眺めていました。まもなく西の空の彼方から、黒い煙がむくむくと上ってきました。きつと爆弾が落とされて大火事になっているのではと、恐怖の念にかられました。

その後、日時ははっきりしませんが、長崎の原爆で負傷した人たちが、諫小の講堂に運ばれてきました。私も婦人会員に、手伝いに行くように命令が出ましたので、全員講堂に行きました。患者たちは全身焼けただれて、哀れな状態で寝かされておられました。あちこちから「水、水」と叫ばれるのです。私もはお湯を飲ませて廻りました。食事時には、おむすびを配りました。所々に新聞紙を被った人がいましたので、何気なく取ってみると既に死んでいる人たちでした。また、気が狂った人もいて、外を夢遊病

者のように丸裸で歩いておられました。被爆者の方たちは、一刻も早く手当をしなければならぬ人たちはばかりでしたが、医者や看護婦も廻り出さない状態でした。私どもはハラハラするばかりで気の毒に耐えませんでした。患者たちの苦しみは如何ばかりだったかと、胸の痛くなる思いでした。

『水は与えられない』

川原 由基子（東小路町）

家が強制疎開となり、本町から東本町へ空襲警報をぬつての引越が終わり、当時、私は十時頃から福田町の知人宅へ買出しに出かけていた。警戒警報も解除になったので、畑でいろいろ探索してる折、一機の飛行機が「零戦かしら、爆音がいささか違うようだ」と見上げたたん、山の向こうに平月形を描いて、異様な光、おもわず目を閉じたくらいだった。そして、急に長崎方面が無気味な空模様、これは只事じゃないと、そこそこに家に帰り着く。町内の人々も「ドスン」という音と空模様を見て、恐れと不安に、おののいていました。

夕方になって、長崎に大型爆弾が落ち、全滅状態で怪我人も多数で諫早に死者共々運ばれてくる由。当時、蓄音器店の我家にリヤカーがあつたので、父は早速、運搬係に出かけ、母は隣保班長宅へ集りがあつて、浴衣・サラシ等包帯がわりになる物と、カマドの灰を水につけ、その上水（一晩おくと、澄んできれいな灰水になる）が火傷に効くからそれらを用意して、明日からの看護に役立てるようにとの指令を受けてきて、空襲警報の合間々にバケツのあるだけ

に作った。

十日朝早くから病弱な母に代わって、用意した物を持って、班のおぼさんの三、四人で諫小(今の)へ出かける。昨夜から次々と運ばれて来た怪我人の凄まじさ、被害の大きさを耳にする。割当の部屋へ入った途端、鼻をつく異様な悪臭と床上に寝かせてある方々の今まで見たこともない、焼けただれ、膨れあがり硝子の破片の突き刺さったままの身体・手・足、あまりの酷さに身体が、がたがた震え出す始末。「水をくれ、水を飲まして、水を飲まして、苦しい・痛い・口惜しい・お母さん」、家族を呼ぶ声でいっぱい。でも、水は絶対飲ましていけない(死ぬから)との指示だったので、ただ「我慢して、助かるためですよ」と、うろろうして手を下すすべもわからない。

挺身隊の幹部でもしておられたような女の人が、片手は血のにじんだタオルで吊り、顔には焼けちぢれた髪の毛と血がくつつき、右足はハダシ、左足は火ぶくれと血で固まって、靴もぬげないのに全身の力をふりしぼって、母を求めて泣き叫ぶ子供を託して、「皆様よろしくお願いします」と。それで、私も「よし、できる限りの手伝いと看護」を決心し、指示を受けたとおり灰水を洗面器に取り、小さく裂いた布に浸し、火傷の場所に当ててやるが、硝子の破片

があちこち突き刺っているの、痛がりようが酷く、火傷の部分も難しい。手を取って、「死んでも良いから一口水を」とせがまれ、指示の方に聞き返しに行っては叱られ叱られ、辛い思いで一杯。若い娘さんの背中からおしりにかけて、硝子の破片が突き刺って洋服もずたずた(モンペ)、泣きながら、うなりながら、「お母さん、お母さん」と呼びながらトイレに立たれ、手を貸して抱きかかえると、身体がビシヤゲそう。私もともに涙しながら立ったまま用足しさせる。その合間にも、次々と断末魔の一声、痛い、苦しい、無念の涙を流しながら息絶えた方を運ぶ警防団の方が行き交う。左右前後に横たわってる人に頭・顔・手・足と火傷に湿布をしても、次々と忙しく布を替えては、当て替えて行く。食事は交替でしたが、このような中、喉に入るところじゃなく、腐れの臭いに悩まされどおし。

夕方六時に家に帰り警報の合間八時頃、懐中電灯を持って行って見たものの、呻き声と悲痛な叫び声におびえて、看護できず、十一日(二日目)朝早く出かける。一晚のことで今度は傷がただれ、腐れたところに、ウジがうじゃうじゃ頭の中・首にお腹にと、それがチクチク刺して痛いらしく、呻きどおし、「水、水」の声、あちこちから。すぐに小さなカンが用意される。もう湿布じゃなくて、割箸でウ

ジを一つ一つ取ってやるが、暑さと腐れで、取っても取ってもという始末。自分もゲゲエしながら、摘み取って回る。運ばれた食事を少し食べた人もあったが、ほとんどの人は弱りかけ、戸板に乗せられた人も増々多くなる。

身内に引き取られた人もあって、昨日よりはぐっと少なくなっていたが、ウジ取りと団扇で風を送って、少しでも楽にしてあげようと汗みどろ。朝鮮の大きな男の人が全身真赤に焼けただれ、丸裸で仰向けに寝たまま、高熱と苦しさにわからぬ叫び声で目をむいて息絶えられた。「頑張ってください。水は我慢して。」と言いつながら額に濡れタオルを当ててやるが、熱と火照りと暑さで、瞬く間に乾く。ウジも何百匹取ったでしょうか。身内の名前を聞き出しては、連絡所へ何回も走った。早くわかりますようにと念願しながら。合間の警報も無視して、汗だくの看護も大変です。お互いにお喋りする人もありません、必死でした。戸板が走る、医者が走る、熱のための冷し方、ウジ取り、団扇使いの二日目。うつろな目、腫れ上がり、色の変った唇から「ありがとう・・」と。でも「一口水を」の声が辛い。

こんなに苦しみ、欲しがる人に飲ませてやったらと、しきりに思ったものだった。口を湿してやるのもいけないという指示でしたから、本当に可哀想でなりません。高熱で

意識の薄れていく人を冷し続ける、痙攣^{けいれん}あり、医者も回り切れない有り様。

三日目の十二日は、人数もグッと減り、諫小の元の講堂へ移される。引き取る人も無く、面会の方も無し。おそらく家族も被災されたのでしょうか、名前を呼び呼び探し求め、弱りが目立つ身体は、熱と暑さで腐れるばかり、焼けただれの汗が敷いてあるゴザにも流れていた。ウジだけが増え続ける。

身内の人、医者、看護人も共に苦しみ頑張るが、手の下しようがない。ブヨブヨの腐れに湿布もできず、ウジ取りをしてるうちに、私も夜から発熱して、家に帰りモンペを脱ぎ捨て、十五日の終戦も床の中、一週間寝こんだ。「ありがとう」と、苦しい中から感謝して亡くなった人、無念さいっぱい悲しさいっぱい亡くなった人、身内に会えず寂しくお母さん呼びながら亡くなった人、こんな生き地獄が今後ありませんことを願ってやまない。

『被爆者を肩に支えて』

池邊 翠（八天町）

当時、私は県立諫早高等女学校の動員学徒生徒隊長として、第二十一海軍航空所発動機部工務人事学徒係に勤務しておりました。八月九日午後二時半過ぎ頃、学校より呼び出しがあり登校すると、「長崎から負傷者が諫早駅に運ばれるから、各工場に連絡をとり担架を持ってできるだけの人を集めて、諫早駅に待機するよう」との指令を受けました。

そこで急いで工場に戻り、工場主任の許可を仰ぎ各工場に以上の指令を伝達しました。

各工場から集まった友達と学校へ行き、竹で編んだ担架を持って諫早駅に走りました。

駅には三十人位の同級生、他に下級生、他校の男子が集まっており、諫早高女から江口、山田、向井先生らがみえられました。四時頃だったと思います。

しばらくして、第一ホームに貨車が到着しました。私たちは担架を持ってそこへ走り、貨車の中を見た途端、一瞬息をのみました。ほとんどの人が裸かそれに近い状態で、これが人間だろうかと思うくらいでした。私と安永さんは、

入口に近い人から、まず二十五歳位の女性を当時の海軍病院（現在、諫早病院）に竹製の担架で運んだのです。次に運んだ人も女性でしたが、この方は火傷が酷く、唇も膨れ上がり、かなり苦しそうでした。途中、竹の節目が体に当たって、痛い、苦しいと言われます。担架から降ろし、私の肩に支え、安永さんが手を貸して運びました。三人目の方は男性でしたが上衣はなく、ズボンの布端が腰のベルト辺りに残っているだけの酷い格好でした。先ほど担架から降したので、誰かに担架を使われてしまい背中におんぶをしたような格好で、山口、馬渡、山口スミエさんらと一緒に運んだのです。その日は六人か七人運んだと思いますが、海軍病院の庭もいっぱいになっていました。やがて汽車通学者は、その場で帰宅してよいということで午後七時頃作業を終了いたしました。

帰りの列車は、先ほど被災者を降したばかりの貨車です。車内には異様な臭気が充ちており、入口の大戸を開け、首を出して帰りました。服にも身体にも汚物、臭気が染みて気持ちが悪く、また被爆者の有り様が目の前にちらつき、その日の夕食を取れなかったことを覚えています。

この後、十二日まで、毎日早朝から工場に出動した後、学校に行き、看護に従事いたしました。

『コトボシを持って』

立山 光重（幸町）

三十六年前の忌まわしく、悲しい出来事の原因――。

昭和二十年八月九日、真昼――

忘れようとしても忘れることのできない怒りを、抑えることは出来ません。その日の午後五時頃、馬場班長さんの「怪我人が、どんどん諫早に運び込まれているので、救護に出られる者は皆、出てくんさい。」との触れで、人手の足りない時期、家からは、私と林のおじさん（林達子さんの実父）が行くことになりました。おじさんは、コトボシ（柄を付けたろうそくを立てるための台）を持って、私達の上野町一班からは、江口のおばさん、宮本のおばさん、馬場班長さん御夫婦と、家の前の島鉄踏切そばに集まり、他にも何人か集まって来られ六時頃、本諫早駅の前を通り、商業学校（現在諫早小学校庭）に着き、川のわきでしばらく待った後、班長さんの指示で救護活動に入りました。小屋のような所から入った途端、中は被爆者がいっぱいでした。呻きながら、「水……水……」と言う方に、近くにあったヤカンで水を飲ませました。汗や血や汚れのために、色の染みたサルマタ姿の人、うずくまって動くことも出来ない人、た

だ泣いている人、ぐったりしている人、髪も服もクシヤクシヤで、生き地獄でした。林のおじさんが、コトボシに火を点けて来られ、少し奥の方に行った所で、男の子が「ア イタター、イタイヨー、ガラスが体中に入って、イタタ、イタイヨー。」と苦しがつて、でも、はつきりした口調で、「おいは、桶屋町の豆腐屋の息子」と言い、お父さんも、お母さんも、わからないとのことでした。幾人もおられた救護の方々も、どうすることも出来ませんでした。私は、可哀想で涙が出ました。また、小柄なおばさんが、男の方と被爆者の中を見てまわっておられ、身内の方を捜していられました。十分にならないローソクやコトボシの明りで、それはそれは大変でした。苦しきまぎれにはみ出されている足を、そつとそばに寄せてやったり、林のおじさんと二人で、抱えて安定させてやったりしました。お世話する係の方でしようか？

「水は欲しがるとままだに、たくさん飲ませないように。」と言っているのが聞こえました。

夜通し救護して明け方、林のおじさんがムシロを持って来て、私も手伝って、所々の被爆者の人の上に着せました。亡くなられた方だったと、帰りに聞かされました。私が洋裁見習として、住み込みでお世話になって間もない頃のこと

とでした。周りの皆様に覚えもなく、今はもう、町内会長
さんも、班長さんも、林のおじさんも、亡くなられてしま
いました。

『一人の女子青年団の記録』

西村 ミツエ（小野島町）

一家の柱と頼む兄は出征し、年老いた父と兄嫁、一歳の子どもに私の四人。今から二十三年前。旧姓本田ミツエ（現西村）川床名上。山を一つ越えれば有喜、当時その山は軍部の守りで固められ、山近くの農家の納屋または大きな家は、ほとんど軍部の軍用に取りられ、弾薬倉庫、食糧倉庫、または道具入れと使われていました。

家の中から一步外に出れば、異様な体制と不安の中に食糧増産と、命令のままに「欲しがりません勝つまでは」と固い信念に燃え、毎日を銃後の守りとして励んだのです。

その日は、茹でるような暑さの中に田圃で田の草取りをしていました。突然、目もくらむような光、物凄い音、私も義姉さんと田圃の中に伏せました。やっと気がついて顔を上げて見ると、大きな入道雲、今に聞けば「きのこ雲」。生きている自分が恐ろしく、どんなにして家に帰ったかわかりません。空には真赤になって今にも落ちてくるようになった太陽を見たとき、もうこれまでと思えました。長崎の燃えかすが家の周りの芋の葉にいっぱい積もります。

原子爆弾と聞いたのは次の日でした。知人、親戚、親を

捜しに歩いて長崎まで行く人が、夜昼家の下の道を通りま
す。婦人会の人たちは、次の日から炊き出しに川床西林寺
に行きます。義姉さんたちは、手の皮が煮えるようだと言
いながら毎日毎日出かけます。私、当時川床名上女子青年
団の一員として、川床名女子青年支部長旧姓神崎フジエさ
ん（現納富）より十三日の夕方、翌日十四、十五日の二日
間、被爆者救護に出動するよう当時の町内会長（亡山口久
米七）さんより連絡があったことを知らされました。十四
日、朝六時半頃家を出て、団員が次々に集まり引率者（旧
姓山口アサノ先生）現松田さんを先頭に団員十一名は、川
床消防団と一緒に一里余りの道を防空頭巾と救急服に身を
固め諫早に急いだのでした。

市役所の前で係の人の注意を二、三聞いた後、消防団の
人とは別れました。私たちが係の人に連れられて行ったの
は、県立諫早高等商業学校でした。校内に川が流れていて、
橋を渡って教室に行きびっくりしました。何とも言えない
臭い、出ている所は真黒く、目は見えない程に腫れ、「痛い、
痛い、水を、水を下さい」と言葉にならない程の呻き声、
手足も動かせぬ被爆者、蠅は顔にむらがつて、追うことす
ら出来ない有り様でした。

私たち十一人は、山口先生の指図のもとに二つの教室に

別れ、二人一緒に組んで被爆者の看護に当たったのです。
教室は足の踏場も無い位です。三十四・五歳の女の人、口
だけでもぐもぐ、私たちが近づくと目から涙を流していて、
蠅が顔にそれを追うことも出来ず、痛いとも言えず、両眼
から涙が出ているだけ。足元を見ると、大小便の中に下半
身は埋まったまま、膿のような汚物にも蠅がむらがつて、
人が通れば「ワッ」と、被爆者の体に移っていく。腰に
付けている汚れ物を取ってやろうと、少し横にしてびっく
り、体の下にはうじが身に食い入っている。箒とチリ取り
を持って来て、被爆者の下半身を浮かせ汚物を始末する。
そしてわきにあつた洋服のやぶれにて下を隠してやる。

隣りでは「水を、水を下さい」と泣く。湯さましを持っ
て来ても、そのまま飲めません。手を洗ってきて手のくぼ
みに入れ、指と指とのすき間から少しづつ落として飲ませ
る。「ありがとう」と言った人、間もなくして亡くなった。
薬の付け替えに係の人が来られた。病院の先生だろう、
国防色に身を固め、黒い薬の入った缶をぶら下げて来られ
た。私達はその係の人が薬を付けやすいように、座れるよ
うな人はそつと抱くようにして起こしてやり、どうにもで
きない人は横に体を抱いたように浮かしてやる。背中いっ
ぱい薬を付けてもらう人、背中に貼り付けてあつた紙を一

息にぱりつとはがす。はぎ取られた患者は、拳を握りしめ歯を食いしばり、深い谷間に突き落とされたような呻き声を出しながら、痛さに耐えている。生き地獄とはこのことだろうか。そこ、ここから泣く声と呻く声、薬を付けていただいで、良くなりたい一念に生きようと一生懸命に堪えている被爆者。薬の付けやすい所の手足には、欠けた茶碗のような物に分けてもらい、指で付けてやる。黒々と「どろっ」とした薬だった。誰もが口をきかない。次から次に我を忘れて一生懸命だった。

朝、大便の掃除をしてやった人も亡くなった。生きながらうじに食われ、肉親に会うこともなく、消防団の人が担架を持ってきて乗せていく。後始末に箒とチリ取りを持ってきた。背中の下にいたうじ虫、主を無くし別の所に散らばって行く。掃きよせても床の板目から出て来る。床板には今まで寝ていた被爆者が、黒く版画で押したようにくつきりと形を残している。

汚物を掃き取り、ごみ焼きはどこかと裏に出てびっくり。そこには元大八車といって市役所のごみ取り車、その大八車に死体をいっぱいに乗せ、今私たちの所から連れて行かれた婦人が、足と肩を持って一、二の三と積み上げられる場面だった。私の足はがたがた、棒立ちになりただ手を合

わせ、念仏を唱えた。大八車には死体が積みかさねられ、一枚のごさを被せ裏口より消えて行く。

汚物を持って、捨てる所がわからず、火を燃やしている所に行ったら、市役所の人たちが三、四人一生懸命に紙を破って燃やしている。「これは」と言ったら「それはあっち」、「これも燃やした方が」と言うと「これは薬だから」と。言われた指定の場所に汚物を置き、急いで教室に戻る。おにぎりが来ていた。

係の人が「重病人が多いから、当直室で二人ばかりで少しお湯を作って来てくれ」と言われていた。私は若い男の人が「痛い、痛い、起こしてくれ」と泣きながら叫ぶのでそこに行った。全身にガラスが突き刺さっていて、化膿し膿が出、全身が腫れ上っていた。「お母さん、お母さん」と泣く二十歳前後の人、さすつてやろうとしたら、「がさがさする、痛い」と言う。手の付けようにも薬もない。「どこ」と聞くと、「宮崎」と言う。「お母さんが来られますよ。頑張つてね」と言ったら、その人の目から涙が次々と流れる。可哀想で自分も涙が出る。そっと手を乗せてやった。握り返す力も無い様子。

お湯が出来た、当直室より錆びたさじを見つけ出し、湯呑茶わんに分けてもらい被爆者の口もとに持っていく。

目を閉じたまま口を開ける。でも二、三口食べると首を振る、一杯のおも湯も四、五人に食べさせる、食べる気力も無いのだ。ただ、「水を」とかすかに言うだけ。

今まで、水、水とせがんでいた婦人が、おとなしくなっただと思っただけのこと切れていた。可哀想に、手を胸に組ませてやった。指には大きな玉の指輪と金の指輪がささっていた。どこかの良い所の奥さんだろうと思った。消防団の人が担架を持って来てごさを「ぴらっ」と被せて行った。さつき見た時のようにあの人も、と思うと、なにしろ悔しくなってきました。「お母さん、お母さん」と泣く子ども。時間を待っているような被爆者。

外が騒がしくなった。水欲しさに川に飛びこんだのと、どこの教室から出たかわからないので、係の人が人員を数えていた。呻く声に行って見たら若い男の人、苦しさに悶えている。かすかに手を動かしたので握ってやった。「お母さん」と聞きとれぬような声、しっかりと握った。息を引き取られた、「宮崎」の人だった。

次々と被爆者を捜しに肉親の方も来られる。死体は次々と片付けられた。突然、半狂乱になった中年の女の人が、我が子の名前を呼びながらわめいた。係の人が教室の入口で何か言う。校内の橋のわきに立てられた掲示板に、我が

子の名前があったとのこと、死亡した人は赤い線で引いてあるが、線が引いてないのでここに在ること、一人一人を捜す。

宮崎から来たと言われた時、私は「カーン」と何かで頭を打たれたようだった。「なぜ、十分前に、どうして早く」、お母さんの手を引っぱって裏門の所に連れて行く。やっと捜し当てたと思った親心、十分前に息を引き取るや大八車に捧げ入れられ、どこに行ったかわからない子、子呼びながらご婦人は私の服が破れんばかりに揺さぶり、へたへと床に泣き崩れる。

長崎の学校に進学させ、学徒動員として兵器工場で被爆したとのこと、宮崎よりすぐ両親が駆けつけ、我が子の名を呼びながら、長崎の町を足を棒にして矢上より歩いて捜しながら諫早に着いたのが十四日の昼頃、諫早駅で主人と別れ小学校、中学校、最後にここに来た。ごめんね〇〇ちゃん、張り裂けるようなお母さんの声。「お母さん、子どもさんには最後の水は私が飲ましてあげましたよ。この手でしっかりと握ってやりました。」と言うと、婦人は私の手を顔にすり付けて泣きじやくりながら「ありがとうございまして。〇〇ちゃんお水を飲んで良かったね。」と、ワナワナと震える手で私の手を握りしめる。そして係の人に「ありが

とうございしました。市役所に行ってお骨を分けていただいで帰ります。」と深々と頭を下げて出て行かれた。

一日中我を忘れ、くたくたとなり夜の救護班の人と代わり、朝来た道を家路につく。途中、みんな物も言いません。私は夜眠ることが出来なかった。

十五日の朝も、昨日と同じくすぐ学校の方に行く。死亡した被爆者が教室に二、三人おられる。まだ朝早いので消防団の人は来ていなかった。婦人会の人と交代して私たちは任務につく。

橋のわきに立っている掲示板の名前には、だいぶ赤く線が引いてある。何人かの昨日の人の姿も見えません。係の人が、「赤痢患者が出た。奥の教室には近寄ってはいけない」と言われる。私たちは係の人の言われるままに、汚物の取替え、薬の付け替えの手伝い、湯冷ましと一生懸命に看護する。

係の人から、「今日正午に天皇陛下の放送があるので、手を休めてラジオの前で聞くように」とのこと。

でも次々と亡くなっていかれる被爆者から、手を離すことも出来ません。夕方、婦人会の人と替わりの日間の看護に一生懸命頑張り、くたくたになった足でまた一里余りの道をてくてくと歩いて帰る。七時半頃家に着く。頭が痛く

吐気があってほとんどの人が三日間から一週間位寝込んだ。

今、私は小野島に嫁ぎ、三十七年前の宮崎のご婦人位の年となって、我が子も遠くの学校に進学させ、母親の子を想う心がはつきりとわかりました。あの時のお母さんの血のにじむような目、ワナワナと震える手、しっかりと固く握りしめた感触が今もって私のこの手に、この心に一生刻み込まれています。名前すら聞く余裕はないのでした。

二度とこんな痛ましいことは起こさないようにと私たちに、先亡者は陰で願っておられることと思います。

原爆の犠牲となり、私どもに生き地獄の姿をこの目、この手に伝えられた被爆者、世界の平和を、長崎県人の一員として心から叫びたいのです。私たちはこの人たちの苦しみ、投げ交わされた目、握りしめた手、次の世代の平和の証として、身を持って体験した事実をここに記させていただきます。

『母の代りに救護町へ』

真崎 マサエ（黒崎町）

三月も終わりと成り、桜のつぼみもやっとほころびてまいりました。私は先日より連絡を受けました被爆者救護員の一人でございます。なにしろ三十六年という月日と、当時の恐ろしさは忘れよう、忘れようと努めたせい、大概のことは忘れたようです。

当時を振り返ってみますれば、私は十八、大村女子職業学校を卒業して一年、私の父は当時黒崎消防団の小頭、今の分団長でした。そのため家の農作業は全然出来ず、空襲警報の連絡等、家にいる暇はほとんどありませんでした。私ども若い者は、女子挺身隊としてみんな徴用とかり出されていたのですが、私は戦時農業用員として、家で百姓をしなければならぬのでした。

あの日、母と二人で連ゲ石岳の中腹にある畑に、小豆の草取りに行っていました。B29らしい飛行機が飛んで来たと思つたら空襲警報が鳴りました。母と山の中に隠れていると長崎と見られる所に「ピカッ」と光り、間もなく昼近くというのに、薄暗くなりお日様が十五夜のお月さまのように丸くはつきり見えたので、恐ろしさと、家にいる幼い弟

や妹のことが気になり、急いで家に帰りました。こんなに離れた私たちの所までゴミのような物が飛んできて、洗濯物に付いていたようでしたので、ただ事ではないぞと話していたら、その夜だったか翌日だったでしょうか、町内で各班ごとに婦人会で炊き出しをして諫早に持って行き、手伝いをしてくるようにと伝えがありました。私も母の代りに出て、若い者から諫早の方に行くようにとのことでしたので、現場の様子を知らない私は、挺身隊の友のように働けるぞと、赤十字の看護婦にでも行くような勇んだ気持ちで行きました。

ちようど当時の諫早女学院の辺りを行く時、側を担架に被爆者を乗せた人に会いました。その姿といたら、何にも着せず裸でその火傷の姿に思わず顔を背けました。そして胸からムカツと出てくるのを、思わず手で押さえ、もし軍人さんにも見られたら叱られると思ひ、また被爆した人に悪いと思ひ、ぐっと堪えたのです。それから、現場に着くまで二、三の担架や戸板に乗せられた人と会い、目的地の旧諫早中学校に着き、それからどう連れて行かれたかはつきりしませんが、部屋の中に連れて行かれたかびっくりして飛び出したくなりました。あのくさい臭いは何とも、例えがたく、今思ひ出しても、吐気がしそうです。

それに、呻き声、泣き声、係の人の指揮の声等入り混じり、もう自分がどこにどうしているのかさえわからぬくらい、魂の抜けた人間のように感じた。くさいのと恐ろしさでいっぱいでした。でも来た以上帰ることはできません。ふと近くにいる人を見ると、頭は小さく顔は南瓜のよう、それもチリメン南瓜のようにブクブク腫れておられます。聞けば頭は鉄カブトを被っていたから良かったとのことでした。またある人は、怪談のお岩さんもこんな顔だったろうかと思う顔の人もおられました。今思い出すと、本当にそんな顔ってあるだろうかと思いますが、確かに当時そのように記憶していました。

家に帰っても昼間の臭気が体から抜けず、どうしても食事が取れなかったものです。もう明日は行きたくないと思うけど、人に出勤を頼む父の立場を思うと、また山里町の叔母たちの家族のこともあって、もしや諫早の救護所に来てはいないかと思いきや行きました。顔を負傷されている方が多く、到底見つけ出すことは出来ないと思いましたが、先方が私を見つけて出してはしないかと、出来るだけ部屋の中を手伝いながら廻りました。私たちに出来ることは、水を汲んだり、タオルを洗ったり、汗を拭いてやるくらいの手伝いしか出来ず、時には古い下着など持って行って着

せたりしました。

救護作業も終わる頃、駅で叔父といとこに出会いました。叔母を捜していたが見つからなかったといつて、傷ついた体で私の家に来ました。叔母は親類の必死の捜索にも見つからず、ある夜、肉親に夢を見せ「井戸端を見てくれ」と言ったそうでした。井戸端には畳の焼けた上に電線が落ち、その下にきれいな灰となり、着物の端切と少々の骨があったといつて持って来られたのです。私は、思わず「ああ良かった」とつぶやきました。救護所の被爆者の姿を考え、良かったと思つたのでしょうか。

それから二カ月ほど、また家で被爆者看護をすることになりましたが、救護所ほどのことはありませんでした。黒崎におられた野田医院の先生の手当が良かったのか、傷は早く癒えて日々に良くなり、回復が早かったのです。とりとめもない事を書きましたが、私の記憶はこれぐらいです。ただ、「臭いが辛く恐ろしかった。」の一言に尽きると思います。

『精米機が止まって』

山本 チミ（幸町）

昭和二十年八月九日、その当時私の家は、精粉所を経営しており私も当時人手がなかったので、毎日モンペをはいで、手伝っておりまして。が、光が「ピカッ」と見えたのと同時に、機械がピタリと止まったので、びっくりして外に飛び出して見ました。近所の方々もたくさんおられ、長崎の方面の空を見ると、真黒い煙が、モクモクと出ているのが見えました。もう、みんな大騒ぎで、長崎の方がやられたのだということを知ったのでした。

その夜、家の前の国道を、怪我人らしい方たちが、島原方面へ行かれるのが目にとまりました。多分、原爆にあわれた方たちだろうと思われます。そして、その夜からこの町内にも看護、炊出しと、市の命令で協力したのでした。そうして私は、十日だったと思いますが、町内の同じ班の人四、五人と国民学校に行きました。広い講堂内には、多くの怪我人がおられました。衣服はボロボロ、顔は真黒、外見は傷一つない方など、一目みて呆然とした思いでした。どんな看護をするのか分からなかったのですが、いろいろと注意を受けながら、オシッコをさせたり、寝返りの手助

けをしたり、水を飲ませたり、頼まれる用事をしながら、早く時間がきて交替したい思いでいっぱいでした。ようやく交替の方が見えてその日は、半日で帰りました。

二回目の要請があり、三、四日してから、班の方五、六人と、中学校の体育館へ行きました。

その日は怪我人も、だいぶ減ったという話でした。水を欲しがっている人が多く、前の注意を守りながら、与えてまわりました。

診療に当たられた余瀬医院の先生が来られ、真黒い薬を持って来て、「これを、傷に塗るように。」ということ、注意を受けながら塗ってまわりました。その時にはもう、傷の中に小さい白いウジが食い入っていました。それを、おそろおそろ取ってやったことが、今でもはつきり思い出されます。看病をする目の前で私が見たのは、二、三人の人が息絶えられた時、男の人たちが荷札に名前を書いて、足の親指にくくりつけ、担架に乗せて外に出し、ムシロを被せて、土間に寝せられたことです。

ようやく夕方になり、帰り仕度をして一緒に行った方たちと、体育館を出て土間に来たとき、教室の入口に「重病患者」と書いてあり、中を覗いて見ると、椅子を四方に積んでかやが吊ってありました。中から声がして、「自分は、

矢上の者で、父と姉と田の草を取っていた時、こんな目にあつたので早く父と姉とを捜して、ここにいることを知らせてくれ。」と頼まれたのですが、叶えてやることができず、水だけ、かやの裾をおそろおそろ開けて、やって来ました。暗くなりかけた道を、本諫早駅前を通って帰って来たことを、思い出します。

『町内会の指示に従い』

園田 松枝（立石町）

八月九日

朝から、松やに採取作業のため諫早市郊外、駄森の山に行く。松やに採取作業に夢中になっていると、西南の方に飛行機の爆音が聞こえ、その方向を見ると「ピカッ」と光るとすぐに「ドン」と大きな音がして、瞬間その場に伏せてしまった。もうすぐお昼になるから、ぼつぼつ山を降りようとする、空は黄金色になり、次第に空から雨が降りそうなので急いで帰る。

夕方になると、町内会長から「長崎市に新型爆弾が落ちて、長崎は全滅。死傷者が多く、諫早に続々死傷者が運ばれるので明日は町内全部看護に出るように」伝えられた。

八月十日

諫早国民学校に行く。小学校の收容所では、ムシロなど敷いて寝かせてあり、足の踏場もない。何とも言えない臭いがする。あちこちから「水…」、「水を…」と叫ぶ。驚いていると、次から次へと被爆者が運ばれてくる。顔は真黒、シャツはちぎれて、触ると皮膚が破れ、手にべたついて気持ちが悪。水をやったり、便所などの世話をする。食事

は粥食で、さかづきにすくって口に流し込む。初めての看護なので、要領がわからず疲れて家に帰る。

八月十一日

町内会長より、明日十二日は永昌の海軍病院に行くように言われた。

八月十二日

朝八時頃、刑務所前集合。上野町の人と合流して海軍病院に行く。收容所の入口で死体を男の人が運んで行く。先刻息を引取ったという。合掌して冥福を祈る。收容所に入ると臭気がプンプン異様な気持ちである。「水：水」とあちこちから叫ぶ。三十五歳位の女の人が排便を訴える。三人がかりで用を足させる。こちらでは四十歳位の男の人が、顔は真黒で焼けただれて水を欲しがらる。口を開けるのがやつとで水を流しこむ。寝返りを訴える人が多いので手伝ってやる。

このような人の看護だから相当に疲れて、家に帰っても何もする気にならなかつたように記憶している。

八月十三日

十四日は諫早中学校に行くように町内会長より言われた。

八月十四日

八時頃、刑務所前集合。諫早中学校（旧制）に行く。こ

の收容所は重傷患者が多く、收容所の中は相変わらず臭気が強い。收容者のほとんどが、背中、顔等ただれ、背中など真黒になっていた。子ども一人と母親の姿が目についた。母親は重傷の身もいとわず、苦しそうにして子どもの世話をしている。かわいそうに思い、排便、水、食事などの時に気を配ってやる。今日は特に傷の痛みを訴える人が多くなつたようだ。よく見ると傷にウジ虫ができて、傷跡に深く入り込んで、紙で取り除くことも困難なくらいで、口では言えないくらいでした。

重傷の患者は、海軍病院に移すことになつたので、担架に乗せるのを男の看護人に手伝う。

八月十五日

明日十六日は夜、諫早商業学校に行くように、町内会長より指令があつた。

八月十六日

午後八時より翌朝まで諫早商業学校に行く。ずいぶん慣れたとはいえ、蒸し暑さと悪臭で息がつまりそう。夜間のためか男の人が多く、私たちは、ただ水を欲しがらる人に水を飲ませたり、団扇で扇いでやつたり用便の手伝いをする。夜が明けて家に帰る。

『脳裏に焼きつく三日間』

上松 タツエ（永昌町）

八月九日

とても暑い午後でした。空襲警報が解除になりホッとひと息ついて、七カ月になる娘に乳を飲ませていると、突然「ドーン」と大きな音がしたかと思うと、目の前の国道を、真赤に燃える火の玉が「ゴーツ」と、転がっていくではありませんか。爆弾が、すぐ近くに落ちたのに違いないと思いい、とにかく子どもを、三人の子どもを防空壕へ。無我夢中でした。

しばらくすると、壕の外に人々の騒ぐ声がします。見ると、空一面が真赤に燃え、私の足元までも真赤に染めたのです。

と、あつという間に、燃える空は一面黒い雲に覆われたように、不気味な暗さになったのです。そしてそこには、ただ、膨張して何倍も大きくなったような太陽だけが赤く、赤く、燃えていました。訳の分からぬ恐ろしさにあ然としていると、誰かが突然「フーセン爆弾だ！」と言い出ししました。すると皆、口々に「フーセン爆弾だ、フーセン爆弾だ！」と、騒ぎ出してしまったのです。三時頃だったでし

ようか。父の知らせで、長崎に爆弾が落ちたことを知りました。その時は「原爆」などという言葉さえ、よく知らなかったのですから、それからが大変でした。

それぞれの班の婦人たちは、救護に行く者、炊き出しをする者にと別れ、私も救護団の一員となって、駅への道を急いだのです。駅は、大混乱でした。消防団員や駅員の方々が、総出で汽車の中の負傷者を抱えては、ホームに寝かせておられます。その負傷者の方たちを目前にして、あまりの惨さに、声も出ませんでした。髪は焼け、着衣は破れ、顔や身体は赤く黒くただれ、異様な臭いが漂い、「水を、水を…」と、呻く声、声、声…。まるで、生き地獄を見ているようでした。救護団員の中には、気を失う人や嘔吐する人もありました。

私たちは、言われるままに用意してあった担架で、負傷者を諫高の校庭まで運ばなければならなかったのです。最初に運んだ方は、五十歳位の男の人でしたが、顔も形も分からないほど焼け、目は飛び出し、鼻はグシャグシャで、つい顔をそむけそうになる自分を、制することは出来ませんでした。肩の皮がズルズル剥けるので、消防員の方に手伝ってもらい、やっとの思いで担架に乗せたのです。途中、聞きとれぬような小さな声で「水を…、水を。」と、うなっ

ておられました。校庭には、何人もの負傷者の方が、ムシロや藁の上にゴロゴロと寝かされておられました。駅に戻ると驚いたことに、ホームは負傷者、いえ被爆者の山。あちこちで「水を…水を…」と言う声―。

息絶えてゆく人たちの姿も、ここで見られました。二度目に運んだ方は、中年のご婦人でした。着衣は破れ、髪は焼けていましたが、最初の方ほど酷くはありませんでした。ただ、担架の上で「坊ヤアー、坊ヤアー」と泣いておられたのが、哀れでした。その後、三人程運びました。

帰宅したのは、七時頃だったでしょうか。もう日暮れでした。ぐったり疲れが出てしまい、何をする気にもなれず、まだ、臭いが体中に染み付いているような気がして、その日は夕食もとれませんでした。

八月十日

班から三人、海軍病院へ派遣されました。九時頃、病院へ着くと広い部屋へ通され、そこには、幾つものベッドが並んでいました。私は、端から三番目に寝ておられる男の人のお世話をしようと言われました。包帯を全身に巻いた、四十歳位の方でした。おかゆを食べさせたり、薬を飲ませたり、下の世話をしたり、回診時には、看護婦さんと二人がかりで包帯を解いては、薬を塗ったり。

また、手が空くと、他の二人の患者さんの下の世話をしたり、体を拭いたりして、一日を過ごしました。帰宅したのは、五時頃でした。

八月十一日

班の方四人と、海軍病院へ行きました。昨日と同じ部屋へ通され、四人の患者さんのお世話をすることになりました。包帯を解くとき、「痛いー、痛い。」と泣く人もいましたが、どうすることも出来ず、ただ薬で真赤になった体を、だまっで見ればかりでした。手に軽い火傷をした五歳位の男の子が、病室を歩き回っていました。いつの間にか病室を抜け出て、長い廊下をどんどん歩いて行くではありませんか。先日運んだご婦人の「坊ヤアー」という声を思い出し、慌てて追いかけて行くと、ちょうど、角に病室があり入ろうとすると、看護婦さんに固く止められました。水兵さんの病室だから、立入禁止とのこと。

坊やを抱いて病室へ戻りましたが、母親にはぐれたのではないかと、気がかりでした。その日の帰り、何気なく病院を振り返り、見ると奥の方から煙が見え、何かと思ひ尋ねると、「あれは、亡くなられた被爆者の方々を、焼いておられるのよ！」と言われ、なんとも重苦しい気持ちで、帰路につきました。

私の父は、九日は駅に十日からは女学校にと、ずーっと詰めており、朝夕の食事のために帰宅するだけの毎日でした。長時間、被爆者の方たちと接していたため、丈夫だった父が、その後急激に衰弱し、十分な診療も受けることなく、とうとう白血病で昭和二十五年一月二十五日、六十二歳で他界しました。この三日間は私にとって、生涯忘れられない出来事として、永遠に脳裏に焼きつき、離れることは無いのです。

『火葬』

音瀬 信行（本野町）

昭和二十年八月九日、その日は目代青山組合の麦の供出日でした。突然、長崎上空で「びかり」と大きな光が出たかと思うと、間もなく近くに爆弾でも落ちたような音がしました。みんなびっくりして、早く仕事を済まし家へ帰りました。

八月十日は、近所の人達と話しながら農作業にも手がつかずにおりました。午後、当時小山の警防団の役員をしておられた野口郡平氏より連絡があり、八月十一日午前八時諫早市営火葬場へ、長崎の被爆者の死体が運ばれて来るので、死体火葬のため出動するよう連絡がありました。

八月十一日午前八時、市営火葬場へ各人が、前打、ツルハシ等の道具を持って集合いたしました。宮田源一郎、松下幸四郎、山口数義、古賀正信、古川好春、野口重夫さんたち他数名の団員で、仮火葬の穴を話し合いながら数個掘りました。昼食は、婦人会の炊き出しのおにぎりをもらって食べました。

午後より人員の手分けをして、古材運び、死体火葬等、死体はどんどん運ばれて来ますが、火葬はなかなかかはかど

らず大変困りました。夕方七時頃までで作業を切り上げ帰りましたが、翌日も出勤するよう指示がありました。

八月十二日、昨日に引続き午前八時火葬場に集合し、昨日の団員他、本明分団員が数名加わり、団役員の古賀三四郎さん他八名位で薪の運搬や、学校病院等から亡くなられた人の火葬にあたりました。また死体はどんどん運ばれて来る。時間が経つにつれ腐乱は酷くなり、臭いは鼻をつく等、古材に乗せるにも汗は手や足にも附着して大変困りました。その日も数十体火葬し、夕方七時頃仕事を終わり、翌日も出勤するよう指示があり家へ帰りました。

八月十三日、昨日同様八時集合、先日の残りの死体はますます傷みが酷く、火葬場の庭を上り釜まで運ぶのにムシ口を敷き、四人程で運びました。とても現場で仕事をしてみない人には想像もつかないことです。現場で毎日昼食を食べると言われてもあまり食べられませんでした。その日も五十体位火葬したでしょう、当日も無事仕事を終わり、翌日より他の分団と交替でした。午後八時頃引きあげ、家路につきました。

三日間の作業で、団服は汗と臭いでとても大変でした。川に一週間位浸し洗濯して、昼となく夜となく数日間干して、臭いを取りました。

『五百人位の被爆者を』

東川 ミサノ（本明町）

私は、昭和十七年三月から諫早市役所に勤務しております。原爆が投下された当日は、仲沖名の市有田の田の草取りに出役し、六、七名で作業中でした。爆音が聞こえたので、みんなと土手に伏せてしばらくしたら「ピカーツ」と閃光がしたかと思ったら、大きな火の玉のような物が降下して、今度は、空に向かって上昇したような（瞬間的）感じがしました。その後、空の太陽は、夕焼のように燃え、その異状さはどうしたんだろうかと話して、空の方ばかり見ておりましたところ、落下傘のような白い物が三個落ちているのを見ました。

心配しながら作業を続けていたら、午後四時頃ではなかったかと記憶しますが、早く帰庁するように連絡がありましたので、市役所に帰りました。庶務係の友達が、目を赤くして私たちの方に来ますので、どうしたのかと聞きますと、「長崎で被爆を受けた人たちが、送られて来ているがそれを見たらもう涙が先に出て、どうしたらよいか分からない。髪はちぢれ、顔は黒く焦げて誰かの判別もつかないような人たちばかり。」と言うので、私たちもびっくりしまし

た。それから救護所との電話連絡とか救急用品の準備等で遅くまで市役所にいました。

八月十日は、午前八時頃に出勤しましたが、昨日から夜どおし被爆者が、汽車とかトラックで送られ旧諫早女学校（現在諫早商業高校）、旧農業試験場、旧諫早中学校（現在諫早高校体育館旧建物）、旧諫早小学校講堂（現在市役所）に収容されているから、看護に行くうに言われました。私は、他の女子職員五く六人と炊き出しのおも湯をバケツに入れ、棒に下げて二人一組で持ち、途中で空襲警報のサイレンが鳴ると避難したりして、当時の諫早女学校から各救護所をまわりましたが、初めて被爆者を見て想像以上の悲惨さに、しばらくはどうしたらよいか分からない位でしたが、おも湯を持って行ったことが分かると、あちこちから早くくれと言われて重症の人には、上半身を起して飲ませ、軽症の人には、おにぎりを取ってやり、また水をくれという人があり、走りまわらなければなりません。私が世話した患者は、一カ所で十五く二十人位だったと思います。どこの救護所もこんな状態で、市役所へ帰ったのは、午後九時頃だったと思います。

八月十一日、今日も午前八時頃出勤し、昨日と同じ職員とまた、おも湯等持って各救護所をまわりました。昨日よ

り患者が増し、また暑さのため具合が悪くなる者が多くなり、昨日まで座っておにぎりを食べていた者が動けなくなったりして、食事をやるにも手がかかり、便所に行けないので、便器を持って行ったり、また、下痢して着物を汚したから取り替えてくれと言われ、私一人ではどうにもならないので、他の女子職員と一緒に取り替えてやりました。とくに女学校は、駅に近い関係もあつてか重症者が多く、朝鮮の人で半裸で仕事をしていたらしく、上半身の火傷が酷く、皮膚はベラベラで衣類の取り替えにも痛みを訴えるので、看護するのに大変困りました。

帰りは薄暗くなっていたので、九時頃ではなかったろうかと思えます。

八月十二日、昨日と同様の勤務でしたが、日が経つにつれて重症となり、暑さのため体の焦げ傷の所が腐り始め、皮下にはウジが湧き臭気が出始め、マスクは一日三回ぐらい取り替えても臭いが染み込んで、自分が具合悪くなるようでした。死亡者も多くなり、死体は三く四人がかりで出口の方に運び処理しました。各救護所も同様で重症者の呻く声。早く来てくれ、というので行ってみれば、「ウジが目に入っている。耳に入っている。ハエが付いて痛い、早く取ってくれ。」と、それで、剥がれた皮膚を摘み上げチリ紙

を折って取ってみるがなかなか取れない。それでなお暴れるので困りました。そうしていると一緒に行った職員で、子安順子さん（現在死亡）が、「東川さん早く来て下さい」と呼ぶので行ってみると、ウジを取っているが取れないので、取ってみてくださいと言われるので取ってやりました。この日も、私を取り扱った患者は、五十〜六十人以上であったと思います。帰りは前日と同じく九時頃でした。

その後も八月末日頃までだったと思いますが、日曜の休みもなく前記同様、被爆者の看護に当たりました。日が経つにつれて皮膚から腐りが酷くなり、着物の取替や用便にも一人では出来ず、他の女子職員にも手伝ってもらい、そつと抱えるようにして取替えてやりました。朝は八時頃から午後九時頃までの毎日でしたから、自分が疲れてしまい、食事臭気はなれず思うように取れませんでした。

こうして八月十日から八月末日頃まで、私が看護に当たった人は、延べ五百人以上ぐらいだったと思います。今、考えるとよくあれだけの看護が出来たものと思います。

九月に入ってから総務課庶務係であったため、警察署と連絡を取り、遺族へ遺骨の引き渡しなど相当期間、残務整理に当たりました。

- ◆ 今回掲載している体験談は、諫早市役所公式ホームページでもご覧いただくことができます。

アドレス <http://www.city.isahaya.nagasaki.jp/post06/422.html>

戦争のない未来へ～子どもたちへの伝言～

平成27年6月発行

発行 諫 早 市

編集 諫早市政策振興部企画政策課・諫早市人権教育研究会

〒854-8601

諫早市東小路町7番1号

TEL 0957-22-1500 (代表)